

---

# 僕の魔法

Gさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の魔法

### 【Nコード】

N56760

### 【作者名】

Gさん

### 【あらすじ】

王国バルバーレとユルグ教国の戦争が始まった。ユルグに滅ぼされたアスマン国の住人、ウティホ夫妻と少年キリムは、途次で知り合った青年ジョークと共にバルバーレを支援しようと奮闘する。天才術士として開花するキリム。一方、ジョークには誰にも話せない別の目的があった。架空の大陸を舞台としたジューブナイル。

## 第一章

有史以来、旅人を見守ってきた森の大路。もしも路に感情があるなら、この有様をどう思っているだろう。かつての貿易行路も今は轍すらなく、人馬に代わって落葉と石塊が覇を唱えている。もう春が訪れつつあるというのに。

今日は珍しくも、その路上に人がいる。旅人なのは確かであるにしても、いかにも小さな存在だ。一行は僅か三人で、しかも徒歩で森を越えようとしている。大陸南端の小国『アスマン』の地から、大陸中央を目指して北上しているのだ。

先頭に行くのは少年である。鞣し革の外衣コートを纏い、フードで顔を隠している。思春期に入るかどうかの年齢で、身長は歳を勘案しても小柄だ。外衣と同じ灰銀色の目と薄金の髪。それは耳を隠す程に長く、万遍なく波打っている。

その少年に中年の夫婦が付き従う。男は羊毛を編んだ外套の上に背負子を担いでいる。女は刺繍の入った木綿服一枚という軽装で、それでも汗を掻きながら歩いている。

暫くすると行路は分かれ道となった。マンジャロウ山脈を避けて二股に分岐しているのだ。東へ行けば『バルバーレ国』へ。西に行けば『ユルグ教国』へと繋がっている。

少年が歩みを止めた。

中年の女が話し掛ける。

「キリムや、どっちに進むんだい？」

「僕にも分からないんだ。ノンモ」

少年は、そう応えるのが精一杯であった。

もう一人の従者、ウティホが助け船を出す。

「ノンモよ、お前は太っているから疲れただろう。取り敢えずここで休むとしよう」

妻はその言われ様に慚然としながらも、内心では喜々として岩に腰を下ろした。

「お前が腰を下ろしたのは道祖神の石像じゃぞ」

「ちゃんと拝んでから座ったさ」

拝めば済む問題ではないと言い掛けて、夫は反論を諦めた。背負子を下ろし、それに腰掛けて大きく溜息を吐く。

「坊よ、西か東か、決めなくてはなるまいて」

「どちらに進むとしても、僕のすべき事に変わりはない」

この自暴自棄とも思える態度がウティホの癪に障った。

「ここで待っていていれば誰かが決めてくれるとでも言うのか！」

「好きにさせておやりよ。ここで一泊して、朝になれば結論も出るだろうさ」

妻がいて有り難いのはこんな時だ。男二人ではいつも堂々巡りになっってしまう。

「……そうじゃな。それでは食事にするか」

ノンモは「きゃっ」と短く快哉を叫んで、早速手を広げて待っている。夫は背負子の中から焼き締めたパンを渡した。少し離れて木の根に座っているキリムにも渡す。

「坊、さつき『するべき事に変わりはない』と言っておったが、それが復讐の事ならば考え直してくれよ。誰もそんな事を望んじゃおらんのだから」

パンを口に含んでもゴモゴと発音しているが、ウティホの目は真剣だ。

「それも分からない」

そう呟いてから、キリムもパンを噛み締めた。

これが彼らの悩みの種である。もう若くはない夫婦の数少ない望み、それはこの少年が平和のうちに、幸せに暮らすという一事のみ

である。どうやらキリムにはそのつもりがないらしいのだ。それに野宿するなら薪と水の確保をどうするか。これも難問だった。

ささやかな食事でも後少しで終わろうとする頃、状況が変化した。行路を横切る風が吹き渡り、汗臭い獣の臭いを運んできたのだ。

少年は二人に目配せし、フードを外して耳をそばだてる。

ウティホは残りの一切れを口に入れて、腰の物の縛りを解いた。ノンモはウティホの影に隠れる。食べ掛けのパンはしっかり握り締めたままだ。

暫くすると、下草をガサガサと揺らしながら身形の悪い男が現れた。寒そうな薄手の麻を纏い、ひよろりと背が高く、茶の髪を無造作に伸ばしている。

その男が両刃の剣を肩に乗せて、斜に構えて言い放つ。

「よお、三人さんでご旅行かい。今時、護衛の兵も従えずにこんな辺鄙なところまでくるたあ物好きなこつた。教えておいてやるよ。万事は命があつての物種だ。おまんま喰うのも金を稼ぐのも生きる為。てめえの命よりも大事なものなんてありやしない。違つかい？ さあさあ、取り敢えず荷物を全部寄越すんだな。お行儀良く渡したなら、命まで盗る事はないだろうよ」

物取りにしては長台詞だ。

ウティホも黙ってはいない。

「やあやあ山賊め、名乗りも上げず戦いに挑むとは片腹痛し。このウティホ、争い事は好まぬが無礼者を容赦するほど腑抜けではござらん。見よ、この業物を。地中深くから掘り出したる鋼をアスマン火山の業火で鍛えし一品なるぞ。貴様の段平なぞ鈍器に等し……」

「うりゃー」

山賊が突っ込んできた。

ウティホは慌てて叫ぶ。

「ま、待て待て待てえーい。まだ名乗りが終わっておらんぞ」

「そいつは待たなきゃならんのか」

「当然じゃ」

「そりゃ済まなかった。ではどうぞ」

「ええと、どこまで喋ったかな。忘れてしまつては致し方ない。やあやあ山賊め」

「おっさん、そこからかい」

「おっさんとな。儂にはウティホと言う立派な名前がある。貴様にはたっぷりと説教しなくてはならん様だな」

「かーっ、説教か！ 懐かしいな。死んだ親父にされてから何年振りだろう。是非ともその説教を聞かせてくれよ」

「何とな。存外、素直な奴じゃて」

キリムとノンモは暫く呆然として見ていたが、並んで道祖神に腰を下ろし、食事を再開する事にした。馬鹿馬鹿しくてこれ以上は付き合えない。

ウティホは自慢の剣を納めて、悦に入りながら説教を続ける。

「山賊よ、勇者たる者は正々堂々と戦わなくてはならん。それに礼儀を覚えぬとな。まずは名乗りを上げ、相手の名乗りをちゃんと最後まで聞いて『いざ戦わん』と声を合わせてから組み合うのじゃ」

「そんな決まりがあつたんだ？」

「うむ、知らなかったのならは許してやろつ。それに組み合うにしても、まず柄を胸に当てて一礼し、互いの切っ先をkachariと交差させて、それから始めるんじやよ」

「面倒な話だ」

「手続きは何でも面倒なものじゃ。ここまで理解したなら、お前は立派な兵士じやて」

「いやー、良い事を聞かせて貰った」

「但し、この礼儀を破っても許される者もある。法術士じゃ。連中

は剣を持たぬからの」

「魔法使いの事か？」

「そうじゃな。ユルグ教の聖職者で、神々の力を僅かながら使えるのが法士じゃ。そしてバルバーレの巫覡じゃな。連中は術を使う術士じゃて」

「それはどう違うんだ？」

「法士は経を唱えて法力を発揮すると聞く。一方の術士は、神々に『贄』を捧げてその力を借りる者の事じゃ」

「そいつらは強いのか？」

「うーむ、人によるかの。並の法士ならば目眩を起こしたり足をもつれさせたりするのが関の山じゃな。稀人ならば火を起こしたり雷を降らせたり、怪我の治りを早めたりもできるらしい」

「もう一方は？」

「術士は贄の種類や多寡で力が変わる。野生の獅子を倒して贄にすれば、獅子を倒した時と同等の力を術として解放できるのじゃ。そう聞けば恐ろしいが、その者は術を使わずとも獅子を倒せるのじゃから、最初からそれだけの力がある者なのだし、術を恐れる前にその者の実力を恐れるべきじゃろうの」

「何だかおつかねえな。そんな危ない連中がごろごろといて、それで名乗りもせずに突然グサリとくる訳かい」

「ごろごろもおりやせん。大陸全土を見渡しても、戦いに参加できる程の者は百名もおらんじゃろう」

「たった百人かい。無視してよい数字だな」

「お前は飲み込みが早いな。名前を聞いておこうか」

「俺は『ジョクー』ってんだ」

「国はどこだ？」

「ユルグ教国さ」

三人はぴくりと反応した。

ウティホは平静を装い、続けて聞く。

「どうして山賊をしている？」

「親父は武官だったんだ。かなり偉かったと思う。でも四年前の戦争の時、頑なに参戦を拒否した。お陰で周囲からは悪者扱いさ。それから擦った揉んだあって、拳句の果てに死んじまった。それで俺は親父の遺言通りに山に入って山賊になったんだな」

「どうして親父様は息子を山賊にしたかったのだ？」

「よく分からん。でも最後の言葉は『この国を一刻も早く出奔しろ』  
『暫くは山賊にでもなって身を隠せ』だったよ」

三人に安堵の表情が浮かんだ。

ノンモが少年に尋ねる。

「キリム、待っていたのはこの男かい？」

「うゝん」

少年は小首を傾げる。その様子を見て、山賊のジヨクーが少年に興味を示した。確かにちっちゃな子供だが、その寂しげな目付きが気になる。

「なあ、ひょっとして坊ちゃんはその魔法使いなんじゃないのか？  
服装がそれっぽい」

「君は物取りを諦めたの？」

「おお、代わりに知恵を貰ったからな。親父がよく言っていたんだ。  
『知恵か物ならば知恵を選べ』ってな。ところで俺の質問にも答え  
てくれよ」

「僕はただの子供だよ。法士でも術士でもない。なるつもりもない」  
少年にしては力の入った口調だった。

ジヨクーはそれで納得した訳ではなかったが、人懐っこい笑顔を  
作って、それ以上は問い詰めなかった。

ウティホは彼にもパンを渡し、食べ終われば薪を集める様に指示  
している。どうやら旅に同行する者が増えた、という事らしい。

山賊にしては働き者だ。手際よく大量の薪を集め、どこからか清  
涼な水を汲んできた。



ノンモは手早く茶を沸かし、乳酪<sup>バタ</sup>を少しと砂糖をたんまり入れている。今や人通りのなくなつた貿易行路の分岐点で、焚き火を囲んでのお茶会となつた。

ジヨクーは茶を啜りながら感心している。

「こりや豪勢なもんだ。甘い茶なんて久し振りだよ」

「そうかい？　だつたら幾らでも飲みなよ」

ノンモが軽い調子でそう応えた。

「山賊を歓待してくれる旅人がいるなんて、聞いた事がないな」

「ただの山賊なら、うちの旦那が伸しているだろうさ。でもお前さんは違う。私らにとつちや恩人みたいなもんだからね」

「そりや、どう言う意味だ？」

「私らは『アスマン』の住人だつたんだ」

「ああ、アスマンか。聞かせてくれよ。どんな国だつたか」

「昔はね、この大陸には三つの国があつた。そして互いを尊重しながら戦争をしていた。おかしな表現だけれども、ちょうどそんな感じだつたんだ。小競り合いは続いていたけれど、どの国もそれを反乱分子のせいにしていたし、三国間での交易は盛んだつたよ」

ノンモは茶の様子を見ながら話を続ける。

「私らの国アスマンはね、三国の中で最も小国だつたし、争い事よりも商売が得意な国だつた。住む者の四分の一は商人、四分の一は職人、四分の一は農民、残りが貴族と王族、それに兵士って割合でね」

「ちよつと待つた。それじゃあ支配階級の人間が多過ぎないか？」

「いいや、貴族や王族も平素は商売を生業にしていたんだよ。言い換えれば商売で成功した者が貴族階級になれたんだ」

「まさしく商いの国だつたんだな」

「そうさ。バルバーレから香辛料に茶、毛織物、陶器、珍しい果物なんかを買い入れ、ユルグからは小麦に葡萄酒、綿織物、家畜を仕入れる。そして他方に売っていたんだよ」

「それでピンハネをしていたのかい？」

「人聞きの悪い事を言うんじゃないよ。いいかい、大陸中央には南北にマンジャロウ山脈が連なって大きな壁を作っている。そのお陰で東側と西側の交易は北か南の端とするしかないんだ。南にはアスマンがあつてそれを平和裏に行なっていた。しかし北には中継する者がいないだろう？ だから値付けで争いが絶えなかったし、小規模とはいえ戦役にまで発展した事もあった。それに交易だけじゃない、ちゃんと物作りもしていたんだよ。火山の麓では鉱物や宝石が採れる。それで刃物や装身具を作っていたし、交易の必需品でもある馬車や馬具、あとは織機なんかも殆どがアスマン製だったんだ」

「悪かったよ。ピンハネなんて言つてさ」  
「まあ、そんな感じで平和だった。でもそれが変わってしまった」  
「どうして？」

「東の国バルバーレでね、水耕が始まったんだ。『米』という新しい穀物が遠くから伝わつて、それを大規模に栽培し出した。湿地の多いバルバーレには適した作物で、小麦と違って年に二回も収穫できる。それで小麦を買わなくなった」

「その話は聞いた事があるな」

「そうなるとユルグは小麦を売る相手がいない。要請もあつて、アスマンは懸命に買い続けていたさ。でも限度がある。結局小麦は余つてしまい、値が暴落した」

「そして戦争になったのか」

「ユルグが逆恨みしたんだ。小麦の暴落は交易者のせいだってね」

「ここからは儂が話す」

ウティホがこれ以上は耐えられない様子で口を挟んだ。

「ユルグが戦争の準備をしている事は知っていた。それもかなりの規模でな。交易を生業にしている同胞は大陸中におるから、情報を集めるのは訳もない。そしてアスマンへの侵攻が近いと悟つた」

「でも、どうしてアスマンが相手だったんだ？」

「そつじやな。家内の言つておつた逆恨みの件が一つ。もう一国の

バルバーレが強大で易々と戦争できない事が一つ。それにアスマンの蓄財が欲しかったのかも知れん。でも本当の目的は違う。ユルグでは小麦の暴落以降、国内の暴動や反乱が頻発していた。それをなだめる為に戦争をしなくてはならなかったんじゃ。民衆に外を向かせ、同じ目的を持たせて国を保つ為にな」

「そんな理由で戦を吹っ掛けられたんじゃあ、アスマンはやってられねえな」

「そうとも。だからこそ無為に負ける訳にはいかん。儂らも必死になつてその準備をした。職人は胛おおもみや甲冑を作り、それを持つて参戦した。農民は牧草を刈る大鎌を担いで、商人達は馬車から馬を外してそれに跨り、鎧を備えて臨んだ。皆、慣れない戦事に懸命になつておつたわ」

「総力戦だな」

「一国を挙げてのな。それでも兵力はユルグの半分にも満たなかった。しかし戦は攻める方より守る方が有利。負けるつもりなど微塵もなかったわい」

「旦那はどうしていたんだ？」

「儂は兵士達の総大将じゃった。兵士にはな、隊商キャラバンを護衛する者、国境と街を警備する者、それに近衛兵がおつたが、その全てを経験した者は少ない。それで儂に纏め役が回ってきたんじやろうな。最前線は信頼できる知己に託して、儂は城を守つておつた」

「前線の戦況はどんな感じだった？」

「悲惨、その一言じゃ」

「かなりの人死ひとつにが出たそうだけれど」

「敵も味方もな。二国の国境は牧草が茂る緩やかな丘になっておる。そこには偽の交易者が出入りせぬ様にと長い防壁が設えてあつて、儂らは櫓を拵えて敵を待ち受けておつた。敵は城まで一気に攻め込むつもりだったろうから、面食らったじやろうな。それでも進軍を止めなかった。無為無策に突進してきたんじゃ」

「それじゃあ弓で狙い撃ちにされてしまう」

「その通り。弓矢で一人一人を打ち据えていった。敵は殆どが歩兵で、皮の胸当てに槍一本の者ばかり。たとえ背丈の二倍程度しかない防壁でも、梯子を掛けるか壊してしまわねば越えられない。当然、壁の前は敵の遺骸の山となった」

「それでどうして負けたんだ？」

「敵の屍が折り重なり塊となると、突如、轟こうと火柱を上げて破裂したんじや。防壁は瓦解し、櫓は吹き飛び、味方は総崩れとなった」

「油でも仕込んであったのか？」

「いや、法士の仕業じや。俘虜にした兵士を調べてみると、その誰もが完全に呆けておった。言葉も喋れず目も虚ろ、獣の様に涎を垂らし唸るばかりのな。そして胸の真ん中に古代文字で焼き印が施してあった」

「それが手妻の種かい？」

「手妻ではなく法術じやよ。法士が兵の身体から魂を抜き、突進するだけの生きる骸にして、頃合いを見計らってそれを破裂させる。全く、残忍な戦い方じやわい」

「親父が拒否する訳だ」

「多くの者はそれと知らずに術を掛けられてしまったんじやろうな。お前の親父様はその事を知っていたんだろ。だから、自分の部下をそんな目に合わせたくなかったんじやろうて」

「当然だ」

「そうとも。お前の親父様は正しい」

「それからどうなったんだ？」

「味方の兵士達は幾度も退却戦をやったのけた。しかし敵の消耗と味方の消耗はほぼ同じ。そうなれば数で勝る敵が有利になってしまふ。とうとうアスマン城での攻防戦になってしまった」

「旦那の出番だ」

「そうじやな。僕は楼閣から敵の動きを見つつ指示を出していた。家内も頑張っておったぞ。薬草庫が空になるまで負傷兵の手当をしておった」

ノンモはようやく出番が回ってきたかと喋り出す。

「敵はまるで人形みたいな連中でさ、気味が悪かったよ。でも敵味方関係なく手当てした。敵兵はまず焼き印を潰して、それから傷を治してやったんだ。布も薬草もすぐに無くなつて往生したけれどね」  
語り部がウティホに戻る。

「敵の攻勢には限度がない。それもそうじゃろう。人形なのだから恐れる事も疲れる事もない。こっちはさすがに休まなくては続かんし、敵を恐ろしいと思う心もある。やがて守りに手拔かりが生じる様になり、城壁には幾十もの長梯子が取り付き、城門は大矛で突き崩されてしまった。そうなれば一気呵成に雪崩れ込まれるばかりじや」

「そして降伏したのか」

「儂は国王に降伏を進言し、塔の屋根に白旗を掲げた。それでも敵は攻め込んでくる」

「降伏を受け入れなかったのか！」

「そうじゃ。敵兵は全員が死ぬまで進み続けた。攻城戦が終わっても街や村を焼き尽くすまで」

「馬鹿な話だ」

「全くな。それでも幾許かの民は生き残つておったが、野ざらしのまま放置された敵味方の遺骸が疫病を生んで、アスマンは完全に消滅したのじゃ」

「旦那方だけでもよく助かったもんだ」

「儂もそう思う。国王夫妻がな、養子になさつたこの少年を生きて連れ出してくれと申されてな、御子らと共に身代わりになつて敵の矢面に立たれたんじゃ。そして儂らだけがおめおめと生き残つてしまった」

キリムは焚き火に顔を照らされながら眠っている。何を話しているのか分かるのだろうか。時折、寝苦しそくに呻き声を上げながら。

ジヨクーはすっかり感じ入ってしまった。

「立派な王様だ。なかなかできる事じゃないぜ」

「そうとも。勝れた統治者で、同時に優しい方じゃった。この少年は夫妻の大切な友人の忘れ形見でな、大切に育ててらっしゃった」

「まあ、生き残れて良かったんじゃないか？」

「そうばかりでもない。儂らは疫病を避けて山村で暮らしておったが、同道した娘も娘婿も病に取られてしもった。そうして村は解散じゃ。皆他国へ逃げ出した。残る一家三人だけで耐え暮らして四年、この少年も十二になって元服したんでな、儂らも国を破る事にしたんじゃ。恐らく、アスマン国最後の住民だったのじゃがな」

「そうか……」

「儂らばかりが辛い訳ではない。大陸中に散っておる交易者達も、もう戻る国はない。皆どこでどうしている事やら」

「まあ、どこかで遅しく生きているだろうさ」

「お前さんを見ているとそう思えるよ」

少し涙ぐんでいたウティホの顔に笑みが戻る。

長話をしている間に、とつぷりと夜が更けてしまった。ノンモも眠っている。ウティホは自分の外套をそつと掛けてやった。

二人は残りの茶を分け合い、冷えた地面に横になる事にした。

ジヨクーは眠れそうもない。ユルグ軍の高級武官の子として育った身である。四年前の戦争については詳しいつもりだったが、アスマンの側から話を聞いたのは初めてであった。それは想像よりも惨たらしく、最後まで反対し続けた父の正しさを証明していた。

父の残した妄言の如き遺言は真意を測りかねるところがあつたが、ようやく腑に落ちた気がする。遠回しに「旅をせよ」と言いたかつたのではなかるうか。外から国を眺めてみる、と。どうせ眠れない夜ならば、不幸に見舞われ続けた三人がこれ以上凍えない様にと、焚き火を見張りながら夜を過ごす事にした。

朝。濃い霧が立ち籠めている。ジョクーも少しはウトウトしたが、結局眠らず夜を明かした。焚火の向う側では、少年がもそもそと動き出している。

「坊ちゃん、起きたかい」

キリムが目を擦りながら応える。

「おはよう。ジョクーさん、だっけ？」

「呼び捨てにしてくれよ。さん付けで呼ばれる山賊なんていないだろう？」

男がカップを手渡す。少年は鼻を宛てて臭ってみた。

「白湯？」

「そうさ、これが山賊茶だよ。ひよっとしたら喉が渴いているんじゃないかと思って」

キリムは思わず笑う。こんなに気の利く山賊もいないだろう。

「山賊って、意外と苦労が多そうだね」

「そうでもないさ。この辺りは旅人も少ないし、出逢うのは同業者ぐらいなもんでね。山賊として苦労した憶えはないなあ」

「それでどうやって暮らしていたの？」

「いや、普通にね、いろいろとね」

「いろいろって？」

「まあ、狩りをしたり、時には狩りをしたり、場合によっては狩りをしたり……」

「それじゃあ、まるつきり獵師だね」

「そう呼んで貰っても構わないけれど、親父の遺言もあるし、俺自身は立派に山賊のつもりだとも」

「成果はあったの？」

「それはまだないな。ただ、運良く旅人と出逢えばこう脅してやろうと日々台詞を考えていたんだ。昨日その作品をお披露目した訳だけれど、どうだった？」

「……なかなか良かったよ。でも、山賊の口上としてはちよっ

と長いかな」

男は考え込んでしまった。余程の自信作であつたのであろう。

一方、少年はこの何とも頼りない山賊が気に入ってしまった。

「良かったんだけど、僕らと同行しませんか？」

「喜んで。でもどこへ？ 俺はユルグに戻れないんだ」

「じゃあ、バルバーレを目指そう」

行き先が決まった。この男の出現が停滞した空気を取り払ってくれたのだらう。少年は白湯の入ったカップで手を温めながら、不思議な縁の働きを感じていた。

ウティホは既に目覚めていたが、二人の様子を不思議に思いながら見ていた。この男はなかなかの拾い物だと思ふものの、所詮は匹夫に過ぎない。それをどうやって少年に取り成したものが迷っていたのだ。一緒に連れて行きたいが、神経質などころのあるキリムはけして許すまいと。ところが朝起きてみれば、二人仲良く談笑しているではないか。

隣にいるノンモも驚いた様子だ。そして互いに顔を見合わせ、笑いながら床を払った。



## 第二章

三叉路に置いた焚き火を始末し、一行は出立した。行き先はバルバーレである。行路の分かれ道を東へと折れて、その『荒野と湿地と兵の国』へと足を向ける。

バルバーレ国は、人口の面ではユルグ教国に一步譲るものの、支配面積は大陸最大である。南北に横たわるマンジャロウ山脈の東側全てが国土なのだ。中央部に流れる大河を中心に街々が偏在し、その河口に王都がある。王都も大河も名をバルバーレという。語源は古の快哉の言葉とか。

大河は国にとっても民にとっても重要な経済基盤である。河の上流、山脈の麓では羊や山羊、馬の牧畜と茶の栽培をしている。湿地が広がる中流域では米の水耕、下流は漁が盛んであり、また巨大な市が開かれる経済の中心でもある。流域を離れば広大な荒れ野があり、狩猟の場となる。胡椒や珍しい果実が野生のままに自生しており、それを採取して糊口を凌ぐ民もいる。

水耕が発達するまで狩猟中心の生活であった事もあり、人々は猛々しく、武を持って国に奉じる気風がある。またユルグ教と同根ではあるが、より自然に密着したアニミズムに近い宗教を信仰している。

一行は緩い下り坂を軽やかに進んだ。大陸の中央線たる山脈の近くから、徐々に東の海へと近づく。

ジョクーは時折行路から外れて森に入り、暫くして合流し、少し進んではまた森に入るのを続けている。キリムは彼が何をしたいのかさっぱり分らない。

「ねえジョクー、さっきから何してるの？」

「仕掛けた罠を外しているのさ。ほら」

山賊は絞めた兎を掲げてみせる。

「凄いね」

「放っておいても良いのだけれど、誰も見に来ない罠で死ぬなんて、獲物にとつちやあ最悪の死に方だろう？ それに勿体ない」

「仕掛けはまだあるの？」

「いや、これで終わり」

「そう、良かった」

今度はジョクーが少年の言動に疑問を感じた。

「良かったって、何で？」

「何でもない」

「はあ、俺がどこかへ行ってしまうのかと心配したんだ」

「してないよっ！」

キリムはふて腐れてしまった。凶星を突かれると人はこうなる。

どうやら男はすんなりと溶け込めたいらしい。まずは重畳な結果だ。しかし、こんなお人好しばかりでは先が思いやられてしまう。

薄暗い森が終わり、狭かった視界が一瞬のうちに開く。見渡せば、所々に灌木があり、赤土と枯れ草の荒野が広がっている。森のしつとりとした臭いが消え失せ、荒れ野特有の乾いた土の臭いに変わる。ウティホは丘の頂上に立ち、皆を呼び止めた。

「さて、森を抜けたぞ。ここからが旅の本番じゃ。まだ先は長いのだし、食糧は限られておる。特に水。これを大切にせねばならん。行路脇には井戸もあるが、閑散として人通りの少なくなつた南回りじゃから、枯れてしまっているかも知れん。手持ちの水袋を飲み干さぬ様にしてくれよ」

「いよっ、おかしら隊長！」

ジョクーの追従に満足して、ウティホは「うむ」と顎髭を撫でた。ついでに背負子をジョクーに渡し、清々した表情で歩み出す。渡された山賊は悄気ながらも応ずるしかない。そのやり取りを見てノンモとキリムは可笑しかった。

一行は縦に並んで進む。先頭は少年とウティホ、それにノンモが続き、やや離れてジョクーが追う。森の中を進むのとは勝手が違う。乾季特有の強い風が吹き渡り、砂が頬に当たる。口に入る。目を細めた状態を続けていると、額に血が溜まって頭痛がしてくる。広大な景色には目も呉れず、俯いて黙々と歩を進めるしかない。

丘を幾つ越えただろうか。ジョクーが情けない声を上げる。

「旦那、どうか一休みにして貰えませんかでしょうか」

ウティホは何も応えない。

「將軍閣下、聞いてらっしゃいますか？」

誰も歩みを止めない。

「旦那様、隊長、親父さん、お願いしますよ」

ウティホは溜息混じりに後ろを向く。

「仕様がないうたで」

風除けに良さそうな大きな樹の側で歩みを止める。少年はジョクーのところまで戻って、背中を押してやっている。

夫婦は根の瘤に腰を下ろした。

「あんたはどう思う？ あいつはキリムにとって、丁度良い相手じゃないかね」

「そうだな、何にしろ無邪気な笑顔が戻ったのは良い事じゃろ。儂らと暮らす様になってから一度も見せなかったのだから」

ジョクーは樹の一手手前で倒れ込んだ。

「情けない」

ウティホが腕を掴んで起こしてやる。

「すみません……」

この饒舌な山賊も言葉少くなっている。背負子を放り投げ、腰の水袋から水を飲んで、今度は仰向けに寝転がってしまった。

「何でこんなに重いんだ？」

「これでもかなり減らしたんじゃ。行き先も定まらん旅であつたか

らの。少しばかり多目の支度がしてある」

「少しばかりって……これでかい！」

「そうじゃ」

「旅慣れた人なら物じゃなくて金を準備すると聞いていたぞ」

「その方が良いじゃろうな。しかし金なんぞは持っておらん」

「貧乏が難いよ」

「まさしくな。金が敵の世の中じゃよ」

ウティホが折れて、荷は順番で持つ事にしてやった。ジョークはがばりと起き上がり、土塗れの顔でにと笑って感謝した。

まだ陽は高いが、ここで野営を張る。ジョークはまたもや薪拾いに行かされる事となった。今回も褒美の前渡しとしてパンを渡されたが、釣り合わない取引であろう。森とは違ってここらで薪を集めるのは苦勞しそうだ。草溜まりから枯れ草を取ってくる事は容易だが、燃え尽きるのが早くて効率が悪い。荒野は夜ともなれば森より冷える。火を絶やす事は避けねばならないし、またもや困難に直面している自称山賊である。

近くにある枯れ木は取り尽くしてしまい、ジョークは遠くまで行かねばならなくなった。残る三人は薪に火を付けて、近くの井戸から汲んだ水を沸かす。ノンモは手早く兎を捌いて、塩を塗り込めて炙り出している。腹の身から油が滴り、何とも香ばしい臭いが拡がる。

「おーい」

遠くでジョークが叫んでいる。見ると肩に大きな倒木を幾つも担いで、こちらに走ってくるではないか。

ノンモが呆れ顔で言う。

「あら、この臭いに気付いたかのかね。誰か、お前の分は残しておくと言っておやりよ」

少年がジョークに手を振って応える。

山賊は折角担いできた燃料を放り捨て、自由になった両腕を振って懸命に走り出した。

何やら様子がおかしい。

やがて、その姿の向こうから一頭の芦毛馬が現れた。こちらへと突進してくる。その後を二頭の黒鹿毛が追う。芦毛は見る見るジョークを追い抜き、更にこちらへと駆け寄る。

黒鹿毛に乗った者どもがジョークを見付けると、芦毛の追走を後回しにして、弓で狙い出した。ジョークは懸命に応戦している。

見かねてキリムが飛び出してしまった。

「待たんか」

ウティホも少年を追った。

ジョークはこちらにやってくるキリムを見て驚いた。助けしてくれるのは有り難いが、少年の腕では役に立たない。しかし、その後にウティホが続いている。そうなれば、まずはこの二人と合流すべきだろう。ジリジリと後ろへ移動する。

三人は窪地に集まり、黒鹿毛に騎乗した兵士らしき者どもと対峙する形となった。

ジョークは完全に息を切らしている。

「す、済まねえ。変なものを呼び込んだ」

「いや、お前さんのせいでもなからう。しかし此奴らは何者じゃ」

大人二人は少年を背にして剣を構えている。一方、キリムは手にしていた薪を大地に突き刺し、両手の指を組んで何やらぶつぶつと唱え出した。

その姿に追っ手は戦慄する。

「退けい！」

馬上の一人がそう叫び、二頭の黒鹿毛は北へと戻って行った。三人はその場にぽつねんと取り残される。

「何じゃ？」

ウティホには理解できなかった。

ジョークが少年に問い掛ける。

「キリムの法術が効いたんじゃないか。そうだろう?」

「真似を試してみたんだ。信じて貰えて良かったよ」

大人二人は顔を見合わせる。

「物真似だったのか!」

「何て子じゃ」

思わず声が揃った。そして少年の頭を撫で付けたり叩いたりして、その知謀を讃えた。

三人は野営地に戻る。ノンモは心配のあまり真つ赤な顔をして、それでも万歳をして迎え入れた。

その様子を遠くで見ている者がいる。芦毛馬に乗っていた人物。馬の轡を取り、近づいてくる。

「あのう……もし……」

一同は声の方向に視線を向けた。

それは少女であつた。キリムより四つ五つ年上であろうか。バルバーレの民族衣装を着て、黒々とした髪を編んでいる。

「ご迷惑をお掛けしました。それに連中を追い払って頂きまして有り難うございます」

ウティホはその声、その姿に驚いた。

「その装束……ひょつとして、そなたはバルバーレの王女ではあらせられぬか?」

「はい、マウ・リサと申します」

「やはりそうか。御事がまだ幼い頃、遊んで差し上げた事がある。憶えておいでか?」

「ひょつとして、貴方様はアスマンの王弟陛下では?」

「いかにも」

「面変わりなつて……さぞご苦労なさつたのでしょう」

「御事も変わられたぞ。背も随分と大きくなられた」

「ジョクーはすっかり置いてきぼりだ。」

「ちよつと待つて下さいよ旦那、あんたさんは王弟なのか?」

「うむ」

「隊商の護衛やら国境警備をしていた人が王弟？」

「うむ、義理のな」

「義理の王弟……って事は、国王の妹を娶って王族の籍に入っ  
たって事ですかい？」

「相変わらず理解が早いな」

「どなたが王の妹なんです？」と恐る恐るノンモの方を見る。

「何だい？ あたしが王妹いもうとだったら悪いのかい」

「滅相もございません。確かにこう……何とも恰幅のおよろし  
い方だと思っておりますとも、はい」

「もう一度言つて御覧。その舌で美味しい酢漬けを拵えてやろう」

二人が漫才をしている横で、ウティホと王女が話を続ける。

「ところで、襲つてきた奴らは何者ですか」

「どうやらユルグ兵の様でした」

「彼奴らきやつが国境を越えてきているのか。にしても、どうして王女が  
こんな僻地に？」

「ご存じでしょうか。四年前の戦争以来、アスマン国のあつた南方  
一帯は『呪われた地』と忌み嫌われております。足を踏み入れただ  
けでも死に至るとか。そしてこの地域は我が国土の中で最もアスマ  
ンに近い。よつて誰も統治したがない有様でして、国王の直轄地  
として私が管理を任されているのです」

「ふむ。それでこうやって時折来てなさるのじゃな」

「はい、今回も従者を五人連れて視察に参りました」

「皆、殺られてしもうたのか」

「手練れをより選つてきたのですが、残念です。突如多数の敵が現  
れて……。一瞬の出来事です。敵の中には法術を使う者も……

」

「そいつはまずい」

ジョクーがノンモの口撃を振り切つて会話に加わつた。

「どう言つ事じゃ？」

「呑気に構えている場合じゃありませんぜ。敵はちゃんとした部隊、しかも法術を使える者までいる。先程の騎兵二名は逃げたのではなく仲間を呼びに行っただけですよ。すぐに大挙して攻めてきますぜ」  
「成る程、確かにまずいな」

一同は心凍る思いで身を縮めた。森の中ならまだしも、こんなに見晴らしの良い荒野では隠れる事も逃げ出す事もできない。せめてもの対策として目立つ焚き火を始末し、身を屈めて周囲を警戒するしかない。

一人一人が目凝らし、風の臭いに神経を集中させている。  
ウティホは北を見張っていたが、気になってノンモとマウ・リサをちらと見遣った。二人とも表情を硬くしている。妻の肩に手を置いて、ウティホは再度視線を上げた。見上げた先には高峯が山肌を赤く染めつつあった。

三人はアスマン戦争から四年も隠遁生活をしていたのだ。世の動きに疎くなって当然だが、残る二国がどうなっているかすら気に留めていなかった。気鬱が情報を集める努力を妨げていたのだ。そうして、重い腰を上げて国を破る決心をするのに4年掛かってしまった。

四年は長い。大国同士が戦端を開くには充分なくらいに。そして今、正しくその瞬間に立ち会っているのだ。

「来た！」

遠目のジョクーが最初に気付いた。騎馬が数十頭、後方を遮断する様に南方から現れたのだ。整然と横隊を作り、徐々に詰め寄ってくる。予想以上に早い展開だ。

山賊は初めてそれらしい表情かおをして、ウティホに耳打ちする。

「最初に後ろを取られたって事は、本隊は前方ですかい？」

「うむ、そんなところじゃろ」



そう応えながら、ウティホは懸命に考えを巡らしている。現れた騎兵は五十騎余り。ユルグの遊撃隊と同じ編成ならば、歩兵はその十倍はいてもおかしくない。総勢六百、大隊規模だ。彼奴らの得意は騎馬による情報収集と歩兵による打撃。闇に隠れて接近し、敵の急所、要所を蹂躪し壊滅させる為の編成である。捕虜を捕らず見る敵は全て屠ると聞く。指揮官は一人とは限らず、頭を刈り取っても隊を崩す事は適わないだろう。

これは難敵だ。ウティホは打開案を模索したい。

「王女殿下、御事の馬には何人乗れますかな」

「駿馬ですが・・・牝馬なので大人の男の方なら一人でも重がります」

「では、取り敢えず御事が騎乗なさるべきでしょうな」

「私一人が逃げる訳には参りません。皆様と共にいます」

万事休すと断ぜねばならない状況である。彼女も短い人生の終わりを覚悟したのだろう。

北の様子が変わる。それにキリムが目聡く気付いた。

「歩兵が身を屈めてやってくるよ」

ウティホが目を細めて確認する。

「やはりな。五百はいるじやろう」

やがて最終段階とばかりに、敵の戦馬車と荷駄隊がガラガラと登場した。歩兵達は一斉に立ち上がり、奇声を上げている。長期戦を見越して大松明も設置する念の入れ様だ。

女どもはぺたりと座り込んでしまった。

一方、ジョクーは自棄とばかりに平然としている。

「敵さんは慎重ですねえ。こう、ぐるりと取り囲んでおきながら、ジリジリとしか輪を締めようとしない」

その冷静な感想にウティホが応じる。

「恐れているんじゃないよ。こちらにいる術士を」

二人は少年をじっと見詰める。

視線を感じたキリムは、急いで掌を横に振った。

「駄目駄目。もうハツタリは通じないよ？」

「ハツタリじゃなく、本物の術は使えないのかい。ほら、ここに兎の贄がある。ちつとばかし焼き過ぎたが、これで連中を丸焦げにしてくれよ」

ジヨクーは拝む調子で懇願した。

ウティホが続ける。

「キリムよ、お前は三国一と謳われた知恵者の血筋じゃ。母は古今東西の法術を会得した稀人<sup>まれびと</sup>だったではないか」

「そのせいで殺されたけれどね」

「確かにそうじゃ。お前の母を守れなかった儂らにも責任はある。じゃから、お前は母君の分も長く生きねばなんのじゃ」

山賊も応戦する。

「その為にはこの場を切り抜けなきゃならない。違うかい？」

少年は無茶な期待だと困惑するばかりだ。

敵は徐々に迫る。馬車から黒い詰め襟を着た者どもが降り立ち、包囲網の前方に位置した。そして手を組んで何やら誦文らしき言葉を唱えている。

ジヨクーがウティホに聞く。

「あれが『法士』か」

「いかにも」

「連中は何をしているんだ？」

「さっぱり分からんが、こちらの術を無効化する法でも唱えているんじゃないかな」

「俺達は終わるか」

「いかにも」

「手立てはないのか」

「ないだろうの」

「無茶を承知で突進してみては？」

「六百人を相手にか？ 矢に当たって頓死するか、四肢を切り落とされ苦しみながら死ぬか、そんなところじゃろうな」

「少し待って、夜陰に紛れて逃げるとか」

「この部隊は夜戦巧者で有名じゃ。夜目の利かぬ兵士なぞおらん」  
「降伏しよう」

「連中は捕虜を捕らぬ」

「バルバーレの王女にアスマンの王弟が揃ってもか？」

「国王その人がいても駄目じゃろうな」

「ただの旅人を演じてみるとか」

「演じずとも儂らはただの旅人じゃ。でも、それで奴らが見逃してくれるのか？」

「確かに……」

山賊は腹を括り、その場にしゃがんだ。そして今度は少年に問いをぶつける。

「なあ、連中は何をぶつぶつと唱えているんだい？」

「お経だろうね」

「効き目があるのか？」

「ないよ。でも敵の兵士達はそう思っていない。自分を術から守ってくれていると信じている。そう言う意味では効果があるんだ」

「連中こそ、ハツタリをやっているのか」

「そう。本物の法術が使える者なんてユルグ教国にはいない。バルバーレにだって一人しかいない」

「でも、四年前の戦争では使っていたんだらう？」

「手妻だよ」

「手妻なら、どうやって生きた人から魂を抜いたり、骸を破裂させたりできたんだ？」

「麻薬と暗示、それに火薬さ」

「火薬？」

「炭に硫黄、後は硝石があれば作れる。火を付ければ轟音と共に破裂するものだよ」

「そんな武器があるのか？」

「硫黄はアスマン火山でしか採れない。硝石はバルバーレにしかない。だからもう残っていないだろうね」

「成る程、じゃあその火薬を恐れる必要はないんだな」

「多分ね」

「法術は恐ろしいものだと思っていたが、何の事はない、嘘っぱちかい」

「そうでもないよ」

「そうそう、バルバーレには使える人が一人だけいるんだっけか。でもどうやるんだ？」

キリムは、すつくと立ち上がった。

「こうやる！」

少年は丘の上まで駆け上がる。そして懷から小柄を取り出し、細い刀身を自分に向け、左手の掌に突き刺し、貫通させ、更には握り込んだ。そして、その手を天に掲げる。

赤黒い血が滴り、キリムの白い腕に伝う。

「うおおおおお」

少年は自らの喉が許す限り叫んだ。その雄叫びは荒野に反響し、張り詰めた空気を殷々と震わせた。

仲間達はその様を凝視している。敵も同じ。

法士の読経が止まった。歩兵の様子が変わる。騒めき、悲鳴を上げ、逃げ出す者も現れた。

包囲した輪が崩れる。

「今じゃ」

「おう」

ウティホとジョクーが剣を掲げ、叫びと共に突進する。ノンモも薪を振り上げて続いた。

行路を北へと走り抜ける五人。

敵の歩兵達は戦いて道を譲った。連中はすっかり怯えている。這々の体で騎馬と合流し、荒野を南へと逆進して行った。

そして狂った様に叫び走る一行だけが残った。

最初に喉を涸らして叫べなくなったのはウティホである。

「げほげほ、皆止まれ」

「おおおおー、え？」

山賊は状況が把握できない。

「やあー」

ノンモはまだ元気に叫んでいる。

馬上のマウ・リサは戸惑っていた。助け上げた少年は鞍の上でぐったりとしている。それをどうしたものか気が気ではなかった。

### 第三章

ユルグ兵の残した馬車を一両拝借して、一行は北へと向かう。敵との再戦だけは避けねばならない。一刻も早くこの地を離れた方が良いと判断したのだ。

御者はウティホが勤めている。マウ・リサは自分の馬で追隨している。幌の中はキリムとノンモ、それにジョークの三人である。

ジョークは心配そうに覗き込む。

「どうです？ 治りますか」

ノンモは包帯を巻く手を休めずに応える。

「大丈夫、骨と腱は傷付いていないよ。それにこの蘆薈アロエが見付かって良かった。お前さんが探してくれたお陰だよ」

少年に施された包帯が痛ましい。縫う程大きな傷ではないが、掌を貫通させたのだ。痛まない筈がない。それでも本人はけろりとした表情を見せ、御者台に顔を覗かせてウティホを安心させた。

今回の体験は、波瀾万丈な人生を歩む山賊にとっても無類の驚きであつた。

「あれが本物の法術なんだな」

左手の動きを確かめながら、キリムが応える。

「それが、よく分からないんだ。結局は手妻なのかも知れない」

「暗示って奴か！」

「そつだね。一応理屈はあるのだけれど」

「どんな？」

「長い説明になるけれど、聞く？」

「どうせ長い旅だ。聞きましょう」

ジョークの素直な返答に少年は微笑んだ。そして包帯でくるまれた掌を擡げる。

「まずはね、これを理解する必要があるんだ。僕は自分の手を突いたけれど、その時の痛みって、どこか感じているんだと思う？」

「手が傷付いたんだから、手が痛がっているんだろう」

「違うんだ。痛がっているのは頭の中なんだよ」

「手を怪我して頭痛がした事はないな」

「そうじゃなくなってるね、頭が『今、手が痛い』と感じているんだ」

「手と頭ではかなり離れているぞ」

「痛みを伝えているものがあるんだ。それを『経絡』という」

「目に見えるものなのか？」

「柔らかな繊維状のものでね、白い絹糸に近いかな。それが体中に張り巡らされていて、首を通って頭に繋がっている」

「じゃああれか、爪先が痛くてもそれを感じているのは頭なのか？  
信じられんね」

キリムは別の例を持ち出す。

「こう考えてよ。とある囚人がいてね、罰として片腕を切り落とす事と五本の指を潰す事が決まったとする。刑の執行人はまず腕を切り落とした。当然、囚人は苦しんで大いに悲鳴を上げる。次に大きな槌を使って、その指をぐしゃりと潰した。けれど、囚人にはそれが分からなかった。蚊の喰う程にも感じなかったんだ。それはどうして？」

「切り取られた手は痛がっているさ。でも囚人とは別々になってしまったから、それを知る事ができないだけで」

「うん、その話と僕の話、同じでしょう？」

ジョークは得心した。しかし納得が行かない点もある。

「それが法術とどう関係があるんだ？」

「実際に右手を失った人がいてね、その人の場合、未だに手が付いていると勘違いする事が続いたそうなんだ。物を掴もうとしたり、触っていない水を冷たく感じたりとかね。切り取った右手を蒸留酒

に漬けて大切に保存していたんだけど、もう燃やしてしまおうって事になって、自分で火に焼べたんだ。その時、ピリリと痛みを感じたんだって」

「ほーお。でもそう言うものかも知れんな」

「その理由をこう考えた人がいたんだ。経絡が切れてしまったとしても、痛みを伝播させる『氣』が空中を飛んで、目や耳からその人に戻り、痛みを感じさせたんだとね」

「その応用がさっきの術か」

「そうなんだ。僕の手の痛みが空中を飛んで、敵兵の頭に入ったのだらうと」

「敵さんが勝手にそう思っただけじゃないのか」

「だからね、暗示かも知れないし術かも知れない、と言ったんだよ」

「そうか。いや待てよ、だったら俺達だって痛みを感じている筈だ」

「感じなかった？」

「多分……」

「左手に違和感はない？」

「そう言われれば、何となく痺れた様な……あれ、少し痛いぞ」

「これが暗示だよ」

少年は悪戯っぽく笑っている。

ジョクーは小馬鹿にされた様で気に喰わなかったが、会話を続ける事にした。

「しかし、人つてもんは暗示に掛かり易いんだな」

「そうだね、太古から暗示や詐術が使われてきた。脅しやはったりにも似て、人の心を縛る術すべだったんだ」

「そんなに昔おとこみからか」

「うん。かつて魏おとこみが支配する呪術国家があつたそうなんだ。その王は術士でね、国難全てを術で解決したそうだよ」

「馬鹿らしい」

「僕も同意見だよ」



「でも興味はあるな。一体どうやったんだ？」

「飢饉に見舞われたり、疫病が流行ると贅を捧げて神々に祈ったんだ」

「獅子や兎をか」

「自分の妻や子供をだよ」

「王妃や王子を殺すのか？」

「さすがに自分の身体を痛めつけるのは嫌だったみたいだけど、妻や子の目玉、手足、性器、そして心臓を祭壇に供えて祈ったそうなんだ」

「悪趣味だな」

「その極みだよ。贅にされる人が苦しめば苦しむ程効くのだと言われていて、早く死んでしまわない様に、少しずつ身体を刻まれたそうだよ。乳房を切り取るにしても、まずは針を沢山突き刺し、それから少しづつ削ぎ取る様に……」

「止めてくれ。しかしなあ、幾ら子沢山でも数に限りがあるだろうに」

「そう言う事だね。時代が経つと王の妻子じゃなくても構わなくなつたし、更には人間以外の生き物や人形ひとがたを贅にする様になったんだ」

「その方が健康的だな。お兄さんは贅成だ」

「当時、災厄の到来は王が求心力を失う事と直結していた。国難は全て王のせいになれて、反乱が絶えなかったんだ。だから、その度にハツタリを咬ます必要があったんだろうね」

「王様つてのも因果な商売だな」

「民衆達はね、王の力不足で飢饉になったと騒ぎ立てたり、王が愛する長子を贅に捧げたからもう大丈夫だと安心したりしたんだと思う」

「面倒見切れないね」

「だから、今でも贅の伝説が残っていて、術士が贅を捧げて術を使うとか言っている人がいるんだよ」

「そんな事を言う奴は馬鹿に違いない」

「うん、そうだね」

ジョクーはノンモの方に向き直る。

「ねえ、奥さん？」

「・・・そう、馬鹿だろうね」

ノンモは急に話を振られて当惑したが、そう応えた。  
したりとジョクーが叫ぶ。

「大将、奥さんが馬鹿と仰っていますよ」  
「？」

ウティホはよく聞き取れない様子だ。

一方のノンモはようやく話を理解した。

「何だい、ウチの旦那の事かい。それだったら馬鹿に違いないよ。  
大陸をあちこちと巡って知識は豊富だけれど、生来のお人好しだからね」

馬車が急停止した。

ウティホが幌の中に入ってくる。

「うほん、何の話だ」

態とらしく咳払いをして、山賊をぐつと見る。

「旦那、俺じゃありませんぜ」

「ジョクーよ、一つ教えてやる。隊商長かしらに限らず人を束ねる人物には不可欠な要素がある。それは何だと思う？」

「さあ？」

「密告者を信じず、告げ口をした者を逆に罰する気概を持つ事じゃ。  
小者は小者に過ぎないのだからの」

「はあ」

「よって、お前には罰を与えよう。今から御者を務めるんじゃ。儂は寝る」

無駄口は思わぬ不幸を呼び込むらしい。がつくりと肩を落とす山賊であった。

一行は夜を徹して旅程を消化し、太陽が燦々と降り注ぐ『海辺の街』へと到着した。ここまでくればもう辺境とは呼べない。

狩猟や漁労、それに香辛料や果実の採取を行う者達の根拠地として、また市の場として多くの者が暮らしている。海辺には整然と防風林が植えられ、砂浜に小舟が並び、石灰岩で作られた家々と石畳が異国らしい街並みを作っている。

ここにはバルバーレ軍南方旅団の兵営所があり、王族が泊まる下屋敷もある。一行はそこに滞在する事となった。高い石堀に囲まれた敷地には美しく整えられた庭があり、屋敷の中も贅沢な調度品や美術品で飾られた貴族趣味になっている。

広間には玉座が据えられ、王女マウ・リサが座している。ウテイホ達はその脇に位置し、求められれば意見を述べる様にと指示された。ジョクーにはいかにも不釣り合いな役処であり、緊張して少しふらついている。

軍服を纏った数名が参内し、玉座の前で膝を折って頭を垂れた。王女が凜とした声を響かせる。

「私が危機に直面している間、お前達は何をしていた？」  
太った人物が進み出て応える。

「ははっ、帰還した従者が王女の危機を急ぎ知らせて参りましたので、南方の全軍を上げて救出に向かう準備をしておりました」

「愚かな」

「は？」

「全軍を大挙して動かす必要などある筈もない。少数でも迅速に動かせる兵を用意して、様子を伺うべきではなかったのか」

「はっ、仰る通りでございます」

将官らしき人物は、まだ寒い季節なのに汗を滴らせた。

「ところで、私の従者はどうしているのだ？」

「傷を負っておりましたので、治療を施し休ませております」  
「そうか、では至急ここへ呼ぶがよい」

官吏が走り、男が呼ばれた。

「ご無事でいらっしやいましたか、王女殿下」

「運良くな。さて、言い訳があれば聞こう」

「はあ……」

男はその意外な言葉に青ざめた。

「お前の仕事は私を助ける事だ。私の代わりに死ぬ事だ。それを放棄して逃げ出した。そんなお前を私はどう評価すれば良いのだ？」

男は立ち上がるうたとたが、衛兵に取り押さえられた。

「こちらにいらっしやる方々がお前の代わりに助けて下さった。自らの身体を傷付け、術を發揮し、六百もの敵兵の直中から脱出させて下さったのだ」

男は顔を床に押し付けられ、何も答えられない。

「大切なお客様の前でもあるし、命は残してやろう」

王女は立ち上がり、腰の剣を抜いた。男は腕を掲げさせられる。

剣が一閃を放ち、男の左腕がぽとりと落ちた。

男は叫び声を上げるまでもなく気絶し、引き摺る様にして退散させられる。

代わりにノンモとジョクーが小さく悲鳴を上げた。

将官は大きな体を縮めている。

マウ・リサが追い打ちを掛ける。

「さて旅団長」

「はっ」

「これからどうする？」

「まずは全軍を上げまして殿下を護衛し、王都までお連れ致します」

「馬鹿者め」

「は？」

「斬首と馘首<sup>ケビ</sup>、どちらを選ぶ？」

「いや、その・・・どうか命だけは」

「では<sup>かくしゅ</sup>賊首だな。貴様を免職とする。一刻も早く私の視界から消えろ」

旅団長も衛兵に抱えられて退場となった。

王女は苛立ち紛れに頭を掻きながら事務を進める。

「次の責任者は誰だ」

「私めにございます」

小柄な初老の男性が名乗り出た。

「では指示を与える。南部国境地域でユルグ軍と対峙せよ。それと、その地に根拠地があるな。戦が近いと心得る様に」

「殿下のご意志は進攻でしょうか、それとも防戦でしょうか」

「貴様はどうすれば良いと考えるか」

「敵の規模や編成も分からぬ状況で進攻はできませんまい。まずは敵軍の行方の探索ですな。既に退却した後ならば、国境を固め、再度の潜入を許さない事が肝要かと」

「手堅いな。いや、それで良い。要は負けない事だ」

「では、索敵、監視と情報伝達の手立て、拠点の建設の順に進めま  
す。騎馬で編成された索敵班が既に動いております。敵軍が大挙し  
て襲来した場合を想定しまして、その報が一刻も早く王都に伝わる  
様に伝令網を設置しましょう。国境とここ、そして王都まで数力所  
に分けて早馬を置きます。それに国境警備隊の編成ですな。三班に  
分けて長期に渡って監視できる様にします。更には拠点の建設。早  
速、見地測量をさせて場所を決めます」

「いつまでにできるか」

「石造りの大きな城ならば何年も掛かりましょうが、戦に間に合わ  
なければ意味がありません。塙は低く屋舎は木造でよろしければ、  
月内にも」

「屋舎はなくてもよい。天幕で充分だろう。ただ塙は強固にせよ。  
四年前の戦争に学べ」

「この屋敷の石塀を運ばせます。それで一月で」

「それは妙案だ。ここにあるものは何でも持ち出せ。使えぬものは売り払って人を雇え」

王女はこの老兵が気に入ったらしい。満足げな笑みを見ている。  
「今回の件で得たものがあるとすれば、貴様を見出せた事かも知れぬな」

「恐縮です」

「では、火急につき略式ではあるが、本日をもって貴様を南方方面軍の新旅団長に任ずる。南方に配置した五千の兵、その全てを預けるものとする」

「ははっ」

老兵は一礼し、走る様に出て行った。

マウ・リサ嬢は優しい表情を取り戻し、ウティホ達に話し掛ける。  
「お見苦しいところをお見せ致しました。これから騒がしくなると思います、まずは、どうかゆっくりとお寛ぎ下さいな」

王女は靴を鳴らして広間を後にした。

彼女がいなくなった事を確認して、ジョクーがぼやく。

「寛ぐつたって、あんなもんを見せられてはゆっくりできねえな。俺の尻がむずむずして早く逃げ出せって言ってるよ」

「あたしもだよ」

ノンモもどきまぎとしている。その横にいるウティホは渋い顔をして顎髭を撫でる。

「あれで正しいんじゃないよ。統治者たる者は時に厳しくなければならん」

「マウ・リサって恰好良いね」

一人だけ別次元の感想を述べるキリムであった。  
それから一行は女官に案内され、与えられた部屋へと辞した。

旅に出て何が変わったかと問われれば、どこでも眠れる様になった事であろうか。それに加えて疲労のせいか寝台の心地良さか、皆深い睡りを取り戻した。起き出したのは夕刻になってからである。キリム自身は、カーテンを染める赤い太陽が夕日なのか朝日なのか判別できなかったが、隣で鼾を掻いているジョクーを起こす事にした。

「もう起きなよ。朝だよ」

「うーん、俺はずっと御者をしてて眠てねえんだ。後二日は眠らせてくれよ」

「もう」

少年はやむなく隣室に移動する。そこにはウティホ夫婦が眠っている筈だ。

巨大な寝台の中央にノンモが大の字で寝ている。衾も掛けずに寒くないのだろうか。その隅でウティホが固まっている。布にくるまって狭そうに身体を丸くして。この夫婦の力関係を如実に表した寝姿と言える。

「ウティホ、もう朝だよ。ノンモも」

「おお朝か、寒いな」

「暖かい朝だね。食事は出るのかい」

キリムに新しい知識が備わった。

持ち運びに勝れ、大陸で最も優秀な暖房器具。それは脂肪。

暫くして少年と夫婦は食堂ダイニングに呼ばれた。

食卓に蠟燭が灯され、玻璃の窓に光を反射させている。キリムは今が夜だと気付いて、一日損をした様な、何だか奇妙な感覚になった。

食卓には山海の馳走が並んでいる。猪に山鳥、鮪しびや名も知らぬ甲殻類。しかし手の込んだ料理ではなく、塩と香草や香辛料だけで味付けられた丸焼きの類である。それはそれで充分旨そうだ。樽のまま置かれた果実酒が香しい臭いを立てて、夫婦を魅了している。ジ

ヨクーは寝坊してこの貴重な機会を逃してしまった。

ホステス  
主催者たるマウ・リサが着席する。

「さあ皆様、こんな物ではお礼になりませんでしょうが、心ばかりの料理を作らせました。これが私どもの郷の味です」

そう言う王女自らが料理を取り分け出した。檸檬を浮かべた手フィ水鉢ンガーボウルに指を浸し、油に塗れながら解体する。銀器カトラリーで取り分けるアスマンとは全く違う礼儀作法である。

ゲスト  
賓客達もそれを手で食べる。何とも無骨だが、味は旨い。肉の脂身をつるりと嚼り、魚は丁寧ゲストに骨を外して口に放り込む。小骨を取る作業は成る程手掴みが良い。

ノンモは初めての作法に臆せず物凄い速度で食べ進める。ウティホはノンモの食べ方を凝視しながら真似ている。キリムにはこの初めての味が堪らなく刺激的だった。肉には胡椒が合い、魚には酸味のある香草が合っている。塩が違うのだろうか。丸みを帯びた優しい塩分が食欲をいや増す。一口毎に手を洗わなければならないのもどかしいが。

そしてご自慢の米料理が運ばれた。魚介と一緒に炊いた物で、木匙で食べる様だ。

これなら落ち着いて食べられるとウティホは安心した。

「これが米なのですか。初めて食べますが、旨いものです」

「この黄色い粒が米？」

キリムも興味津々だ。

「そうですね。本来は小麦同様に白いのですが、サフラン紅花で色を付けています」

「米でパンは作れないの？」

「パンをご所望かしら」

「ううん、そうじゃないけれど」

「作れない事はありませんが、小麦のパンとは似ても似付かない物になってしまいます。今後の研究課題ですね」



「米でパンを作ると柔らかい物になっちゃうんだよ。焼き過ぎるとすぐに焦げるしね」

ノンモが主婦らしく専門的な知識を披露した。

「よくご存じですね。その通りです。焼くよりも蒸した方が甘みも出て良さそうなのですが、香ばしさがなくなつて、単調な味になつてしまいます」

「しかし、こんなに美味しい物があれば小麦を買わなくなる筈さね」  
「それが四年前の戦争の引き金になったのですね」

マウ・リサは済まなそうな表情を見せている。

それを察してウティホが言い返した。

「バルバーレが水耕を始めた事に責任はありませんぞ。それは遅かれ早かれ行われる運命にあつたのですから」

「そう仰つて頂けるのは有り難い事です。しかし経済問題が戦争の原因になるとは思いませんでした」

「そうかな？」とキリムが口を挟む。

「背後に相互不信や民族問題があつたとしても、双方が充分以上に豊かであれば戦争は起きない。ご大層な大義名分を立てて、殺し合い、金を奪い合うのが戦争なんだ」

王女は少年の言葉に驚く。

「そうなのですか？」

「うん、それは歴史が証明しているよ」

「今起きつつある戦争も？」

「今後は分らない。もうこの大陸には二つしか国家がないのだから、別の理由があるんじゃないかな」

「それは？」

「両国の統治者は国土が侵略される事を恐れている。それは至極当然な心理だけれど、国を脅かす程の国が多数あれば、どこかを攻める事よりも守りを固めようとするでしょう？でも今は、自分以外にはもう一国しか存在していないのだから、怯えているよりは果敢に攻めたいと思う筈だよ」

「確かにそうですね。我が国にも好戦的な者が多くいます。残念な事ですけど」

「でもね、それで大陸が一国に統一されたとしても、もう戦争のない平和な世界になるとは限らない」

「それは、海の間から侵略者がくるという事でしょか」

「違うよ。そんな可能性は排除して考えるべきだね」

「では何故？」

「国が一つになる。それはいろんな文化を持つ民を一樣に統治する事を意味しているんだ。例えば新しい法律を作るとして、こっちは民には歓迎されても、他方では批難されるかも知れない」

「それでは場所によって統治の方法を変えてみれば？」

「不公平だと思われるだろうね」

「一国になっても、内部で反乱が起きてしまうのですね」

「そうさせない為にまた戦争だよ」

「この世から戦争が無くなる事はないのでしょうか」

「残念ながら。でもこれまでがそうだった様に、長く戦争のない時代を作る事はできる」

「どうすれば？」

「アスマンの復活だよ」

ウティホが唸る。

「そうですね。そうなれば嘗ての様に平和な時代がやってきます」  
キリムが続ける。

「アスマンはいつでも緩衝材の働きをしていたんだ。これまでもユルグとバルバーレの間で小競り合いがあつたけれども、その度にアスマンが仲介していた。その必要があつたからね」

「それは？」

「アスマンは商いの国。商売は平和じゃなきゃできない」

「戦時こそ大商いの好機ではありませんか」

「こちらに火の粉が降り掛からない保証があればね。でもこの大陸は狭過ぎる。アスマンは他の二国と接していたのだから」

「失礼ながら、アスマン国の復活は現実的な話とも思えませんが」  
「確かにね。国が敗れても民が半分、いや三分の一でも残っていれば、再興は難しくない。でも、もう一人も残っていない……」  
「残念です」

「僕はまだ可能性を信じたんだ。二国に散らばった商人達を束ねられれば」

「それが皆様の旅の動機ですか」

「それが僕のやるべき事なんだよ」

「おお」

ウティホは感嘆した。少年の真意を初めて知ったのだ。そして自分の夢が小さかった事を恥じずにはいらなかった。ご自分の命を賭してキリムを助命された国王一家の望み、それはアスマン復活にあつたのだと気付かされた。

王女が問う。

「私にも何か助力できませんでしょうか」

「じゃあ、王都まで連れて行って貰えますか？」

「それは是非。貴方の術と学識はバルバーレにも有用です。父に逢つて頂きましょう」

「願つてもない光栄ですじゃ」

ウティホにとっては明日が輝いて見える一瞬だった。

朝、今日も眩しい程の晴天である。屋敷は俄然騒がしくなった。

昨日の話の通り、堀の石を取り外し始めたのだ。それに一人の商人が呼ばれ、王女や軍幹部と面談している。

ウティホは帰り際の商人を捕まえた。

「お主はアスマン人か」

「ええ、出身はそうです。商品の仕入れに出向いていて戦争を逃れる事ができました」

「儂の顔に見覚えはないか？」

「ひよっとして……王弟陛下でらっしゃいますか」

「おお、知っておったか」

「平民から一足飛びに王族になられた陛下の事は有名ですから。で、ご用の向きは？」

「それじゃがな、今し方、王女と話し合われたと思うが、またぞろユルグが蠢動しているらしいのじゃ」

「その様ですな」

「是非ともバルバーレを助けてやってくれ」

「勿論です。商売ですしね」

「そこじゃ。商売は儲けが大事、儲けのない商売は罪悪じゃが、こは一つバルバーレに投資するつもりで働いてやってくれ」

「はあ」

「いや、損して得取れというではないか。それに、お主の働き如何ではユルグが勝ってしまうかも知れん」

「それは確かに嫌ですね」

「そうじゃろう」

「前の旅団長はいけ好かない貴族でしたが、新団長は一兵卒から出世した苦勞人ですし、応援しましょう」

「おおそうか。ついでに聞くが、ここは資金で困っているのか？屋敷の物を売り払うとか仰っていたが」

「いえ、元旅団長の隠し財産を没収して一気に潤ったみたいですよ。これまで資金に難があったのは其奴そいつのせいですね。でも屋敷の調度品は売ってしまう様です。王女も新団長も華美を嫌う人ですから」

「それでこそ兵士、それでこそ王族じゃよ。戦争が近いからと言って税を上げるのは愚策の極みじゃ」

「まさしく。ところで王弟陛下はこれからどうなさるのですか？」

「ウティホはにやりと笑う。

「儂か？ 儂のする事はな、国生みじゃよ」

マウ・リサの仕事も終わり、出立の準備が整った。王女の触れにより笛太鼓の礼式はないが、旅支度は豪華なものである。四頭引き

で黒光りのする大型馬車と騎馬で出立する。

王女を含む五人は四輪馬車の車内である。その柔らかな椅子に座りながら、ジョークは目を爛々と輝かせている。

「こんなにでかい馬車は見るのも乗るのも初めてだよ」

「物見遊山ではないのじゃぞ。しかしあれだな、この馬車はアスマン製の最高級品じゃから驚くのも無理はないかの」

他人の持ち物なのにウティホは自慢気だ。一方、ノンモは昨夜の事を思い出している。

「それよりも昨夜の晩餐。ありゃあ良かったねえ」

「何！ 本当か？ キリムよお、どうして起こしてくれなかったんだ」

「ちゃんと起こしたって。それでも寝ていたジョークが悪い」

「ああ、どんな物が出たんだろう」

ウティホが髭を撫でて言う。

「絢爛豪華なご馳走じゃったぞ。寿命が十年は延びただろうの」

ノンモも賛同する。

「それに量も申し分なかったね。動けなくなる程食べたのは久しぶりさね」

「それよそれ。寝ながら夢で見ていたのはそれだったんだよ」

ジョークが身を乗り出している。その様がマウ・リサには可笑しかった。

「皆様を見ていると何だか気が楽になります」

「俺達やお気楽に見えるかい？」

「そうさな、勤勉さは四年前の戦争で使い果たしてしまったのだから」

「あんたはずっと前からお気楽な人だったよ」

「僕は至って真面目だよ」

最近になつて孤高の道を行く事にした少年である。

こうしていても馬車は快調に北を目指す。馬を使い潰すまで走らせて、宿駅で新しい馬に変えてまた走り出す。こんな贅沢ができる

とは誰が思い描けたらう。

日を経るに従って、風景はその姿を変える。広漠とした荒れ野は奇景たる峡谷となり、一面の草原に差し替えられ、田畑の広がる丘陵地を抜け、村々を通り、徐々に行き交う人や馬車が多くなった。

やがて貿易行路は土から石畳へと変わり、前方に灰色に沈む都会の街並みが現れた。

黒々と犇めき合う楼閣の群れ。それは人の欲と力を具現化した存在に映る。

王都まで数ヶ月の旅程を覚悟していたが、一週間での到着である。権力は大陸をも小さくしてしまうらしい。

## 第四章

大陸三大都市の一つ、王都バルバーレ。

大河の河口にある中州、それを都市にした自然の要害である。河川交通の要であり、国土の南北を繋ぐ陸路の要所でもある。而して橋を落とせば侵入不可の小島となり、攻めるに難く守るに易い、まさしく難攻不落の要塞都市といえる。

黒い馬車は橋を渡って王都に至った。数々の建造物、寺院や競技場を横目にしながらそのまま王宮へと入る。巨大国家の王城に相応しく、頑強な二重の防壁を備え、その中には雲を刺す様な石塔が峙っている。

一行は衛兵の最敬礼を受けながら、一の城門、二の城門と擦り抜けて、高級貴族と王族の為の車溜まりがある一角へと進んだ。旅の終着点である。取り敢えずは、であるが。

ここにきて成すべき事は多岐に渡る。まずは王との謁見である。一旦王女と別れ、控えの間に通された。豪華な家具や美術品で飾られた部屋の中でちょこんと座る四人。場違いな来訪者を女官達が影で笑っている。

衛兵に睨まれながら、ジョクーとウティホが漏らす。

「こんな事なら、もうちょっとぱりつとした服が欲しかったなあ」

「儂もじゃ」

違う意見もある。ノンモとキリムだ。

「何を言っているんだい。人間、見た目より中身だよ」

「今更、恰好を気にする事もないと思うよ」

それでもジョクーはいた堪れない。

「親父によく言われたもんだ。人を見た目で判断するな。但し中身

で判断してくれると期待するな、ってね」

「だからさ、ジョークは山賊、僕達は放浪者。見た目も中身も同じでしょう？」

少年にそこまで言われて、男どもは黙るしか無くなった。

茶も供されないまま時を過ごし、侍従長らしき紳士が迎えにきた。長い廊下を移動して謁見の間に通される。

そこは劇場の如く広々とした空間であつた。一面に豪華な絨毯が敷かれ、折角の玉床を隠している。奥には玉座があり、国王らしき人物が鎮座している。

黒い天鵝絨に銀糸をあしらつた衣装を纏い、威厳たつぷりに見える。歳は四十前後であろうか。兵どもの頂点らしく筋骨隆々たる体付きで、太い首が印象的だ。

ウテイホを先頭に膝を折り、礼をする。最後尾のキリムだけは立ったまま会釈をした。

王が野太い声で話す。

「娘が大変世話になつたと聞いた。国王として感謝する」  
ウテイホが恐縮と言う。

「私どもは当たり前前の事をしたに過ぎませぬ。どうかお氣になさいませぬ様に」

「アスマンの王弟殿か。随分と変わられたな」

「私めも、ここにおります細も変わりました」

「もうアスマンには住む者もおらぬとか」

「御意にございます」

「そうか、残念な事だ。ところで、娘を術で救つたのはその少年か」  
キリムが進み出る。

「そうです」

ジョークは頭を下げたまま『術じゃないくせに』と口の中で呟いた。夫婦は少年が礼儀正しく対応できるか心配している。



王は話を続ける。

「それはどんな術なのだ？」

「申し上げられません。また申し上げてもご理解頂けないと思います」

三人は悲鳴を上げそうになった。

「いやそうであつたな。術とはそう言うものなのだろう」

「陛下は武を以って国を治められる方です。術は不要でしょう」

「その通りだ。詰まらぬ事を聞いた。許してくれ。でも、そなたの名前ならば聞いても構わぬか？」

「僕はキリム・ズム・アスマンと申します」

「おお」

王は目を見開く。キリムが名、アスマンが王族、ズムは王かその正当な継承者を表している。つまりアスマン国国王キリムと名乗つたのだ。

「若き王よ、我が娘の命の代償として何をお望みか」

「望みは一つ、アスマンの再興です。でも差し当たっては特にございません。王都に居を構える事をお許し下さい」

「そなたは歳に似合わず高い知識を持つと聞く。我がバルバーレもこれから難しい舵取りをせねばならん。是非とも知恵を貸してくれ」  
「喜んでそう致しましょう」

「では、貴殿達は今後、城への出入りを自由とする。また住む場所がなければ与えるが」

「それには及びません。城の書物を自由に閲覧する許可を下さいますか？」

「家より書をご所望か。機密文書でなければ何でも読むがよい」

王は笑いながら奥の間に移り、一同はその場を辞した。

廊下に行くウティホは少しふらついている。

「寿命が十年は縮まってしもうたわい」

ノンモも同意見だ。

一方、ジョークは違う反応を見せる。

「ああ、勿体ない。あの口振りだったら何かもつと価値のある物が貰えそうだったのに」

「一番価値のある物を貰ったさ」

キリムは澁刺として応えた。

「謙虚に見せて、面白そうな人物だと思わせる必要があつたんだ。そうじゃなきゃ城の出入り自由なんて特権が貰える筈もない」

「それは、そんなに価値があるものなのか？」

「金銀を驚掴みにするのと同じだよ。でも、金儲けに使うつもりはないけれどね」

「情報が何よりも価値があるって事か？」

「さすが、理解が早いね」

「だったら城内に家を貰えば良かったじゃないか」

「それじゃあ僕達がバルバレー王に囲われているみたいになっちゃうでしょう。アスマン人の誇りを保つ為にも、干渉されず自由に動く為にもそれはできない」

「王都に居を構えるつたって、買う金もないくせに」

「何とかなるんじゃないかな」

この少年はしっかり者なのか抜けているのか、ジョークには分かっていなかった。成る程、面白そうな人物である事は間違いないのだが。

控えの間に戻ると、マウ・リサが待っていた。これまでの動き易い装束ではなく、王女らしく礼装ドレスを纏っている。

「首尾は如何でしたか？」

ウティホ達が応える。

「如何も何も、二度と御免じゃわい」

「あたしも」

「俺も」

「？」

王女には分からない。事情を聞いて驚いた。

「キリム殿はアスマン国の国王でいらっしゃるのですか？」

ウティホが溜息混じりに言う。

「正式に戴冠なされた訳ではないが、成る程、第一位の王位継承者なのは間違いない」

「では良いではありませんか」

「いやそうなのじゃが、もう形のない国であるし、バルバーレ王と対等に渡り合うのはどうかと」

「そんなに堂々としていらっしゃったのですか？」

「そうじゃな」

「あの父を相手に胸を張れる方なんて見た事がありませんわ。ご立派です」

キリムは頭を掻いている。

「別に威張りたくてそうした訳じゃないんだよ。必要があったからそうしたまでで・・・」

「いいえ、ご立派な事に変わりはありません」

南方で出逢ったマウ・リサは執政者であったが、王宮では娘でいられるのだらう。武張った感じは微塵もなく、まるで別人の様だ。凜とした印象はそのままであるが。

一行は王宮を後にした。王女が手配してくれた軽馬車がなければ歩く羽目になっていた。有り難い事に、こうして堂々と、且つ楽に移動できている。

馬車は速やかに石畳の坂を下り、辻を幾つか曲がって大通りに出た。馭者を勤めるウティホは街並みを懐かしく感じていた。沢山の馬車が行き交い、見知った商店が軒を連ねている。やがて行き止まりになり、王都で最も賑やかな公園に至った。中央には名も知らぬ英雄像が据えられている。広場では市が開かれ、露店目当ての観光客や買い物客でこった返している。人いきれと喧騒で気後れしそうな程だ。

馬車は広場に面したとある商店に横付けされた。立派な扉が開け

放たれており、引つ切りなしに客が出入りしている。一行はずんずんと店内へ入った。

ウティホが接客している男の背中に話し掛ける。背が低く太った男だ。

「ギーゾ、お前が売り子をしているなんて、今日は赤い雪が降るんじゃないか？」

男はその声に驚いて振り向き、怒った様な顔付きでウティホの肩を掴んだ。

「ウティか？ 優男のウティなのか？」

「いかにも」

中年二人が熱く抱き合う。互いの背中を叩き合い、両者とも顔を真っ赤にして、今にも泣き出しそうな表情だ。

「ウティよ、よくぞ生き残った。いや、必ず生きていると信じていたとも」

「生き残っただけじゃよ」

「そんな事があるものか。お前には運があるじゃないか。生きてさえいれば勝手に道が開く程の幸運がな」

「その運の源泉も尽きた様じゃ。頼れる者がお前だけになってもうたからの」

商店主のギーゾは豪快に笑いながら、一行を奥へと案内した。

商品の在庫を移動させて、空いた椅子に一同を座らせる。

「今、茶を持って来させる。ゆっくりできるのだろう？」

「ああ、そのつもりだ。しかし、お主は変わらないな」

「貴様は変わったなあ。すっかり痩せちまって」

「仕様があるまい」

「そうだな」

見詰め合っているウティホの脇をノンモが小突く。

「ああ、そうじゃった。これが細のノンモ。こっちがキリムとジョクー、まあ義理の息子みたいなものだ」

「奥様とは王妹陛下であらせられますな。何とも恰幅のおよろしい御方で」

「何だつて？」

「いえ、失言お許し下さい」

「茶菓子が出れば許すだろうね」

「お出ししましょう」

ギーゾがウティホに耳打ちする。

『お前が恐妻家になったと聞いて驚いたもんだが、この奥方じゃあ仕方がないか』

『いや、頭が上がらないのは怖いからじゃないぞ。それだけの理由があるんじゃない』

キリムがウティホに問う。

「ねえ、物凄く仲が良さそうだけれど、どんな関係なの？」

「関係も何も、生まれた時から知り合いじゃ」

「ウティとは生家が近所で、子供の頃からつるんで悪さをしたもんだ」

「ギーゾはこれでも大商人でな、儂の隊でこやつキャラバンの隊商を護衛をしたり、儂が近衛になってからはいろんな情報を集めて貰ったりしていたんじゃないよ」

暫く昔話に花が咲いて、三人は置いてきぼりを喰わされた。

ノンモが痺れを切らす。

「あんた、そろそろ本題をさ」

妻に催促されてウティホが切り出す。

「そうじゃな、実は頼みがある」

ギーゾは直感した。嫌な予感を。

「金の事以外なら何でも請け負うぞ」

「他でもない。その事じゃ」

「幾ら入り用なんだ」

「金貨で一億枚じゃ」

「何だと！」

「嘘じゃ」

「そうだろうとも」

「たったの一万枚で良い」

「ええと、お帰りはあちらです」

「けちじゃのう」

「一万バルドスって言やあ、国王の年俸だぞ」

「ええい、こうなったら百枚で良いから寄越せ」

「それでも無理だ。貸すにしても、せいぜい二十バルドスが限度だ」

「お前も小さくなったな」

「そんなもんだ。三国貿易華やかなりし頃は羽振りよくできたが、今は貿易自体がないんだ。隊商<sup>キャラバン</sup>を組んでもユルグへは易々と入れない」

「北ではまだ二国間の取引をしているものだと思っておったが」

「今年になつてなくなった。世知辛い世の中だよ」

「二国の国交はそんなに悪化しておるのか」

「悪化どころか、一触即発だな」

「そうか、じゃあ致し方ないか」

「ウティホは背負子の底を外し、金と白金<sup>ブラチナ</sup>の延べ棒をごろりと取り出す。」

「これを金貨に換えてくれ」

「ジョクーが目を見張る。」

「ちよつと待った。何だこれは？」

「延べ棒じゃ」とウティホ。

「あなた、金はないと言っていたじゃないか」

「いかにも。通貨は持っておらんぞ」

「金はないが金塊なら持っているなんて誰も思わないじゃないか。」

「あー狡い。皆知っていたな」

「ノンモとキリムは外方を向く。」

「そうかい。俺は仲間外れかい」

山賊はすっかり拗ねてしまった。

ギーゾは感心しながら延べ棒を撫でている。

「これならすぐに換金できるさ」

「相場は？」

「昔よりも純金の値が高くなっている。戦争が近い証拠だ」

ブラチナ  
「白金は？」

「金よりも率が良い」

「じゃあ頼む。お前の取り分は充分取れよ」

「有り難く」

ギーゾは大事そうに延べ棒を仕舞い込んだ。

ウテイホは更に革袋を取り出す。

「こっちはどうかな？」

大きな革袋からは磨かれた<sup>エメラルド</sup>緑柱石やら<sup>ルビー</sup>紅玉やらがじゃらりと飛び出した。

「おお」

ギーゾとジョクーが声を揃えた。

ジョクーはまたかと目を覆う。一方、ギーゾは渋い顔になった。

「確かにこれは<sup>ブラチナ</sup>白金より価値があるが、この国では二束三文になってしまうな」

「バルバーレには宝石を身に付ける風習がないからの。じゃがユルグでは？」

「ユルグだったら街ごと買えちまう」

「何とかして純金か、悪くてもユルグ金貨にしたい」

「それを私にやれと？」

「そうじゃ」

「それで何に使う」

「アスマン再建の資金じゃ」

「お前が王になるのか」

「まさかの」

「じゃあこの汚いのか」

「何だと！」

山賊は条件反射的に怒った。

「いや、こやつでもない」

「じゃあ……」

ギーゾは少年を見遣る。

「ひょっとして、シャマンティン家の息子か」

「そうだよ」

キリムはいともなげに応えた。

「そうか、三国一の知恵者と賢君の間に生まれた子か」

「そうじゃ」

ウティホはどうだ、と言わんばかりだ。

「成る程な。どうやらアスマン再興は夢じゃ無さそうだ。喜んで使われてやるう」

かつての大商人は、その怖い顔をくしゃくしゃにして笑った。

キーゾは屈強な手下<sup>てか</sup>二名を連れて、金塊の換金に出向いた。一同はそのまま店の奥にある小部屋で帰りを待つ事にした。

ジョクーはまだ苛ついている。

「なあ、俺が信用できないのは分かっているけれどさ、あんまりじゃないか」

「信用しているとも」とウティホは惚ける。

「どこがだ」

「お前を信じていなければ、全財産が入った背負子を担がせたりするものか」

「まあそれは……いや、欺されんぞ、俺はその事を知らされていなかったんだからな」

「そう言っな。お前に更に大切な仕事を任せようと考えておるのじやから」

「何だ、それは？」

「商人に扮してギーゾに同行してくれ」



「それで？」

「ユルグの情報を集めて欲しい」

「どんな情報だ？」

「最も知りたいのはユルグ軍の侵攻の時期と場所じゃ。規模も知りたい」

「そんな事、首都にある法皇庁にでも潜り込まなきゃ難しいだろう」

「いや、商人ならば分かる。物価の変動と物流の量、それに流言から憶測するのじゃよ」

「噂話の類が参考になるのか」

「例えばこうじゃ。お前達が北方へ出向いたとして、ユルグ北部の街には多くの物資が集まりつつあると知った。一方、噂ではユルグ軍は南からバルバーレを攻めるのではと言う意見が大半を占めている。それから導き出される結論は？」

「噂はユルグ軍が流した嘘っぱちで、北から攻めて来るつてのが正解か？」

「そうじゃな。北から攻める準備をしていて、それも最終段階に近いという事じゃ」

「そこまで詳しく分かるのか」

「兵を送るのと、物資が送られるのはどちらが先か？」

「そりゃ兵だな。当面必要な分は一緒に持って行けるのだし、追加物資はそれが残り少なくなつてからだろうから」

「そうじゃ。兵站は大切な軍機関じゃが、兵が進まねば兵站線を作れない」

「今のは基礎編かな。次は？」

「ユルグ南部の街へ行ったとして、お前はその街が賑わっていると感じたとする。物価を調べてみると半月前から急激に上がっている。ただ軍の大部隊を見掛けたりはしていないし、南からも北からも進攻すると言つ噂は耳にしない」

ジョークはこの推理ゲームが面白くなってきた。

「ええと、多分こうだ。物価が上がったって事は政府が物資を大量

購入し出したって事で、侵攻の実施を半月前には決めてたって事だな。南の街が賑わっているのは、ここに金が集まっているからで、何かこの街の物を買っているって事だ。でも、軍がこの街を拠点にするなら、その事を商売人が知らない筈はない。やっぱり侵攻は北からだ」

「よく分かったな。その通りじゃ。軍が虚偽の噂を流す場合、特にどこから侵攻するのかに関しては正解の方角から真逆の内容が聞こえてくる事が多い。北から攻めるつもりなら、南から攻めると間違った情報を流したいじゃろう？ 但し、そう考えるのは北に布陣している軍幹部達じゃ。南の街には誰もおらん。間違った噂を流したくてもできん理屈じゃ」

「いやあ、面白いな。それで集めた情報はどうやって知らせるんだ？」

「手紙を送れ。同じ内容を二通以上、違う業者を使つてな」

「分かった。俺の名推理を聞かせてやる」

キリムが口を挟む。

「あのさ、事実のみを坦々と書いて欲しいんだけど」

「俺の推理は書いちゃ駄目かい」

「書いても良いよ。でも事実の部分とは別にして、追伸として書いてよ」

惘然としながらも山賊は応じた。しかし自分を間諜に使うとは、人の考え方はどこでも同じらしいと嘆じながら。

ギーゾが帰着した。金貨の詰まった木箱を三人掛かりで持ち上げる。卓に乗せると、どさりと小気味良い音がした。皆が丸くなってそれを囲み、重々しく蓋が開けられる。

「い、幾らになったんじゃ？」と吃るウテイホ。

ギーゾは坦々と応じる。

「五千バルドスだな。ここにあるのは四千枚で、残りは銀貨と銅貨にしておいたぞ」

「ちと色が薄いが？」

「そりやアスマン金貨に比べればスカスカだよ。金含有率は三割つてところだ」

ノンモはもう耐えられない。

「まずは何か食べようじゃないか。肉とかさ」

「まずは家だよ。それに服も新調したいな」

少年にも買いたい物は一杯ある。

ギーゾを先導に、一行は高級住宅街へと移動する。城に近く、市場とはやや離れた一角に目的の物件があつた。

ギーゾが借りてきた鍵で鉄門の南京錠を外す。

「これがお奨めの物件だ。旧侯爵の別邸で、塀も高く屋敷も立派。衛兵の詰め所もある」

ノンモがかつての商売勘を取り戻したかの様に、鋭い目付きで言う。

「ご託はいいから値段を言いな」

「この庭を見てくれ。手入れはされていないが、見事なもんだろう」

「こりや庭つて言うより雑草畑だね。ところで値段はどうなんだ？」

「それがたつたの二百バルドス！　ときたまんだ」

「確かに安いが、何か理由がありそうだね」

ノンモの目が陰しく光る。

少年も会話に加わつた。

「お化けが出る、とか？」

「滅相もない。誓つて何も出ないぞ」

商人は大袈裟に頭を振つた。<sup>かぶり</sup>

ノンモが厳しく追求する。

「隠すんじゃないよ。安いのは何か理由がある筈さね」

「いや、それがね、住んだ者は皆病気になるらしいんだ」

「どんな病気だい？」

「春先から初夏に掛けて、軽い風邪の様な症状が続くらしい。それ

も毎年」

「やっぱりね。そんな事だと思ったよ」

王妹はのしのしと庭を進む。そして、黄色い花を付けた草が咲き誇っているのを見付け、決断した。

「それじゃあ、こうしよう。値段を百八十バルドスにするか、そっちの費用持ちで衛兵と下女を付けておくれ」

「百八十はきついな。でも人手なら貸せそうだ。衛兵と下女を一人づつ、それを月に銀貨百枚で付けよう」

「信用できる人である事を条件に、月に銀貨八十枚でなら。それ以外に、ここが住める状態になるまで十人貸しておくれ」

「商談成立だ」

ギーゾは金貨と交換に鍵を渡し、ほくほく顔で店に戻った。

一行は貴重な拠点を手に入れる事となった。曰く付きの物件だが、ウティホは妻の判断が気に入らない。

「買い物上手なお前の判断に口は出すまいと思っていたが、病気になる家ではなあ」

「馬鹿だねえあんたは。この草を見て御覧よ」

「野菊か？」

「豚草だよ。こいつの花粉には毒がある。それもこんなに生えていちゃあ、病気にもなるさね。刈っちまえば済む話さ」

「おお、そうか」

やはり口出しせずに正解だった。

やがて店から十人の人手がきた。ノンモの本領発揮である。全員に手鋤を持たせ、庭の手入れから始める。豚草は土ごと外して捨てさせ、それ以外は芝を残して雑草全てを刈り取らせた。そして、屋敷の窓を開け放ち、床と言わず壁と言わず徹底的に拭き清める。古い物ばかりだが調度品がそのまま残されており、新たに買う必要は無さそうだ。

見る見る手入れが進む。寝台の敷布や窓掛けと言った布地類を買

い換え、ついでに皆の服も新調し、食料品や燃料、それに酒と茶、薬草も買い揃えた。

万事終了し、古惚けた家が立派な屋敷となった。臨時アスマン城の完成である。山村で寂しく暮らしていた頃とは何もかも違う。ここから全てが再出発するのだ。

## 第五章

新調した服を着て、キリムは足取りも軽く登城する。お付きはジョークである。

届けられた入城許可証を掲げ、二つの門をくぐり、歴史あるバルバレー城の中でも一際古惚けた建物に入る。王宮の書庫だ。

二重の扉を開き屋内に入る。微かな陽射しがあり、しんと静まり返っている。

闇に目が慣れると、そこは書の小宇宙であつた。六角形をしたアーチ型の天井には『三才を記す女神』のフレスコ画が描かれ、六面ある壁は全て書棚。腰の辺りから天井まで書籍が詰まっている。数千冊はあるだろうか。どれも立派な表紙の、重そうな本ばかりである。

ジョークが本音を漏らす。

「蔵書は見事だけれど埃臭い場所だな。それに、こう薄暗くちゃ何も読めないだろうに」

キリムが得意げに話す。

「本を傷めない様に太陽を遮っているんだ。暖房や灯がないのは火事を起こさない為だし、貴重な書物を保存する場所はどこでもこんな感じだよ」

「それでどうやって読むんだ？」

「目的の本を持って別室で読むのだろうね」

「お目当ての本はありそうかい？」

「うーん、どうだろう」

「俺も探すのを手伝おうか」

「ここにある本は全部知っているよ」

「全部って、これを全部か！」

ジョークは自分達をぐるりと囲む本の山を見ながら、信じられない

いでいる。

キリムが嘯く。

「実際に読んだ訳じゃないけれど、内容は知っている」

「分かったぞ！ 術で読んだんだな」

「あはは、まあ術の一種かも知れないね。母に教えて貰ったんだ」

「三国一の知恵者とか言う母親か？」

「実際に三国一かどうかは分からないけれど、書物や口伝、詩歌、碑文なんかを集めるのが好きな人だったよ」

「変わった趣味だな」

「そう言う家柄だったんだ。知識を集めて、王に助言をしていたらしい」

「それこそ珍しい職業だ」

「だからかな？ 難しい本でも平易な表現を使って教えるのが上手かった」

「どんな風に？」

「例えばこれ」

キリムは書棚から紺の表紙をした本を取り出した。ジョークはそれを受け取る。

「ほお、『律令論』って書いてある。法律書だな。こりゃ難しそうだ。それに分厚い」

「真面目に理解しようと思っても、それまでに何十と別の本を読んで知識を蓄えなければ読み解けないだろうね」

「俺は駄目だ。そんな根気はない」

「実は、そんなに難しい本じゃないんだ」

「そうなのか？ どんな内容なんだ」

「いろいろな事が書いてあるけれど、結論は一つ。法律を作ったら、法官がそれを扱うべきって話」

「まだちよつと分かり辛いな。具体的に説明してくれ」

「世の中には様々な法律があるでしょう？ それを守らせているのは誰だと思う？」

「そりゃあ王様だろう。地方に行けば、その土地を治める貴族だね」  
「その人達が難しい法律を全部理解しているの？」

「していないんじゃないか？」

「だったら、誰が判断するの？」

「そりゃお前、適当に、雰囲気でだな・・・」

「それでは民が困ってしまう。何をしてはいけないのか分からない」  
「じゃあ、どうするんだ？」

「法律の事をよく知っていて、正しく判断できる法官が必要だこの本には書いてある」

「法官ね。法律専門の官吏か」

「そう。彼らは法律の事しか頭にない。だから有力貴族に胡麻を搗つたり、民同士の問題でも袖の下で判断を曲げたりしないだろうと」  
「法官つて、そんなに大勢いるのかい」

「いないよ。この本の著者が法官だから、法官を一杯増やすべきだと書いたのだろうね」

「そうか。だからその官吏の事が都合良く書かれているんだな。袖の下を欲しがらない役人なんていないのに」

「そう言う事」

「凄いな、お前さんは。でもそれっぽっちの事を説明するのに分厚い本が必要なのか？」

「必要ないよ。でも反論を封じる為に理屈が捏ねてあって、こんな本になったんだ」

「ひょっとして、ここにある本全部がそんな感じで、一行二行で説明できる事をわざわざ難しく書いてあるものばかりなのか？」

「正解！」

「ああ、愚かしい。馬鹿の極地だ」

「本なんてね、そんなものなんだよ」

「だったら、どうして『自由に書物を読ませてくれ』と王様に嘆願したんだ？」

「本が目的じゃないんだよ」



「本が目的じゃない？」

「その人に逢いたくてね」

「どの人だって？」

ジョクーは、キリムが視線で示した辺りに目を遣った。いつの間にか、自分の傍らに老婆が佇んでいる。

「ひいつ」

「人様を見て悲鳴を上げるとは失礼な奴じゃ」

「こんにちは、大陸で唯一の術士殿」

キリムはその小さな人に頭を下げた。

場所を書庫に隣接している離れ家に移す。彼女はここに住みながら、本の面倒を見て暮らしているらしい。

二人は勧められるまま椅子に座り、出された茶を啜っている。

「このお方が、いつかお前さんが言っていた『バルバーレの術士』さんか」

「そうだよ」

「成る程そんな感じだ」

黒い頬被りをした老婆は、腰を深く曲げてよぼよぼと歩き、自分も椅子に座った。

「王から聞いていたよ。若い客が書庫にくるだろうと」

キリムが尋ねる。

「えっと、お婆さんの事は何と呼べば良いのかな」

「婆で良い」

「母からは、婆様が単独で数万の敵兵を撤退させたって聞いていたけれど」

「そんな事もあったかの」

「しかも二度も」

「回数なら確かに二回じゃな。それ以上でも以下でもない」

ジョクーが堪らず口を挟む。

「すげえ、数万かい」

「若者よ、人数はそんなに問題じゃないんだよ。日中なら寧ろ多い方が良いとも言える」

「そんなもんかね」

「そんなもんさね」

老婆は何だか楽しそうだ。

ジョクーが続けて聞く。

「どんな術だったんだ？」

「王女から聞いたが、少年が南方でやった術と大差ない代物だよ」

「ありゃあ手妻らしいぜ。暗示とか何とか」

「暗示と術に境目なんてないさ。言い方が違うだけで同じものを指している」

「じゃあ、婆さんも掌を刺したのかい」

「ちと違う」

「どうしたんだ？」

「こうやった」

老婆は頬被りを上げた。そこには皺だらけの顔、鷲鼻、そして白目になった両眼がある。

「目か！」

「そうじゃ。自分の目玉を抜き取った」

「痛かっただろうに」

「痛かったわいな。悲鳴も上げた」

老婆は顔を引き攣らせ、硬直した両の指をわなわなさせて、大音量で再現した。

「ひいひいひい、とな」

「ひい」

ジョクーとキリムも悲鳴を上げる。思わず抱き合ってしまった。

「まあ、敵さんもそんな感じで悲鳴を上げておった」

元山賊は感心している。

「そこまで国に殉ずるとは、見上げた婆さんだ」

「いやな、目を患っておってな、元から殆ど見えぬ状態だったのじ

「や」

「あら、そうなんだ。しかし効きそうな術だ。二回目でも効いただらうな」

「効いた効いた。二度目はもっと効果的じゃった。実際に失明した兵士もおつたと聞く」

「どうしてだ？」

「一回目でこの術自体が有名になった。更に、両眼を失えば完全に光を失う訳じゃから、より悲壮な覚悟がいるじゃろう？」

「初手から見えなかつたくせに」

「敵さんはそれを知らん」

「これだから術士って奴は……」

「でも痛かつたわいな」

「それだよ。暗示に過ぎないと言っても、術者が苦痛を感じなきゃ効かないんだ」

キリムには何か思うところがあるらしい。

「ジョクーには前に理屈を話したよね」

「それは聞いたが？」

「あれは強ち嘘じゃないと思うんだ」

「婆もそう思う」

元山賊は少し驚く。

「あんたもその理屈を知っているのか？」

「知っているも何も、それを考え出したのはこの婆じゃよ。そして、この子の母に伝えたんじゃ」

「後継者と見込んで、秘法を伝授したんだな」

「いや、聞かれたから教えたまでじゃよ」

「勿体ない」

「そんな事があるものか。金貨を貰ったしな」

「親父が言っていたよ。金に勝る術は無し、ってね」

「上手い事を言いよる」

「キリムよお、これから大変だな。敵と対峙する事になったら、お

前さんはその立派な目玉を抜き取らなきゃならない」

少年は微笑む事でその心配を否定した。

「それでね、僕はちよつと違う術を考えたんだ」

「ほう、やはり目は惜しいか」

「それもあるけれど、理屈上はこっちの方が効きそうだからね」

「ふむ、どんな術だ？」

「婆様の術も、僕がこの前試した術も、肉体の苦痛を伝播させるものだったでしょう？」

「ああ、痛いところから『気』が飛んで、目や耳から相手に伝わるんだっとな」

「そう。でもね、肉体的な苦痛は一時的なものだし、心の痛み程苦しくはない」

「そうだな。心の痛みは耐え難いものだ」

ジョクーはしみじみと応える。彼とて悲しい記憶は多い。

キリムは話を続ける。

「もしも、心の痛みを伝播できたら？」

「そんな事ができたら、凄い術になるだろうな」

「どんな心の痛みを『気』にするつもりなんじゃ？」とお婆も興味津々だ。

少年は語り出す。滔々と、淀みなく。それは、彼が毎夜自分に課している義務だった。

悲しみが劣化しない様に、床に就けば思い出し、繰り返し再現させていた。今では苦勞しなくても夢で見られる。この四年、更に言えば実母が死んでからずっと行ってきた苦行である。その内容は生々しい。整理された物語ではなく、年端も行かぬ少年らしい経験談である。小説よりは詩歌に近いのかも知れない。聞いた相手が自身の想像力で補完しなければ理解できる話にならない。しかし、その分悲しみが深く伝わる。

嘆きと憂いと、後悔と懺悔とが。

少年の語りはジョークの心に染み通ってゆく。彼の感情の水面に静かな波紋を拡げる様に。キリムの発する痛みが、確実に、ジョークへと伝播しているのだ。誦文を唱えているのではない。暗示を試みている訳でもない。ただ、言葉を尽くしているだけなのに。

人は、結局のところ、他人の事が分からない様にできている。だから下らない戦争なんてものが連綿と続いているのだろう。ならば言葉は何の為にあるのか。人は人に気持ちを伝えたくて、悲しみや喜びを分かち合いたくて、言葉を創ったのではないのか。

山賊は自分の役目を理解した。

「この話は俺が広める。そして、お前さんがその痛みを術で解放するだろうと言い触らしてやる。大陸中にだ」

キリムは破顔した。

「君がそれをしてくれなきゃ、この術は効かない。意味を成さないんだ」

老婆が付け加える。

「二人して作り上げる壮大な術になるだろう。大地が戦慄く程のな。彼女は生きる楽しみができたと言んだ。

二人は婆様の家を後にした。戸口の老婆は、その見えない目で二人を見送っている。

「キリムよ、あの婆さん、まだ居るぜ。すっかり夜も更けたつてのに」

「あの人には昼も夜も関係ないんじゃないかな」

「でも寒かろうに」

「そうだね・・・」

キリムはジョークのこんな所が好きだ。他人の痛みを自分のものとして感じている。それだけ大人なんだろうと思う。いつかは自分もジョークの様な大人になれるだろうか。

王宮の最奥、国王執務室。その畏れ敬うべき場所に、夜陰に紛れる様にして一人の客が訪れた。序列の厳しい王宮にあつて、唯一、身分を超越している人物である。客は、継ぎの間に詰めていた侍従長に退室を命じ、ノックも無しに扉を開いた。

「入るぞえ」

「おお、婆様か。こちらに来て頂けるとは珍しいな」

王は書類に走らせていた筆を止めて、手ずから席を用意した。老婆はその椅子に当然の如く座った。感謝の意を述べる事もせずに。それでも王は笑っている。

「わざわざ来られたからには、何か重要なお話があるのでしょうか」  
「そうじゃ、坊よ」

「私も四十になる。そろそろ『坊』はご勘弁頂きたい」

「この婆にしてみれば、お前様はいつまで経つてもただの『坊』じゃよ」

王は嬉しかった。今では万人に傳かれている身だが、二人の関係だけは昔と何も変わらない。

「お話とは、ユルグとの戦の件でしょう」

「ほお、少しは知恵が付いた様じゃな。ならばその戦、どうするつもりなのじゃ？」

「私の覚悟を聞いてらっしゃるのですな」

「覚悟というか、判断を聞きたい」

「それは？」

「戦には種類が二つある。それをどう見極めるのじゃ？」  
「二つ？」

「そう。『してはならぬ戦』と『してもよい戦』の二つ」

「分かる様な、分からぬ様な例えですな」

「それは分かつておらぬという事じゃよ」

「教えて下され」

「よかるう」

王の素直な言葉に満足し、老婆は話を続ける。

「まず『してもよい戦』とは、勝つ戦の事じゃ。必ず勝てると判断したなら、どうしようが構わない。お前様の好きにすれば良からう」  
「そうでしょうな」

「そして『してはならぬ戦』とは、負ける戦の事じゃ。更に言えば『勝つかどうか分からぬ戦』もそれに含まれる。明日にも起こりうるユルグとの戦はこれに充たると思う」

「確かに今の段階では敵軍の規模も分からぬし、判断するには情報が少ない。だからと言って、向こうから仕掛けてきたなら避けようがないではないか」

「それでも避ける。それがお前様の努めなのじゃよ」

「しかし、我らがどうしようが、もう止められないと思うが」

ユルグは一方的に通商を拒否し、更には一個大隊で南方国境を侵している。実害はなかったものの、既に開戦していると判断してもよい状況なのだ。

「そう思うのなら、全く別の働き掛けをするのじゃな。早々に白旗を掲げてしまうのも、その一つじゃ」

「それはできぬ。私が王としての地位を守れなくなる」

「ふむ。では、戦に勝つ方法を考えて、実践するしかなかろう」

「それも難しい。何度も言うが情報がないのだ」

「想像するんじやよ。予測とも言おう。最悪の場合を考慮しつつ、それに打ち勝てる状況を作り出せばよい」

王は自分に問い掛けてみる。我が軍は強い。決して負けない。そう信じてきた。だが、婆様と対峙していると、その絶対的な自信が屋気楼の様に希薄なものとなってしまふ。この人に嘘は吐けないのだ。ちゃんとした裏付けがなければ、一笑に付されてしまうだろう。彼女は『想像しろ』と言っている。敵に関しては憶測しても的外れになりそう。一方、我が軍に関する情報ならば頭の中に揃っている。

バルバーレは大国であり、充分な富の蓄積があり、軍も強大だ。だが、実戦から遠離って久しいのも事実である。隊はちゃんと動く

だろうか。指揮官の力量は？ 高級武官達の顔を思い浮かべても口先ばかりが達者な年寄り揃いだ。できもせぬ事をできると主張し、いざとなれば尻込みするのではないか。

「婆様！」

「何じゃ？」

「分かりました。すべき事が」

「そうか。お前様は考えた。そして思い至った。それが何かは聞かぬ。お前様を信じておるからの」

その小さな人は、そう言い放つと早々に立ち去ってしまった。長居すれば、王宮の官吏達に煙たがられる事を知っているのだらう。

王は、改めて老賢者の凄みを知る思いがした。

ユルグがとうとう動き出した。その事実を知ってから漠然と思い悩むばかりであったが、こうして彼女と逢い、少しばかり会話するだけで成すべき事が見えてきた。自分が幼かった頃からそうなのだが、彼女は、必要としている時に必要な分だけ手を差し伸べてくれる。それに、こちらから泣き付かずとも察してくれて、こうやって訪れてもくれる。

王にとって、親代わりとも言える存在なのである。

キャラバン

隊商が出立する。今や国交がない隣国へと赴き、宝石を高く売り付ける為である。

ギーゾを隊商長に計算高そうな商人達が付き従う。屈強な護衛とすら若き女性もいる。どちらも、いざという時に役立つってくれる事だらう。そして、いつでも呑気な顔付きのジョークも同行する。

ウティホが心配そうに言い添える。

「ジョークよ。あれこれと頼み事をしてしまったが、お前が無事である事が最も大切なのじゃぞ。保身をしっかりと」

「そうだよ。争い事には加わらずに隠れてやり過ごすのが一番だよ」とノンモもいつになく心配そうだ。そして金貨の入った革袋を差し



出した。

「これはね、お前さんがお役目を果たす為の資金だよ。残そうと考える必要はない。どう使っても良いお金だからね」

男は笑顔を止めて受け取る。金そのものよりも夫婦の優しさが嬉しかった。

キリムが堅く握手する。

「どうか地上で一番呑気なこの男が、地下でも呑気でいられるか試したりしません様に」

「良い誦文だな。少しはきりつとした顔になって帰ってくるぜ」

すっかり商人に化けた男は、笑顔で旅立って行った。大陸の北端、ユルグ教国との国境地帯へと。夫婦は揃って溜息を漏らす。

「彼奴と知り合って日は浅いが、いなくなると辛いもんじゃな」

「全くだよ。そうだ、無事に事を成し遂げたならウチの息子にしてやろうじゃないか」

「おお、それは良い考えじゃな。儂らの家督を継がせてやるか」

本人の意思は無視されたまま、元山賊の未来が決定してしまったらしい。

少年はまた孤独になった。雑事を夫婦に任せ、一人で城内を散策している。こうして歩いていても、煩く付き纏う相方はもういない。目的のない時間を過ごしていると、いろんな発見があるものだ。

城内で最も忙しそうなのは国王だ。朝から官吏を相手に仕事、昼からは貴族達と、夜になっても執務室の灯りが消えない。責任が重い人物がその分忙しいのは理屈に合っているし、またそうあるべきだとは思うが、何が楽しくて王なぞしているのだろうと思ってしまう。

その訳を、途中から散歩に付き合ってくれているマウ・リサが教えてくれた。

「高貴であると言う事はそれだけ多くの義務を背負うと言う事なの。そして王たる者、泣く事も逃げる事も、疲れて仕事を放擲する事も

許されない。父はそう言っています」

「大国の王様つてさ、想像していたのと全く違ったよ。毎日働き詰めで、それでも喜々としているなんて」

「実際のところ、どうなのかしら。まさか父に『楽しいの?』とは聞けないし」

「そりゃそうだ。マウ・リサも同じだよ。執政官として南方にいれば、楽しいかどうかを行動基準にしないだろうし」

「そうね。自分の役割を果たすのに必死で、楽しいとか嬉しいとか言う感情はなかったわね。でもキリム陛下も国王の元で暮らしておいでだったでしょう?」

「陛下は止めてよ。あのね、国王つて言ってもアスマンは小国だったし、商売事と兼業だったしね。専業の王様は違うと思っていたんだ。もつとこう、毎日笑いながら遊んで、食事して、女を侍らしている様な」

「それでは変態ですわ。キリム様はそうなりたいのかしら」

「いや、その……」

気まずい雰囲気になったところに助け船がきた。侍従長が王女を呼びにきたのだ。

「殿下、王が呼びです。キリム様もご同行下さい」

「僕も?」

二人は小走りで移動した。

官吏達の待機する継ぎの間を抜けて、王宮の最奥というべき国王の執務室へと入る。

通常の会議ならば会議場が別にある。ここで行うのだから、余程機密性の高い議題なのだろう。室内には巨大な楕円の卓が設えてあり、既に十名程の人物がそこに着いている。

最後の二人を待っていた貴族や高級軍人達が一斉に視線を浴びせる。小僧どもが何をしにきたのだ、と言わんばかりだ。キリムはそんな事に頓着しない。マウ・リサも同じ。王女は国王の横に位置し、

少年は誰もが遠慮して座らなかつた中央の席に腰を下ろした。

王が口火を切る。

「さて諸君、我が国の主要な顔触れがこれで揃った。二年振りの軍議を始めよう」

まずは王女によつて新しく任命された老兵士、南方方面軍旅団長による現状報告である。

「約一月前、ユルグ遊撃大隊一隊が南の国境を割つて侵入し、我が国土の南方一帯を威力偵察しました」

官吏の長たる侍従長が議事進行を勤める。

「被害はどうでしたか？」

「特にありません。南方の軍備が手薄だと知られてしまった事を除けば」

「それからの敵の様子は？」

「今現在の状況は知り様ありませんが、私が任地を離れるまでは、新たな動きはありませんでした」

「南方方面軍の対処は？」

「王女殿下の訓導を得まして、国境の監視強化と伝令網の充足、国境防壁の建設を完了したところです」

王女が尋ねる。

「出城ではなく防壁を築いたのですね。良い考えだと思います。その場所と規模は？」

「国境の森を抜けた箇所には築きました。一本道である貿易行路とその周辺の平地に蓋をする様に。敵が南方から再侵入するとすれば、四つ足でさえ踏破困難な密林を抜けるか、石造りの防壁を壊さなければならぬでしょう」

聞き手が侍従長に戻る。

「まずは安心できそうですな」

「ユルグ軍が一個連隊四個大隊を以つて侵攻してきたなら、そうですな、四日は安心できるでしょう」

その言に一同は色めき立った。貴族の誰かが声高に叫ぶ。

「国王の兵士を大勢預かっておいて、それでたったの四日とは」

他の連中も同意の様だ。老将への批判が集中する。矛先に晒された老兵士は平然と構えていたが、王女は顔を赤くして憤っている。

今はそんな論争をすべき時ではないのだ。

「皆様、どうか建設的な意見を述べて下さい」

「やれやれ、こりや愚にも付かない会議だね」

突如、キリムが口を挟んだ。

貴族の中でも長老らしき人物が応じる。

「黙らっしゃい。其方はあくまで部外者に過ぎぬ。王命もあつて参加を許したが、そもそもこの重要な会議に参加できる身分ではないのだと心得えられよ」

「身分だつて？ 身分が相応しければ、おつむが空でも構わないのかな」

「何たる暴言！」

「暴言じゃなくて至言のつもりだったのだけれどね」

矛先が少年に変わった。囁々たる批難が浴びせられる。

「黙れ！」

王が一喝した。

「若きアスマンの王よ、よろしければご意見を賜りたい」

少年が足を組み替えて言い直す。

「バルバーレには丈夫が多いと聞いていたけれど、どうやらそれも昔話みたいだね」

王が応じる。

「確かに、我が軍は戦から遠離つて久しい。まだ戦闘を好む気風は残っているが、組織的な現代戦となると、頼りになるのかどうか怪しいものだ」

「王よ……」

貴族達は王の口振りに落胆した。キリムが話を続ける。

「今『組織的な』って話が出たから言うけれど、組織は常に変化させなきゃ駄目なんだ。特に戦っていない暴力組織はね。浜に上げら

れた魚も、干したり火を加えたりして変化させなければ腐っちゃうでしょう？ 戦を知らない軍隊は機能しなくなる」

王は自分の軍を省みる。

「南方方面軍の旅団長を除いて、軍の人事で変更があった事はない。どの隊も指揮官はここにいる様な年寄りばかりだ」

「この際だから、みんな挿げ替えれば？」

「罪無き臣を馘<sup>クビ</sup>首にはできぬ」

「戦争がなかったんだ。失敗する機会がなかっただけでしょ？」

そして今度の戦でそれをするんじゃないかな」

「いや、北方では何度か戦役があった」

「二度ね。そのどちらも婆様が一人でやつつけてしまった。それ以外のいざこざも、アスマンの取り成しで事無きを得てきたでしょう？」

「その通りかも知れぬ。それでも我が臣達を辱める事はできぬな」

「それじゃあ、こうしましょうか。バルバーレでも図上演習はなさるでしょう？ それで僕と戦って下さい。現在国境を守っている千名強の兵士で、一個連隊のユルグ軍を相手に四日以上国境を保てられれば良し。そうでなければ、旅団長閣下を批難した事に謝罪して、軍の役職から外れて頂きましょう」

「うむ。一度口にしたならば、それも他人を貶めたならば、代わりに自ら実践してみせねば大言壮語との誹りを受けても仕方あるまい。御事と戦わせよう」

貴族や高級軍人どもは血の気が引くのを覚えた。彼らの中に戦術家はいない。ざわめき立て、軍師の立場を譲り合っている。一方、王女は少年が心配でならない。負けてしまえば少年こそが大言壮語を吐いた事になってしまう。もう城へはこられないだろう。

机上に南方の地図が拡げられた。高低差も記載された最新の地図に、新しく設置された防壁が書き加えられる。

防壁の設計図が紹介される。それによれば、高さは背丈の四倍程度。先端は丸く成形され、梯子が掛かりにくい構造をしている。しかも上には足場がない。敵軍が何とか壁を越えたとしても、向こう側に降りるにはまた梯子か、縄を伝って降りるしかないのだ。短期間で設置しなくてはならない状況が生み出した、単純で攻め辛い防壁である。守る側の立場で言えば、狭間の位置が低く相手側に打撃を与える事は難しい。あくまで受け身一辺倒の戦術しか採用できないだろう。

賽と駒が準備された。審判は王自身が勤める。バルバーレ側はようやく軍師を決めたらしく、立派な口髭の貴族が少年と対峙している。賽の目が決めた順で少年が先攻となった。

>一日目・朝<

キリムはユルグ軍一個連隊を千、千、四百と三分割し、その一隊を防壁に向かわせた。続いてバルバーレ軍が動く。防壁を守る兵の数は二百。守備はできても打撃力は無いに等しいだろう。但し、四日以上保てば良いのだから、ここは防壁を守り通す事に専念する。二百人の部隊を二分割し、十二時間毎の交代で防戦させる準備をする。

>一日目・昼<

ユルグ軍は先行部隊で交戦を挑む。十倍の兵力で挑み掛かり、守る側に有利な状況であっても一割の損害を与えた。

バルバーレ側はほくそ笑んでいる。敵の攻勢は侮れないが、離れた場所にある南方方面軍の兵営所にと千の余剰兵があり、二日目の夜には守備隊の交代要員として二百の兵が補充される事になっている。この調子が続いて一ヶ月は保つだろう。更に賽を振って良い目を出し、九十名の兵士だけで敵九十人を倒した。口髭の貴族は喝采を浴びている。

>一日目・夜<

少年は先行部隊を撤退させた。そして審判たる王に耳打ちして、

賽だけを振る。

貴族はその秘匿会話が気になったが、攻めてこないのならば兵を休ませたい。念の為に数名の見張りを残して、他全員を休ませる。

>二日目・朝<

翌日はバルバーレ軍が先行となる。する事もないので部隊を再編し、九十、九十、十の三部隊として十名を索敵に回した。森へ侵入させて敵の動向を探るのだ。残念ながら賽の目に見放され、敵は見付からなかった。

ユルグ軍は猛攻に出る。千名の部隊を二つ同時に進攻させ、賽を二度振る。一隊で十人、更にもう一隊で三十人を屠った。更に賽を振って終了する。

>二日目・昼<

口髭の貴族は敵の三度目の賽振りが気に入らない。三部隊が活動している証拠なのだ。しかし、まずは部隊を立て直さねばならない。残り百五十名の部隊を三分割する。百、二十五、二十五とし、最初の部隊で防戦、二十五騎で索敵、もう二十五騎で方面軍兵営所への伝令を使わした。残る味方を全て出させる為だ。索敵は二十五騎でも少ない。どこを探させるのか指定しなければ成功率は上がらないのだ。

ここで審判の「待て」が入った。伏兵である。昨夜から森を抜ける経路でユルグの歩兵が侵攻していたのだ。その数は二百五十。速度を重視し、遅れた半数の兵を捨て置いて、防壁と方面軍詰め所の間に陣取っている。たった二十五騎の伝令は瞬殺されてしまった。

ユルグ軍の攻め番となる。バルバーレの防壁守備隊は虚を衝かれる形となった。後方からユルグ軍歩兵二百五十が襲い掛かる。賽が振られ、防壁の占有者が入れ替わってしまった。バルバーレ軍は索敵に散った二十五騎と捕虜になった数名を残すのみとなり、更に二千の全ユルグ軍に国境を越えさせる結果となった。

たった一日半の攻防である。血気盛んだった貴族連中はすっかり

萎んでしまった。一方の少年はにこりともせず、掌で賽を遊ばせている。

王が尋ねる。

「我が軍の敗因はどこに？」

「それは、防壁を作った旅団長閣下に聞いて欲しいな」

請われて老将が私見を述べる。

「思うに、どうして最初から伝令を出さなかったのか不思議です。それに無用に兵を分割し過ぎですな。私なら二、三騎の伝令を走らせ、残り百九十七名で防戦させます」

「僕もそうしただろうね。四年前の戦争の時、アスマンは国境全体に長い防壁を築いていた。それでも易々と攻め込まれたんだ。ましてやにわか作りの防壁で、しかもたった二百人の兵士だけで何ができるって言うんだ？ 敵の侵攻と規模及びその編成を南方方面軍兵営所に、更には王都に伝えるのが最優先なんだ。それさえできれば、たとえ一日で突破されようが褒めてやろうと思っていたけれど、賞賛に値する行動が一つもないなんて、逆に感心するよ」

王は俯き黙したまま聞き入っていたが、やがて顔を上げて厳しい表情を顕わにした。

「このままでは敵を利するばかりか、勝手に自滅する軍隊になってしまう。個々の兵が優秀でも、指揮官が無能では戦に勝てない。それがよく分かった」

貴族と高級軍人の面々は全員退場となった。彼らにしてみれば戦から遠離る事ができて一安心だったのかも知れない。武張った顔付きをしても中身はただの地方領主であり、武人ではなくなっていたのだ。彼らには戦時における国内の治安維持と各々の領地の保全に尽力して貰う事にして、残った者は新たな指揮官を指名しなくてはならない。

王と王女、老将、それに部外者たるキリムの四名で軍議を続ける事となった。



改めて王自身が進行役となる。

「さて、かなりごちんまりしてしまっただが、会議を再開しよう。敵の出兵を予想しつつ、軍の編成を考えたい」

少年が姿勢を正して語る。

「王様、それだったら僕に考えがあります。とは言っても簡単な理屈なんだけれど」

「拝聴しよう」

「まずはこれを教えて欲しいな。王様は今の段階でユルグに攻め込む事を考えている？」

「いや、それはない。敵が疲弊していて一気に突き崩せそうだと分かれば話は別だが、そもそもこちらには進攻する動機がないのだ」

「そうでしょうね。現状で充分幸せにやっているのだから。じゃあ、防戦って事になるのだけれど、どこを守るの？」

「それは決まっている。国土全てだ」

「駄目だね」

「駄目か？」

「あのね、戦争における一般的な常識として『攻める方と守る方では守る方が有利』って言われているけれど、攻める方が有利な面もあるんだ」

「それは？」

「戦争の主導権を握れる事。どこに攻め入るかを自分の意思で決められるでしょう？」

「それはそうだな」

「一方、国土全部を平等に守ろうとしたら、全て兵力が足りない薄っぺらな布陣になっちゃうよ」

「ではどうすれば良いのだ？」

「この国は人口の殆どが大河バルバーレの流域に集まっている。折角守り易い作りになっているのだから、そこだけを守れば良いんだよ」

「つまり？」

「つまりね、敵が北からこようが南からこようが、王都から兵を動かさず、そこで決戦を挑むんだよ」

「兵力の集中か！」

「その通り。この国の兵力は大部分が南北の国境地域に布陣されているよね。北方も南同様、新たに索敵と伝令部隊を布いて、残りは王都に戻らせるんだ」

「北には防壁を作らぬのか？」

「北方の国境地域の事はよく知らないのだけれど、南の様に森に囲まれていたりして、大軍を動かし難い土地なの？」

「いや、一面の荒れ野だ」

「それだつたら防壁の意味がない。貿易行路を封鎖しても、その横を擦り抜けられちゃうよ。アスマンとユルグの間にある国境防壁は百年以上掛かって作った代物なんだけれど、それと似たものを作ろうとしたら、時間が幾らあっても足りなくなる」

「だから索敵と伝令だけ残して撤退するのか」

「そう。ついでに各地に散らばった駐屯部隊も全部王都に集合させる。ああ、南方の防壁守備隊は残してね」

「今度の侵攻も南方からとお考えか？」

「ううん。僕には敵が北から進攻してくるとしか思えないんだ」

「根拠がありそうだな」

「これも単純な話だよ。南の国境付近は大部隊を効率よく動かせる程広くはない。森があり谷があつて、急峻な傾斜に早瀬、岨の蟻径と、どう考えても大人数の移動に向かない」

「過日の侵攻は南方からであろう？」

「あれは揺動だと思うんだ」

「敵の目的は威力偵察であつたと聞く。ならば、きたるべき大侵攻を模したものにせねば意味がないであろうに」

「そりゃそうだけれど、その『威力偵察』って『打撃力を有する情報収集部隊が戦いながら敵の動向を探る事』でしょう？ 本来は、その後すぐに大攻勢がなきゃおかしい」

「あれから一ヶ月か。確かに時期は過ぎている」

「だからね、あれは偵察兼揺動作戦だったんじゃないかな。嘗て戦役があつた北方は今でも充分過ぎるくらい手厚く守られていて、ユルグとしても侵攻し辛い。だから、少しでも敵の数を減らしておきたい筈だよな。揺動で南方への増援を出させて、北方が手薄になつたところでそこから侵攻するんだ。ほら、敵の意図が明白でしょう？」

「成る程な。そこまで分かれば話が早い」

後は侃々諤々と議論を続け、細部に渡つて編成案を詰めた。

バルバーレ軍は全軍で約十万名の規模である。北方を堅めている二個師団四万名と王都詰め近衛兵が四万、後は各地に分散配置されている二万を掻き集めた数だ。南方全域には一旅団五千名がいるが、国境地域を監視する二個大隊千二百名を残し、その他も王都に集結させる。

敵侵攻を北からと断定するには早い、それを前提として作戦を練つた。

全軍五個師団の長は王自身が勤める。そして各師団の指揮官と配置は以下の通りとした。

まず、人口の密集する大河バルバーレ中流の兩岸に一師団づつを配する。敵の侵入方向が判明した時点で渡河し、一方に集中させる。その二個師団は王と王女の推薦する勇猛果敢な人物に任せる事となつた。バルバーレで最も賢く猛々しい人物、それは術士の老婆である。彼女は生きる伝説であり、自身が動き回らなくても補佐を願ひ出る兵士は多いだろう。できない事はないのかも知れない。

王女が一個師団を遊撃隊として率い、更に一個師団を王直属として王都に詰めさせる。掻き集めの残り一師団は南方方面軍の老将が指揮する。そしてその補佐役としてキリムが加わる事になった。若干十二歳の作戦士官としてである。

何とも頼りない、しかし熱意と意思の統一だけは天下一品の軍師達だ。

指揮官が定まれば、後は各々の師団の充実を図らねばならない。

勅命を受けた婆様は早速動き出す。彼女が担当するのは北方に位置している二個師団である。撤退の準備をさせ、更には大河中流域に拠点を作らねばならない。伝令を走らせ、資材を調達し、人員運用計画を練り、目の回る忙しさとなる。兵士二人に担がせた輿に乗り、城内をあちらこちらと動き回っている。

屈強な男達が老婆を担ぎ運ぶ姿は滑稽で、事情を知らされていない貴族どもの失笑を買っていた。だが実際は、官吏や兵士を効率よく動かしており、見た目とは裏腹に恐ろしい程の知恵者振りである。老将は少年と計画を詰める。この師団がやるべき事は多い。準備が整っている南方は良いとしても、北方から王都までの伝令と索敵、工兵による主戦場の整備を任じられている。王都決戦とはいえ、中州で戦う訳には行かない。その手前で迎え撃つ必要があるのだ。

王都の北側には丘陵地が広がっている。そこで野戦となる可能性が高いと判断し、詳細な地図の作成から拠点作りまでをしておく。住民を避難させ、貿易行路沿いの民家を廃棄させる。彼らにとってはよい迷惑だろうが、戦場の直中で日常生活は送れない。多少の金銭を渡し、当座の生活費に充てさせた。

国王直属軍と王女の遊軍は取り敢えずやるべき事がないが、遊んでいる訳には行かない。事務的な活動としては兵糧等の物資を充実させ、兵士達には厳しい訓練を課した。

王にも直属の一個師団があるが、自身は城を離れられない。代わりにウティホ氏を代理指揮官に指名し、郊外での訓練を任せる事にした。

では王は何をしているのかというと、官吏を使って兵士と兵器の増強を計画している。職人は元より狩師、漁夫、農夫から職工兵を徴用した。そしてキリムからアスマン<sup>ど</sup>弩に関する知識を受け取り、その新先端の兵器を量産すべく準備を進めている。

バルバーレには『戦は兵士が行うもの』という気風があり、また

兵士自身もその気概がある。それはそれで立派な考え方なのだが、裏返せば『平民に手柄を上げさせたくない』という特権階級特有の差別意識の現れでもあるのだ。その考え方にウティホもキリムも反対であった。国の危機は全ての住人にとっての危機であり、貴族も民も関係ない。これがアスマンの流儀であり、恐らくはユルグもそう考えているだろう。

宗教国家であるユルグは、広く民全体から兵士を募っている。勿論、職業軍人もいた筈だが、彼らは佐官であり、前線で戦闘行為を行うのは志願して入営した平民達である。職業軍人より志願兵が劣るとは一概に言い切れない。それに数だ。現段階で得られている情報は少ないが、民の数そのものが多いユルグ軍がバルバーレ軍よりも小規模であるとは考え難い。下手をすれば数万もの兵力差がありそうだ。なればこそ、徴兵であろうが傭兵であろうが、でき得る限りの増強策は打っておきたいところだ。

## 第六章

ウティホ一家が戦争に参加する事になったとは露知らず、ジヨク  
ーはのんびりと旅を楽しんでいた。

四頭引きの馬車が三両、列を作って荒野を進む。隊商では時間<sup>キャラバン</sup>を  
潰す事も大切な仕事である。目的地である北方の国境地帯まで、早  
くとも二ヶ月は掛かるであろう。その両手に余る程の暇を如何に消  
費するかが問題なのだ。景色を眺めていてもすぐに飽きてしまう。  
広大な風景はいつまで経っても同じで、赤土に灌木、たまに鳶が飛  
来するくらいなものだ。だから皆、暇潰しが上手い。弦楽器をつま  
弾く者、歌を聴かせる者、冗談話に怪談話、これが隊商<sup>キャラバン</sup>なのだたと  
感心してしまう。元山賊はすっかり気に入ってしまった。

雨季に差し掛かる六月。

ギーゾの一行は荒野を踏破し、北の国境近くまでやってきた。

雨季の特徴として、陽が昇ると気温が徐々に上昇し、午後は大雨  
になる。雨が降るまで暑さに耐え、午後は桶を逆さにした様な雨に  
耐えなければならぬ。しかし夕方には雨も止み、夜は涼しくて実  
に心地良い。移動に関しては砂嵐がないのが何よりである。雨水で  
行路が川の様になって往生する事もあるのだが。

国境線とは単なる修辭に過ぎず、大地には何色の線も引かれてい  
ない。旅人にとっては、実際にここがそうだと分かるものでもない  
のだ。隊商<sup>キャラバン</sup>はいつしかユルグ教国へと侵入していた。確かにユルグ  
へ入ったのだと知ったのは、一行が検問に引っ掛かった時である。

行路を順調に西へと進んでいると、砂煙を上げて到来したユルグ  
騎兵の一団に囲まれてしまった。事前に打ち合わせていた通り、皆  
は即座に万歳をして無抵抗を表明する。

隊長らしき兵士が軍馬から降りて、一行を睨み付けた。

「責任者は誰だ」

「私です」

ギーゾが名乗り出た。

「貴様らは何をしているのだ」

「へい。私どもは行商人でございまして、ユルグへと商売に出掛ける途中でございます」

「二国間での通商は禁じられた。それを知らぬのか」

「へい。知っております」

「では引き返せ」

「そうも行きませぬ。ユルグの祭司様、いえ、もっとお偉い司教様だったかと思いますが、お品のご注文を賜りまして、それを渡さなくてはなりません」

「嘘を言うな。我らの司教が貴様ら下郎の何を欲しがるというのだ」  
「いえね、バルバーレでは価値がなく、ユルグでは大変に価値がある品物でございます」

そう言つて宝石をちらりと見せた。余り質が良くない物を。

「赤玉か。バルバーレでは赤玉<sup>ルビー</sup>に価値がないのか？」

「左様で。私どもは元来アスマンの商人です。よつてバルバーレの民の嗜好はよく分からないのですが、蛮族にこの美しさは理解できないのでしょうか。しかしこの赤の美しい事、ちよつとお手に取つてみて下さいよ」

ギーゾは宝石を差し出す。

騎兵は欲深さを見透かされないようにと、品の良い動作で受け取つた。

「ふむ、これは美しい。色は少し薄いが、その分気品が感じられる」  
俺は蛮族とは違うのだ、と言いたいのだろう。

「そうでしょうとも。司教様はその宝石で杖を飾つたり指輪になさつたりして、ご法力を増して数々の奇跡を起こされるのでしょうか。いや、兵士様の胸に飾られて、お命を守る働きもあると聞きますぞ。

この際ですから、お一つ如何でしょうか？」

「うむ。確かに欲しいが、任務中で金がない」

「ごもつともで。そうだ、こうしましょう。我々もこの辺りは不案内でして、近くの街まで無事に着けるかどうか不安です。道案内をして頂けましたらそれを献上致しますよう。貴方様がよりご出世なさいます様にとの願いを籠めまして。他の方々にも、同じ大きさとは行きませぬが、同様に赤玉<sup>ルビ</sup>を差し上げましょう」

兵達はにんまりと笑い、隊長は早速その石を懷に仕舞い込んだ。

そして一行は進み出す。今度はユルグ騎兵に先導をさせながらである。

北方のユルグ国内、とある『オアシスの街』に到着した。荒野にある水源を中心に発達した街で、嘗ては交易の中心地であった。小さな湖の周りに椰子が生え、白い寺院を取り囲む様に商店が軒を連ねている。交易禁止の触れ以降、寂れていても不思議ではなかったが、結構な賑わいを見せている。

まずは残りの騎兵達に屑石を渡し、心の中で舌を出しながら見送った。

さて、ギーゾ達は宝石を売らなくてはならない。アスマン商人達が集まっている一角へと向かう。そして、中でも一等地に大きな店舗を構える一流処を選んで交渉に入った。

一方、ジヨクーには別の仕事がある。それは誰も知らない仕事であった。

人気のない墓地の、今は誰も住んでいない墓守の房舎に入る。

そこには場違いな人物が待ち受けていた。法衣に法冠、それに司教杖で身を飾る大司教である。ぶよぶよに太り、白い肉が詰め襟からはみ出している。

「久しいな、信徒ジヨクーよ」

「一年振りになりますか、使徒長猊下」



ジョークは跪いてその手に口付けをする。男は満足そうだ。

「そちからの知らせが遅いので心配しておったのだ。無事で何よりだ」

「恐悦至極に存じます。ご心配をお掛けしました事、深くお詫び申し上げます」

ジョークは大袈裟に礼をして、勧められた椅子に座り直した。そして報告を始める。

「敵の動きでございますが、まずは悪い知らせをしなくてはなりません」

「いや、悪い事こそ聞いておきたいのだ。良い知らせならば聞かずとも害はないが、悪い知らせならば知らぬと命取りになるからな」

「では申し上げます。最終兵器が敵の手中に落ちました」

「シャマンテインの息子がバルバーレに入ったのか！」

「御意にございます」

「どうして始末しなかった！」

「それは無理からぬ事でございましょう。相手は術士の中の術士、近づく事まではできましたが、殺意を見せた瞬間に消されてしまいます」

「そんなに凄腕なのか」

「はい。ユルグ兵の身体を一瞬で蒸発させるところを見ました。それも背後からこっそりと狙う弓兵をです」

「何と・・・」

「それだけではありません。南方の偵察部隊の話が聞かれましたでしょうか」

「聞き及んでおる。血気盛んな部隊であつたらしいが、特に手柄も立てず敗走したとか」

「その通りなのですが、事実は少し異なります。彼らは大手柄を上げつつあったのです」

「それは？」

「はい、バルバーレの王女をあと少しで仕留められるところでした」

「そうだったのか」

「王女は蛮族どもの戦姫です。仕留められれば敵の士気は地に落ちたでしょう」

「彼奴が邪魔をしたのだな」  
きやつ

「御意。大陸随一の悪魔、シャマンティンの魔女の息子が」

「やはりな」

「彼の人は王女の危機を予測し、大隊六百名をたった一人で敗走せしめました」

「どうやったのだ」

「それは野蛮な術でございました。自らの手に赤く焼けた金串を突き刺し、優秀なユルグ兵達の手足に痛みを走らせたのです」

「何と狂暴な」

「その極みにございます。彼奴は幾人もの悪魔と契約を交わし、自分の好きな時に好きなだけの魔術を発揮できるのです。勿論、悪魔に喰わせる贅が必要となりますが」

「何を贅にするのだ？」

「聞くところによりますと、近親者の身体の一部、それも目玉や心臓、性器を贅にするとか」

「おお、汚らわしい」

「更に有効なのが術者自身の身体を捧げる事です。嘗てこの北方地域で戦役があつた時に見せ付けられた、あの術です」

「腐れ女の術だな。我々が二度もやられた・・・」

「そうです。今や盲目となった醜女の技と力、それをシャマンティンの血筋を受け継ぐ者が行えばどうなるか、考えるだけでも恐ろしい限りです」

「シャマンティンの魔女がバルバーレの魔女に逢いに行つたと聞いて、我々は早急に手を打った。それは成功したが、息子が生き残っていると聞かされて戦争までしたのだ。なのにまだ生きて、しかもバルバーレにいるとは」

「我々には神々のご加護があります。信仰厚き兵士は術を撥ね返す

と教わりました」

「その通りだとも。しかしだ、幾ら信仰が厚くとも、不意に術を浴びせられては敵わない。心を石の様に堅くして戦いに望まなくてはなるまい」

「四年前のアスマン戦争と同じく、ですか」

「兵士達を純粹な神々の僕に変えるのだ」

「あれは危険です」

「そうじゃったな。お主の父親は反対しておった。最後は残念な事になってしもうたが」

「あれが父の運命だったのでしょうか。アスマン戦争の始まる数日前、眠った様に死んでしまいました。父は最後まで信仰厚き人でした」  
「神々は時折辛い運命を授けなさる。神々に近い清らかな者を選んで若死にさせ賜うのじゃ。お主の父は今頃、天上にあつて神々の近くで我々を見守っているだろう」

「そう仰って頂ければ父も喜ぶでしょう」

「お主も父同様、この国に殉ぜねばならぬぞ」

「覚悟はできております」

「では、また知らせを送るがよい。今回の様に事前に手紙を寄越せば、こうやって相見える事もできるであろう」

「勿体ない事にございます」

この大司教は強欲な悪の権化ではない。むしろ有能で勤勉な男だと言えよう。ただ問題なのはその思想なのだ。慈愛を説くべき身でありながら、口を衝いて出る言葉はサディスティックなものばかりである。残念な事に、彼の様な考え方がユルグの主流なのだ。

ジョクーは差し出された大司教の手に口吻をして、宿を後にする。そして扉から出るや否や唾を吐いて口を拭った。

それから人混みに紛れ、幾つかの商店を抜け、迷路の様な街並みを縫うように進んだ。そして地下にある開店前の飲み屋に入る。

そこでは一人の男が彼を待っていた。黒く灼けた肌に短い髪。痩せた顔の目は鋭く、口をへの字に結んで眉間に皺を寄せている。黒い痩せ犬の様だ。

その男が開口一番に叫ぶ。

「遅いぞ、信徒ジョークよ」

「おお、司教殿。いたかどうかは知らねえが、追っ手を撒いてきたんだ」

「あちらこちらで間諜なんかしているからそうなるんだ」

「ほお、俺が働かなくても良いのかい」

「それは困る」

「そうだろうとも。それで報告がある。もう一件間諜を引き受けた」  
「またか、勘弁してくれよ。一体どれだけの組織に与しているんだ？」

「ええと、親父の為に情報を集め出したのが始まりで、それから親父を殺した白豚の一派だろ。それにお前の宗教改革派。そしてアスマンの王弟だ」

「アスマンの王弟陛下か。面白そうだな」

「面白いというか、見捨てられないというか」

「私もお前に報告がある。どうやら法皇が死にそうだ」

「そうか！ あのジジイが地獄へ行くか」

「ああ、でもその後が良くない」

「それは？」

「後継者に白豚を指名しやがった」

「最悪だ。でもどうしてだ？ そんな状況なのに、こんな辺鄙な街まで出向いてくるとは」

「奴も来ているのか」

「さっきまで逢っていたよ」

「そうか、ならば自分が法皇になる地盤を整い終えたという事か」

「そうだろうよ。ところで、お前は何をしていたんだ？」

「面目ない。私の派閥は脆弱で金もないから、法皇なんて夢のまた

夢だよ」

「そして俺を無料働<sup>ただ</sup>きさせている」

「済まぬ。白豚からは金を貰っているのか？」

「あのけちが金を払う訳がない。妹が首都に住んでいるから、人質にしているつもりなんだろうよ」

「酷いな」

「まあ、俺様の妹だから、奴らに捕まりはしれないと思うがね」

「あの娘は元氣者だったからな」

「そうそう。いつもお前さんを蹴飛ばしていたな」

「懐かしい話だ。ひよつとして私に気があったのかな？」

「そうなんじゃないか。お前が司祭になる学校に入った時には泣いていたからな」

「そうか、泣かせてしまったか」

「いい気になるんじゃないぞ。単に虐める相手がいなくなって寂しかっただけなのかも知れないのだから」

「そうだろうとも。司教になったからには妻を娶る事もできないのだし」

「宗教改革をすれば良い。その為に運動をしているのだろうか？」

「それは違うぞ。宗教は政治から離れるべきなのだ。そうでないと血に汚れてしまう。その為に運動をしているのだ」

神政政治には大きな欠点がある。批判がなければ政治は進展しないが、神は絶対的存在であって批判される対象にそぐわない。結果、思想は先鋭化し、過激になってゆく宿命にある。歴史を重ねるに連れて、より純粹に、より残酷なものになるのだ。

宗教からその良い部分を抽出したければ、威厳や権力を棄てて、小さくひ弱な存在になるべきなのだ。色黒の男はそれを目指している。

ジョクーも、当然の事ながら、宗教改革の必要性をひしひしと感

じてる。

「政教分離、そして宗教家の婚姻解除。その両方ともつつちまえば良いじゃねえか」

「まあ、それも私が頂点に立たなければ為し得ない」

「頑張れよ。自分で決めてしまふまでは人生に行き止まりはないのだからな」

「親父様の言葉だな。あの人は偉大だった」

「俺もそう思うぜ。親父が生きていれば、お前が法皇になって、親父が国王を復活させて、それで素晴らしい国になっただろうに」

「素晴らしいかどうかは分からんが、宗教家が民衆の命を弄ぶ様な国にはなっていないだろうな」

二人は幼かった頃を思い出す。ジョクー一家は高級貴族で、武官の頂点に君臨していた父と妹の三人暮らしであった。私財で寺院を建立し、そこで暮らしていた孤児の一人がこの黒い男である。男は兄妹よりかなり年上であったが、三人でよく遊んだものだった。公平な立場で見れば、手が付けられない程粗暴な兄妹の世話をさせられていたとも言える。

父が秘密裏に薬殺されて後、二人は遺恨を晴らすと誓い合った。そしてジョクーは敵の組織に入り込み、男は宗教家となった。道は違っても二人の目的は一つ。それは国を奪う事である。

ジョクーは肝心な事を聞かなくてはならない。

「ところで、法皇の崩御が近いのなら、バルバーレ侵攻は後回しになるのかい」

「そうみたいだ。一月以内には死んでいるだろうから、新法皇の戴冠式は二ヶ月後だな。侵攻は半年後つてところか」

「戦を取り止める事はしないのか」

「無理だろうな。戦争好きな法皇がお亡くなりあそばして、遺志を継いだ白豚が新法皇になる。逆に、その即位を記念して大攻勢があ

「つても不思議ではない」

「規模は？」

「正確には分からんが、二十万以下という事はないだろう」

「そりや凄い。やつぱり北からか」

「この街の郊外に全軍が集結しつつある」

「そうか。こりや本格的に焦臭くなってきたぜ。俺様の仕事もまだ続きそうだ」

「ところでバルバーレ軍は強そうか？ 連中が白豚の軍を倒してくれないと困るのだが」

「おいおい、民衆が死ぬのを喜んだりするなよ」

「それは違う。嘗ての北方戦役の再来を期待しているのさ。あれで宗教改革が一気に盛り上がったのだからな。しかも死者の数は僅かだった」

「ジョークは書庫の婆様を思い出す。」

「結局、術つてのは死人を出さずに戦を終わらせる最良の手段つて訳だ」

「我が国の手妻は別にしてな」

「この男も知っているのだ。アスマン戦争での法術のからくりを。」

「バルバーレ軍は思ったより脆弱だな。しかし術者は凄い。例の老婆に加えてアスマンの天才児がいる」

「老婆にはもう目玉が残っていない。それに子供か。それで大丈夫なのか？」

「こればかりは嘘じゃないぜ。三国一の術者、それがちつちな男の子つてだけで、腕は確かだ」

「そういえば南方で偵察部隊がやられたと聞いたぞ」

「俺もその場にいたんだ。あと十年もすれば立派な伝説になる程の術だったな」

「期待できそうだ」

「期待してくれ」

そして両者は地下を出た。時間差を付けて、左右に分かれて。

ジヨクーはギーゾ達を見付けなければならぬ。少し不安だったが、繁華街を一回りするまでもなく探し出せた。

「よお、おたくら相当目立ってるよ」

ギーゾが嫌な顔をする。

「商売人が目立たなくてどうする」

「いや、一応隠密行動な訳だし」

「隠密？ 隠れて物を売り買いはできないな」

融通の利かなそうなギーゾの表情を見て、ジヨクーは説得を諦めた。

「ところで、首尾は如何でしたでしょうか。商売人さん」

「上々だ。想像していたよりも倍近い値で売れたぞ。皆、資産を宝石や貴金属に変えたがっているんだな。家や田畑じゃあ持ち運びできないからな」

「戦争が近い証拠か」

「そうなんじゃないか？」

「物価はどうだい。食料や宿代、それに女は？」

「食料も宿代も上昇し出している。人の出入りが激しくて、良い宿はすぐに埋まるそうさ。それに問屋が食料の売り惜しみをやっていそうだな。高値になると踏んだのだらう」

「女は？」

「今日の宿探しもあつて娼婦館の主人と話したが、引退したお姉さんまで出勤させる程の流行り様だよ。客も可哀想に」

「へえ、ひよつとして今日は女郎宿に泊まれるのか？」

「そこしか空いていなかった。但し女は買うなよ。とんでもないのが出てくるぞ。それに明日は早くから出発だ」

「もう帰るのか？ 少しは遊んで帰ろうぜ」

「私は大金を持ったままよろこぶのは好きじゃない。特にこんな時世じゃあな」

「それもそうか」



ギーゾからもたらされた情報は貴重なものだった。

街中に軍の大部隊が駐留している訳ではないが、近くにいるのは間違いなさそうだ。だから女が売れている。兵士が休みを貰ってちよくちよく遊びにきているせいだ。商人が食品の買い占めをしているのも同じ結論を導かせる。ここはユルグ国内であって兵糧はどこからでも運べる。でもいずればバルバーレへ向かうのだ。そうなればこの街が補給基地となるのであり、物価上昇が見込める道理だ。敵の進攻はこの北方からであるに違いない。俄然忙しくなった。残してある仕事は多い。

ジョクーは駅通所に行く。間諜たれば当然この施設に詳しい。バルバーレからこつそりと送った書簡は無事にユルグ首都の法王庁まで届いていた。だが、逆もまた真なりとは行かないのが世の常である。ウティホに宛てた手紙を出すには出したが、検閲に引っ掛かる可能性は高いだろう。所内に軍人らしき人物もいたからだ。ウティホの言い付けでは手紙を二通出せとの事であった。そんなに通信を商売にしている連中がいるとも思えないが、繁華街をぶらぶらと歩きながら探す。

裏通りに真新しい看板があった。白木に赤々と『速達専門 駅伝屋』とある。

安っぽい扉を開けて中に入った。客は誰もいない。

「御免」

「いらつしゃい」

女言葉が気持ち悪い中年男が奥から出てきた。

「ここは手紙を届ける商売をしているのか？」

「そうよお。でもちよつと違うの。ほら、今の時代はさ、世知辛い世の中でしょう？ だから検閲なんて無粋な事ができない様に、口伝えで文章を送る商売をしているのよ」

「それは結構だが、国際便も扱えるのかい？」

「お大尽ね。勿論、承りましてよ」

「本当は恋文専門なんじゃないのか。近所に届けるのが精一杯なんだろう？」

「そりゃあね、そんな商売が多いのは確かだけれども、折角宿駅毎に人を配置しているのだから、国際便を扱いたかったのよ」

「じゃあ、頼んでみるか。幾らだ？」

「貸し切り便になるから、十ユールね」

「そりゃ、とんでもなく高いな」

「うちは確実に最速。高いのは当たり前なのよ」

「仕方がないか・・・」

しぶしぶユルグ金貨を十枚渡した。これだけあれば小さな家が建てられる程の金である。

奥から制服を着た若者が現れる。

「お客様、自分が伝文を伝えるであります」

おかま店主が言い添える。

「この子達はね、ユルグ軍の伝令係をしていたの。でも鹹首<sup>クビ</sup>になっちゃって、可哀想だから纏めて雇ったのよ」

「どうして鹹首<sup>クビ</sup>に？」

「はっ、伝令文を間違えたからであります」

「どんな風にだ？」

「はっ『東南に移動せよ』を『盗難せよ、いい土星』に間違えました」

「いい土星って何だ？」

「はっ、上官にも同じ事を聞かれました」

「店主よ、本当に大丈夫なんだろうな」

「あたしの真心に誓って大丈夫よ」

そんなものに誓われても困りものだが、頼む事にした。

口伝えで、しかも頼りない伝令兵に任さなくてはならない。文章は極めて簡潔にする。

「いいか、言っぞ」

「どうぞ」

「法皇瀕死。侵攻中止。新皇戴冠は再来月。再侵攻は半年後。規模二十万。北部物価は高騰見込み。問屋買い占め。出入り多くて宿一杯。女郎馬鹿売れ。軍人買いか。以上だ」

「では繰り返します。奉納深々。深刻通信。死のう大会は再来月。野菜新香は半年後」

「わざとか？」

「いえ、けしてそんな」

「死のう大会にはお前が出る。そこでなら、いい土星を盗めるんじゃないか？」

「申し訳ありません」

「書いて憶えろよ」

「それでは口伝えの意味が・・・」

「じゃあ死ぬ気で憶えろ。ちょっとでも間違えたら金を返して貰うからな」

「はっ、胆に銘じます」

そんな事を言いながら、ちゃんと憶えるまでにかなりの時間を浪費した。

表に出るとすっかり夜が更けていた。ジョークは悪い買い物をしたと後悔している。それに、まだキリムとの約束が残っているのだ。少年の話を広く伝えなければならぬ。

宿でギーゾと再合流する。女郎宿に女無しでいても詰まらないので、食事がてら二人で出掛ける事にした。

ギーゾには目当てがあるらしい。街中をずんずんと進んだ。

「ここだ。まだやっていたとは憑いているぞ」

居酒屋である。少なくとも、古惚けて読み難くなくなった看板にはそう書かれていた。

扉を押して入れば、店の中は予想に反して広く明るい作りになっており、ぎつちりと詰め込まれた客達が喧騒を奏でている。

二人はカウンターに座る。ギーゾは人の良さそうな店主に向かって、一番安い酒を注文した。若い酒を無骨な陶器の杯に浪々とし、軽く乾杯をしてから喉に通す。久々の葡萄酒に胃が喜んでゐる。それから酒菜に地の物を何品か取って、ぐいぐいと呑み進めた。

ふと、近くで呑んでいた男に声を掛けられる。背の低い、農夫風の若者だ。

「あんたら旅の人か？ ひよつとしてバルバーレ人か？」

「まあ、そんなもんだ」とジョクー。

「こりゃいいや。俺とあんたはいずれ殺し合わなきゃならねえ。でも今はこうやって同じ店で酒を飲んでいる。何だか嬉しいじゃないか。なあ、お前らもそう思うだろ」

近くの卓を賑わしている連中が「おお！」と叫んだ。

ジョクーは静かに視線を落とす。連中の地味な木綿服だけでは分からなかったが、立派な軍靴を見て確信した。こいつらは兵士だとこの店はユルグ兵達で犇めいていたのだ。

男は続けて話す。

「俺らは同じ村の出身でね、しかも次男坊、三男坊の集まりだ。一戦終えれば都に家が貰えるって話で、みんなそれに乗っかってここに来てゐる。だから、あんたらに恨みがある訳じゃないから、安心してくれよ」

「そうか、じゃあ、今日は殺さずにおいてくれるんだな」

「勿論だとも。尤も、あんたと俺がやりあったら、俺の方が負けちまいそうだな」

男は笑いながらそう言った。ジョクーと比べれば確かに小柄だが、杯を持つ腕は太く、肩から背中の中の筋肉が盛り上がっている。言葉とは裏腹に余程の自信があるのだろう。

ジョクーは得意の人懐っこい表情を作って、この場を収めた。  
気を良くした男が更に話し続ける。

「なあ、あんたがバルバーレ人だってんなら尋ねたい事があるんだが、いいか？」

「ああ、何でも聞いてくれ」

「俺らは農作業で鍛えられているから大概の事ならへこたれねえ。でも、アレはちつとばかり怖いんだ。魔法って奴がね。バルバーレ軍の魔法は凄いつて言うじゃないか」

「魔法か・・・俺が知っている話は一つだけだ。それでよければ・・・」

「是非、聞かせてくれよ」

他の客達もこちらを気にしているようだ。

ジョクーは少し声を張って話す。

「バルバーレの魔女は知っているよな。でも、魔法使いはその婆さんだけじゃない。アスマンの王子が参戦するらしい」

「アスマンの王族が生き残っているのか。しかもそれがバルバーレ軍に？」

「ああ、飛び切りの魔法で貴様らを出迎えるそうだ」

「そいつは、どんな代物なんだ？」

ジョクーはキリムの話をしてやる。一人の少年がどんな目に遭ったのか。酒を呑みながら、ゆっくりと。少年が語る程上手くはないが、分かり易く、丁寧に話す事を心掛けた。

ギーゾも店主も、他の客も耳をそばだてている。店から笑い声が消えた。皆真剣に聞き入っている。そしてジョクーはこう締め括った。

「それで、この思いを術に籠めるらしいんだ。分かるかい？ 術には贅が必要だろう？ アスマンの王子はこの『記憶』を贅にするつもりなんだよ」

店主が聞く。

「どんな術になるんだ？」

「俺にも分からね。だた、これだけは言える。目玉の術なんか足元にも及ばない、想像の域を超えた代物になるんじゃないかな」

酔客達は感嘆する。いずれは戦地に赴く身の上である。だから怖いのは確かなのだが、それとは別に、その見事な術を見てみたい気もする。この場にいる全員が、何十万ものユルグ兵が魔法を浴び、崩れ落ちる様を想像した。

農夫は杯をぐつと空けた。

「まいったな。そんな子供とやり合うのか、俺らは……」

どうやら話を飲み込んで貰えた様だ。だが、これで目的を果たした事になるのだろうか……とジョクーは思い悩んだ。風説の流布という困難な活動を行うとしたら、物量作戦で国中に掲示物を貼るとか、敵軍司令部や省庁の正式な訓令に組み込むといった方法が確実である。しかし悩んでみても出来ない事は出来ない。この居酒屋から噂話が広まる事を祈るしかない。

ジョクーは父親の言葉を思い出した。運も財産。キリムにはそっちの財があるかも知れない。

店の雰囲気が暗くなっている。ジョクーは声の調子を変えて付け加えた。

「まあ、まだ戦は始まっちゃいない。今日のところは楽しくやろうや」

その通りだと皆で乾杯した。店主の奢りで新しい酒樽が開けられる。ギーゾもジョクーも一頻り騒ぎ、夜も更け切ってからようやく宿に引き返した。

## 第七章

六月の王都。こちらにも雨季に入る。午後には通り雨が降り、一時的に大河が増水する。

訓練を重ねている兵士達には地獄である。丘陵地帯に沼ができる。虫が飛び交う。蛭が襲う。病気になる者や怪我をする者が増える。しかし彼らの目付きが変わってきたのは良い傾向だろう。緩んだ表情が兵士のそれに変わりつつある。

少年はこの状況を見るに、敵侵攻は先になるかも知れないと考えていた。長距離を移動するには余りにも不向きな気候である。

一定の成果を得たとして野営を引き払った。兵士達の任を一時的に解き、家庭に戻す。徴兵された者もいるのだから気を使わなくてはならない。彼らには本来の仕事があるのだ。せめて土産でも買って帰れる様にと一時金を支給した。

そして指揮官たる自分達も家に引き返す。ウティホと少年はノンモの待つ旧伯爵邸へと戻った。

ウティホは完全に疲れ切っている。

「儂も歳じゃのう。身体が言う事を聞かぬわい」  
少年が労う。

「頑張っていたじゃない。隊の運動が一番整然としていたのはウティホの師団だったよ」

「そりゃそうじゃろうて。儂の隊は王都詰め近衛師団なんじゃから、行進はお手の物じゃよ。しかし旗取り合戦や運搬訓練ではいつも負け通しじゃった」

旗取り合戦は実戦に即した基本的な演習である。二陣に別れ、自陣の旗を守りつつ敵陣の旗を取る。武器は持たせないが殴り合うのは構わない。これが結構奥深いもので、地形や時間帯、人数によって臨機応変な対応が求められる。

運搬訓練は石材や木材を運ばせ、目的地に拠点を築く演習である。

坂が多かったり地面がぬかるんでいると難易度が上がる。これも複数の隊を競わせるのだ。任務が完了した隊は鬨の声を上げ、勝利を告げる。

もつとも、このような遊技性のある訓練ばかりではなく、行進、駆け足、規律運動、技能訓練等の基本訓練が大切なのである。その中でも、土嚢を背負わせ、足並みを揃わせて行進する訓練が良い鍛錬になる。鎧を突いたり弓を打つ技能訓練も大切だが、ただ歩く事が一番辛く、また大切なのだ。ウティホは基本に忠実に兵を鍛え上げた。長期作戦でも草臥れてしまわない兵士にする為に。

「ああそうかい。そりゃよろしかったですねえ」

ノンモの機嫌が悪い。彼女は一人で留守番をさせられていたのだ。二人して懸命になだめた。この人が爆発したら何個師団あっても止められないだろう。

兵士が休んでいる間も指揮官には仕事がある。毎日登城し会議会の連続だ。今日も王の執務室に集い、あれこれと事務を消化している。

まずは第一師団のウティホが現状を報告する。

「装備に関して言わせて頂こう。近衛だけあつて煌びやかな装備を頂いているが、余り実用的とは言えない。鎧は重く、剣や鎧は装飾ばかりが目立って修理し難い。それに兜じゃが、羽根飾りを取り払う許可を下され。邪魔で仕方がないんじゃない」

王が返答する。

「ない物を作るのは大変だが、ある物を取り払うのは容易なのではないか。鎧は柄と穂だけにして装飾を外す。剣も柄と鞘を簡素な物に変える。鎧は胸当てだけを残して、他は革製とする。兜の飾りは塗り取ってしまう。皮で作り替えても良いだろう」

ウティホが続ける。

「第一師団は野戦向きではありません。儀仗兵としては優秀なのでしょうが、気位が高く泥に塗れる事を極端に嫌う傾向があります」



少年が口を挟む。

「適材適所で良いんじゃないかな。彼らは受け身で力を発揮する類の隊だよ。機敏に動き回るのじゃなくて、どっしり構えて敵を防ぐ。若しくは整然と前進して間合いを詰める」

婆様も意見する。

「最初に敵と正面衝突するのは第一師団じゃろうな。もともと、そんな力業になる前に策で何とかしたいところじゃが」

ウティホは自分の役処を理解した。敵の前進を受け止め、耐え抜く。そして味方が敵の後背を突く時間的猶予を作る役目なのだ。

続いて第二師団の王女の報告。

「第二師団は馬の数が足りません。神速を頼りに敵の搦め手を突くのが遊撃隊の務め。歩兵の数よりも騎馬を増やしたいのです」

ウティホが述べる。

「それでしたら第一師団の軍馬を回しましょう。どうせ式典にしか使わない馬なのじゃから、全部持って行って下され。ああ、馬車馬は別ですぞ」

続いて婆様の第三・四師団の報告。

「何から話そうか。そうじゃな、渡河作戦を止めにしたい」

王女が驚く。

「何故でしょうか。敵軍が南北どちらから侵入するか分からない今、片方に兵力を集中させるのは危険です」

「危険というなら渡河自体が危険なのじゃよ。これまで幾度か演習をさせたのじゃが、実戦では豪雨かも知れん。幾ら船を用意したところで一定の兵士を失うじゃろう」

「敵が侵入してから王都のある中央部まで時間的余裕があります。水位の低い日を選ぶ事もできるのではありませんか？」

「そんな保証は無いじゃろ。敵兵団が北方の国境を割って侵入し、その知らせが王都まで届くには一月は掛かる。敵は二月、いや一月半で王都に着くかも知れぬ」

「ではどうすれば」

「大河中流域を捨てる」

一同がざわめく。王は真意を確かめたい。

「中流域は我が国の生命線だ。人口は国内最大であり、王都の次にいや最も守るべき地域だと思う。だからこそ婆様に守りを願いたいのだが」

「そうだろうね」

「では何故？」

「仮に、敵が王都に目も呉れず一直線に中流域へ入ったとする。村々には多くの民衆が生活しておる。確かに人的損害は大きkarou。でもじゃ、そこは水耕田が広がる湿地帯。大部隊を動かすには不向きな場所なのじゃ」

「それは我が隊にとっても同じでは？」

「そう、同じじゃ。でも守る側と攻める側では隊の運動が違ふ。攻める側は常に移動せねばならぬ」

「守る方が有利ならば、尚の事、そこに配置すべきではありませんか」

「敵さんがきてくれればの」

少年が気付いた。

「そうか。ねえ王様、ユルグ側は大河中流域がどんなものなのか知っているの？」

「数年前、友好使節団がきた折にその地を訪れている。武官も数名いた筈だが」

「じゃあ、そこを攻め込む事はしないんじゃない？ 無駄だと分かっているのだから」

「そうは言つが……」

婆様もここぞと王を攻める。

「水耕田が大切なのは良く分かる。でも、守る必要がないのに兵を置くのは愚策じゃよ」

「では、二個師団をどう使うのだ」

「使い方は幾らでもある。永らく北方に展開していた兵達で練度も

高く、士気もある。この婆の事をよく知っている連中じゃから従順だし、全五個師団の中で最も強かろう」

「それで？」

「奇襲に使う」

王の目が変わる。

「奇襲だと！ 我が将兵を奇襲に使うのか」

「王は奇襲がお嫌いか？」

「好き嫌いではない。してはならぬのだ」

「どうしてじゃ？」

「卑怯だからだ」

「何が卑怯か。戦時たれば兵士は常に警戒を怠らず、いつ何時でも戦う準備をしておかねばならぬ。寝込みを襲われるにしても、寝ている方が悪い。違うかえ？」

王は目を瞑って口を硬く嚙む。自分の兵が卑怯者と誹られるのは最大の屈辱なのだ。

「では言い方を変えよう。婆が預かる二個師団は自由に行動し、こぞと言う頃合いで戦闘する。これでどうじゃ？」

「まあ・・・それならば構わぬが・・・」

王はしぶしぶ応じた。これで婆様と王女の三個師団が遊撃隊となる。通常では考えられない編成ではあるが、少年は面白いと感じていた。拠点を固定するより遙かに即応性が高いからだ。

最後に第五師団の老将が報告する。

「北方の索敵部隊と王都までの伝令網は配置完了しました。また主戦場と予想される王都北部の丘陵地帯における拠点作りも順調です」

王が尋ねる。

「工兵達は実戦ではどう展開するのか」

「はい、実戦では敵の移動を監視する事が一つ。もう一つには敵の兵站を妨害する事を主目的として活動するつもりです」

またしても王の機嫌が悪くなる。

「兵糧を奪うのか。これも卑怯な役目だな」

「私には卑怯と思えません。大義名分も無しに侵攻しようとする敵こそが卑怯なのです」

「それはそうなのかも知れぬが……」

「ですから、私は敵が最も嫌がる事をするつもりです」

キリムも援護する。

「王様、第五師団は寄せ集めだし、小柄な兵士が多くて弱い隊なんだ。まともに敵とぶち当たれなんて言えないよ。可哀想だ」

「可哀想？ 軍隊同士が正面から当たるのが可哀想なのか」

「うん。僕はユルグ兵の怖さをよく知っているから言うのだけれど、連中は大きな牙と爪を持った獅子だよ。一方の我が第五師団は働き者の蟻かな」

「獅子には獅子の、蟻には蟻の仕事をさせよ、という事か」

これで王にも実戦のあり方が見えてきた。

敵侵攻を察知したら第五師団が各隊に伝達する。敵は王都まで攻め上る筈だから、その途中を奇襲して数を減らす。また兵站線を分断して疲弊させる。そして王都決戦。果たして予定通り進めば良いのだが、それは誰にも保証できない。

雨季真っ盛りの七月。一時休暇を与えていた兵士を再集結させ、王都近郊にて訓練を課している。もう部下達自身に任せられるまで練度が上がっている。

一方、臨時アスマン城たる邸宅には珍客が訪れていた。知らせを聞いて、登城していたウティホとキリムは急遽帰宅する。居間では汗だくのノンモが焦れながら待っていた。

「ああ、良かった。ジョクーからの知らせが届いたよ。それも早くしないと忘れちまうとか言ってたさ」

「忘れる？ と言う事じゃ」

「それがね、手紙じゃないんだよ。口伝えだつてさ」

早速、その知らせを聴く事にした。

駅伝屋に雇われた元伝令兵が、頭の中にある通信文を伝える。

「では、申し上げます」

『ほーほーきょー。しんこーちゅー。しのたいかー再来月。さーしーこーわ半年後。くーぼー二十万。ほぶかー。ことーみー。とんやかいしー。でーりーくーてやーぱー。じろーばー。ぐんかかーあ』  
「以上です」

ウティホは困惑している。

「何じゃそれは」

「さあ？」

困惑は駅伝屋も同じらしい。

「貴様らの国のお経か？」

「さあ？」

「お前は確かにジョクーからの伝言を伝えたんじゃない」

「はい、恐らくは……」

「恐らくとは何じゃ」

「六月の二日、ユルグ北方のオアシス街でジョクー様から伝言を賜った事には間違いございません。それから宿駅を幾つも中継して、先程の伝言をお伝えした訳でして……」

「何人が中継したのじゃ」

「自分で二十番目です」

ウティホは呆れてしまった。この男にではない。こんなものを注文したジョクーである。二十名もの人を中継すれば口伝えなんてまともに伝わる筈がないではないか。

「因みに、この伝言の価は幾らなんじゃ」

「最も早い便でしたので、十ユールぐらいでしょうか」

夫婦は二人して頭を抱えた。好きに使えと渡した金だが、余りにも愚かな使いつぶりだ。

キリムは少し違う意見の様だ。

「ねえ、再来月と半年後って言ったよね」

「はい、『しのたいかー再来月』『さーしーこーわ半年後』です」

「ええい、馬鹿者め」

ウティホは怒りが収まらないでいる。

「まあまあ、とにかく再来月と半年後に何かがあるんだよ、きっと」  
「はあ」

駅伝屋は自分が悪い様に思えてきた。

「それでね、ちょっと聞きたいんだけど、君は何人かな？」

「ユルグ人です」

「この商売ってあまり聞かないけれど、ずっとやっているの？」

「いえ、三ヶ月前に始めたばかりで、それまでは軍で伝令兵をして  
おりました」

「そうなんだ。じゃあ、三ヶ月前にユルグで何か話題になった事ってなかった？」

「そうですね。話題と言えば……」

「言えば？」

「法皇がご病気なのではないかとの噂が立ってありました」

「へえ、かなりお悪いのかな」

「はい。その様です」

「それじゃあ、後を継ぐのは誰なんだろう」

「首都におります友人の話では、大司教猥下ではなからうかと」

「大司教って役職は一人なのかな」

「はい、大司教は一人です。過去にはもっといらっしやったそう  
ですが」

「そうなんだ。有り難う。もう帰っていいよ」

男はほっとして、馬に跨り邸宅を後にした。

ウティホは納得いかない。

「礼なぞ言わずとも良かったのに。一文の価値もない」  
キリムが言い返す。

「とんでもない。貴重な情報だったよ」

「何が分かったのじゃ」

「キリム教国の国主、法皇はもう死んでいる」

「何じゃと！ 病気としか言わなかったではないか」

少年が解説する。

「再来月と半年後つて二つの単語は聞き取れたよね。でも、ジヨク  
ーが僕らに時期を伝えたいとすれば、それは敵侵攻の時期だけだと  
思っただけだ」

「……そうじゃな。他には思い付かん」

「でも二つの時期を伝えた。その内一つは敵の侵攻時期だとして、  
もう一つ、どうしても伝えたい時期があつたんだ」

「ふむ」

「しかも、それは敵侵攻について何か重要な意味を持っている。例  
えば、その正確性を補完する為のものとかね」

「成る程な」

「だから、再来月には法皇の葬儀とか何かの国家行事があつて、予  
定よりも遅れて半年後辺りに敵侵攻がある。そんなところじゃない  
かな」

「本当ならば良い知らせじゃな。元伝令兵から聞いた噂話も『大司  
教が後を継ぐ云々』と詳細だったし、信憑性はあるそうじゃ。それ  
に『二十万』と言う数字も言っていた様な」

「余り考えたくないのだけれど、それは……」

「敵兵の総数か！」

「宝石の価値……じゃないよね？」

「それはあり得ぬ。ギーゾが幾ら優れた商売人でも、一、二万が良  
いところじゃろうな」

「それに、その情報は急いで知らせる必要なんてないしね」

「そうじゃな」

二人は腕組みをして考え込んでいたが、自分達だけが悩んでいる  
のが不公平に思えて登城する事にした。どうせ悩むなら大勢が良い。  
楽観的な人がいて、気を楽にさせてくれるかも知れないのだから。

王宮の最奥、国王の執務室に戻る。王と王女、婆様と老将、そし  
て二人。この中に楽観的な人物などいない。二人の報告を受けた全

員が頭を抱え込んだ。今ほどあの山賊がいて欲しい時はない。彼ならば笑い飛ばしてくれるだろうに。

王が重い口を開く。

「二十万……か」

少年が慰める様に言う。

「正確性に欠ける情報なのだし、まだ負けた訳じゃない」

「そうだな。まだ負けはしておらぬ」

「でもね王様、国の最高権力者たる者は最悪の事態を考えておかないゃね」

「敗戦した場合の事だな」

「そう。負けた場合の事」

「みんな死んで終わりだ」

「そうだね。僕らはそうなるのかも知れない。戦死するか、敗戦後に処刑されるかの違いはあっても」

ウテイホは更に落ち込んでしまった。

「処刑は嫌じゃのう。どこかの処刑場で、公衆の面前で、罪状を読み上げられて、敵の罵声を受けながら絶命するのは、嫌じゃ」

皆が自分の姿を想像した。キリムとマウ・リサは身震いを押さえられなくなる。

別の考え方もあるらしい。

「婆はそれで構わんよ。断頭台に乘せられようが、絞首刑にされようが、特に注文はない。嫌なのは、悔しいのは、やり残した事があるのに死ぬ事じゃ。何もさせて貰えずに最期が訪れる事。じゃが今回は違う。二個師団を預かって、四万の兵士達と運命を共にできる皆、この婆を親の様に思ってくれている可愛い子供達じゃ。この子らの犠牲が一人でも減るのならば、喜んで黄泉国へ下るだろうよ」

皆納得した。自分達には責任がある。行動の自由がある。しかし兵士達は命令のまま動くのみであり、恐らくはその命令で死ぬのだろう。家族と永訣する決意で戦地に赴くのだ。我々はよくよして良い立場ではない。



少年が王に語る。

「どの時点で敗北を認めるか、それによって今後の国のあり方も違ってくると思う。早期に敗北を認めたなら、国としての体裁は残してくれるだろうし、戦争賠償金を支払うだけで済む可能性だってある。国土を割譲する選択肢もあるよね。更には毎年上納金を納めなくてはならない属国になる可能性も。でもね、属国でも国は国なのだし、アスマンの様にだけはなってはならない。王として、引き際を決めておいて欲しい」

王は返答できない。金で済む話ならばまだ良い。でもユルグがそれで満足するであろうか。国土を分割するなどできる筈がない。譬え今は逃れても、未来の暦に国家の終焉予定を記す事になる。再度の侵攻で完全に息の根を止められてしまうだろうから。

今は考えても結論が出せない。この議題はこれまでとし、法皇崩御に関してはその真偽を確かめ、事実であつたなら弔問使節団を送る事とした。

八月。一期目の刈り入れが始まる。そして収穫が終わった田から二期目の種籾を蒔き始めている。不安に満ちた時代であつても季節は変わらず流れ行くものらしい。

敵の侵攻は認められない。法皇崩御の真偽はまだ確かめられないが、その信憑性が増している。ジョクーの情報以外にもいろいろと噂が届き出したのだ。

ユルグの返答を待たずして弔問使節団を出立させた。敵とてその一行を無闇に害する事はないだろう。それこそ国としてのあり方を自国民に問われる事になる。

ウティホ達はジョクーからの書簡を期待していた。昨月の駅伝屋は単なる蛇足で、ちゃんと駅通所を使った手紙が届くだろうと。しかし、それは届けられなかった。

九月。雨季最期の月。ユルグから外交文書が届く。要約すると『

七月に国主たる法皇が逝去し、その葬儀は速やかに行われた』とある。夏ともなればそれも致し方ない。『国民は一ヶ月喪に服し、八月の良き日に大司教であった何某が新法皇となる予定』だそうだ。弔問に関しては『遠距離なれば遅れても篤く遇する』とある。開戦前夜にしては礼儀正しく、結構な事である。

使節団はユルグ首都まで近い南回りで馬車を進めている。国境まで一月。更に一ヶ月で首都に着き、戻りは十二月になるだろう。

これから一つ二つの結論が出せそうだとキリムは考えていた。

一つは敵が侵攻する時期。それは十二月を過ぎる事はないだろうという結論である。

使節団には武官もいる。情報収集が専門の人物だ。この者が数多くの情報を持ち帰るのは避けられない。しかし持ち帰るよりも早く攻め入れれば問題はない。

一度歓待を約束した使節団を害するが如き行為は、万人が批難するものである。それで他国との戦に勝つても、今度は国内の政敵に打ち負かされてしまう。どうしても口封じをしたければ、買収するか、事故に見せ掛けて殺害するか、賊に襲わせるかだが、どれも博打である。成功させるには綿密な計画が必要だし、かなり面倒だ。それに新法皇も即位の初めから卑怯者、礼儀知らずと誹られたくないだろう。

もう一つ、敵の侵攻地域である。これは北方国境からである事が確定的になった。

使節団は首都に近い南回りで訪問すると知らせてある。経路を示さなければユルグとて迎え入れられないのだから最低限の礼儀である。そして九月現在、敵軍勢は南北どちらかの国境近くに集結しつつある筈。仮に南であれば、そこを通る使節団に察知されてしまう。その時点で武官が引き返し、国境を固められてしまえば侵攻が困難になる。南方の国境は密林にあつて狭隘である。その場で徹底交戦を挑めるのならば守る方が有利だ。

一応、その逆も言える。使節団が南回りでユルグに入り、国境近

くに大部隊がいなしとする。ならば北方国境付近に展開している事になるが、ここで心理的な葛藤が生まれる。『見た』のならば確実にそこにそのものが存在していると誰もが断言できる。しかし、選択肢が二つしかないとしても『見ていない』だけで断言する事は難しい。見付けられなかった可能性を排除できないからだ。

こうして北方からの侵攻が読まれてしまっても問題にしていなのだろう。圧倒的な兵力をもって悠々と攻め込んでくる筈だ。侵攻時期も自明の理である。何をどう考えても十一月から十二月に北方から侵攻してくる。そう考えて間違いは無さそうだ。十二月の砂嵐は酷く強いが、雨季に比べれば移動が楽だ。寒い時期なので兵糧の運搬にも適している。

もつとも、敵が侵攻を長期に渡って延期した可能性もある。でもそれは可能性だけの話に過ぎない。

キリムは自宅の庭を散策しつつ、そんな事を考えていた。

雑草の畑だった庭も、ノンモの奮闘で整理された庭園になっている。晩夏の太陽が芝を青々と照らす。その傍らには各種の香草畑があつて、葉に丸々と太った青虫を這わせている。この虫は香りのする葉が好きなのだろう。人に見られているのも気付かないまま食事を続けている。その姿はどこか滑稽で、ノンモに似ている。

そのノンモは少年を探していた。

「ああ、こんなところにいたのかい。帰ってきたよ。どら息子が」  
少年は走って屋敷に戻った。

居間にある椅子の上、土に汚れたままのジョークがちょこんと座っている。

ウティホが眉間の皺を深くしながら睨み付けている。

「儂らの元を離れて、自由になつて、気が緩んだのかも知れぬ。隊キャ商独特ののびのびとした雰囲気ラバンに飲まれてしまったのかも知れぬ。珍しい風景に魅了されたのかも知れぬ。でもな、この国は非常事態なのじゃ。それも並大抵の事態ではない。皆が今日滅ぶか明日死ぬ

かと悲壮な決意で努力しておる。なのにお前は何じゃ。帰ってきたばかりでもう旅に出たいなどと申すのか」

「どう言う事？」

少年はお歸りを言う暇もない。

ジョークは応えようとす。

「いやね、アスマンに行こうかと思って……」

「何故そうなるのじゃ！」

ウティホの怒りは収まらない。

「まあまあ、ところでさ、ユルグ軍の動きを聞かせてよ」

「手紙を送っただろ」

ウティホは更に怒るべき要因を思い出した。

「おお、何じゃあの伝言屋は！ あんなものに金を使いおつてからに。どうしてちゃんとした駅逓所を使わなかったのじゃ」

「手紙が届かなかったのか。こりゃあ検閲されたな。それなら、あんな駅伝屋でも使つて正解だった訳だ」

「何とな」

ウティホは驚きを隠せない。一方、少年は焦れている。

「もういいよ。本人が歸つてきてくれたのだから。お歸りジョーク。お疲れ様」

「おつ、ただいま。そうだ、敵さんの動きだな」

「そうそう」

「法皇が死にそうだって話は伝わったかい」

「今朝、正式な外交文書が届いたよ。七月に崩御したそうさ。先月、新しい法皇が就任したみたい」

「そうか、死んだか……」

「敵軍の情報は？」

「おお、それだな。偶然昔馴染みと逢えて、かなり信憑性のある話が聞けたんだ。それによるとユルグ軍の総数は二十万で……」

二人は頂垂れた。

「おうおう、何だよ。たかが倍じゃねえか。俺達は僅か五人で六百

名のユルグ軍を申しちまっただぜ。ざつと百倍だ」

「正確には百二十倍だよ」

少年は下を向いたままそう答えた。

「そうそう、その百二十倍だ。そして十二月に戦う事になる相手はたつたの二倍。片付けるには丁度よい数じゃねえか。いや、ちつとばかり少なえか？ あははは」

「つまり二十万の敵兵団が十二月に侵攻してくるんだね。それで北？ 南？」

「北だろうよ。六月の段階での話だが、俺のいた国境近くのオアシス街近郊に集結しつつあったらしい。その大軍をこの目で確認した訳ではないのだけれど、街は貿易が中止された割に賑わっていたし、食料の買い占めが行われて、宿屋や娼婦館が繁盛していた」

「軍隊がいると娼婦館が繁盛するの？ 勉強になるなあ」

「まだまだ学ぶ事は多いぞ。少年よ」

「ねえ、新しい法皇に関しては何か知らない？」

「あいつねえ。俺がずっと白豚って呼んでいた大司教だ。神々の御使い、使徒の長なんて言われているけれど、控えめに言っても糞の塊だね。いやもっと酷い。糞は臭うだけで動かないし喋らないが、口を開いては民をたぶらかし、あちこちと動き回って罪業を重ねる万人の敵だよ」

「相当恨みがありそうな感じだね」

「俺だけじゃねえ、あんた達にだって敵さ。俺の親父を殺し、アスマンに戦争を吹っ掛けた張本人だ」

「其奴そやつがか」

ウティホが話に割り込んだ。

「その者があの忌まわしい術でアスマンを……」

「手妻だそうだ。麻薬と火薬を使ったインチキさ」

ウティホとキリムは思い出した。我々には私怨があるのだ。晴らすべき怨念が。敵の数なぞ関係ない。倍の敵を打ち倒さねばその男に辿り着けないのなら、倒すまでの事。そしてその男の胸に剣を突

き立てて、まだ暖かい心臓を握り潰さねば気が済まない。

はたと少年が気付く。

「火薬、そうか火薬なんだ！」

「そうさ、そいつを手に入りたい」

キリムはジョクーの自由な発想に驚かされた。

確かに火薬があれば戦略も変わって行く。少数の部隊で多数を相手に善戦する事もできるだろう。待ち伏せに使用すれば効果は絶大だ。アスマン戦争でユルグに使われ、その威力は身に滲みて実感している。それなのに自分で使おうと思わなかったのは、心のどこかで四年前の悲劇を直視する事を避けていたのだろうか。

少年は台所で何やら奮闘しているノンモを呼び寄せた。

「ノンモ、出番だよ」

ウティホは、まさか自分の妻まで戦争に借り出す事になるうとは、露にも思わなかった。

彼女は医療の専門家である。アスマン戦争でもその腕を発揮したが、それは城内での事であって、野戦場で活躍していた訳ではない。それをこの歳になって、しかも、一個小隊五十名の指揮官として送り出すとは、一体誰に想像できるだろう。

主婦業と医療の専門家たれば薬物、鉱物にも詳しい。硫黄には消毒薬としての働きがあり、また染め物をする際の色抜きにも使われる。かつてはアスマン火山で採取していた。火山性ガスが冷えてできた単体結晶の、混じり気のない良い品が採れる。

それが必要となった。さて誰が採りに行くのか。そのあり処を知っているのは身の回りでは三人だけである。つまり少年とウティホ夫妻なのだが、キリムとウティホは隊を離れられない。となれば結論としてこうなる。

「ようやく、あたしの出番だね」

ノンモは旅支度を終えて万全の状態である。キリムがその逞しい口振りに応じる。

「頼むよ、ノンモ。それにジョクモ」

「あ、ああ」

ジョクは気乗りがしない。まさか、肝っ玉も身体も太いこの王妹陛下と同行する羽目になるとは考えていなかったのだ。冒険に満ちた危険な旅が諸国漫遊になってしまう。

ノンモはずんずんと大股で歩き、その後ろを猫背になったジョクが小股で従う。軍用の大型馬車に乗り込み、荷駄十輛、騎馬十騎の大部隊で出立した。残る火薬の原料、炭粉と硝石を積んで、その場で調査できる様にしてある。

ウティホは妻の馬車が見えなくなるまで見送った。失って初めて分かる妻の大切さ。急に自分が歳を取った様に感じる。背中を押して続けていた存在がいなくなると、これまでどうやって呼吸をしていたのかさえ分からなくなってしまうそうだった。

十一月。全軍の配置が完了した。第五師団は工兵としての勤めを終え、今度は索敵と敵兵站線を分断する役割に転ずる。北方の監視を充足させ、伝令兵の配置を更に細分化して高速化を図った。そしてキリムの進言で南方にも一部を展開させる。ノンモ達が心配だったからである。ウティホの気の病が移ったのかも知れない。

ウティホの外見は実に指揮官然として見える。痩せていてもがっしりとした体躯、立派な顎髭、日に灼けて黒く皺の深い顔付き。しかしながら、その内面は乙女のように繊細な心の持ち主で、荒事よりも育児や庭いじり、畑仕事に向いた性格なのである。

兵士として繊細な性格は減点要素ではない。ただ彼の場合、負ける事に対する心の許容値が低く、不利な状況や予期せぬ事態に遭うと心根が挫けてしまうところがあるのだ。それは四年前の敗戦で得た性分なのではなく、生まれ付きそうなのである。

それを変えたのがノンモだ。彼女は夫の背中を押し続けた。近衛兵長になる事を尻込みしていた時も、自分自身を娶る時も、叙勲さ

れ王籍に入る時も、そしてアスマン戦争で総大将に任じられた時も。

彼女の根拠のない声援や屈託のなさが幾度夫を救っただろうか。

悩み苦しんで眠れない夜、胃を痛めて何も食べられない時、彼女が傍らで鼾を掻いて、胃を摩る夫の皿から肉を奪い、更には嫌いな野菜を押し付けて、それでも平然としている妻の姿が救いになったのだ。何故それが救いになるのかはウティホにしか分からないところだが。

しかし、今はそのノンモがない。彼女がいるのは遠く南の地である。



## 第八章

十二月初旬。本格的な寒波と共に、きたるべき時がくる。

王宮の最奥、国王執務室に急報がもたらされた。土埃に塗れた伝令兵が官吏達を押し退け、倒れ込む様に入室する。

「申し上げます。ユルグ軍が大挙侵入」

王を見付けた兵士は姿勢を正し、唾を飲み込んで言葉を捻り出す。  
「その数二十五万と見たり。南方の……南方の防壁は一瞬で突破されました」

王とキリムは戦慄する。少年は頭に血が上るのを覚えた。口の中に苦みが拡がる。そして、王の代わりに指示を飛ばす。

「城詰めの伝令を集合させよ。大至急！」

少年は卓上に地図を拡げ、南方一帯を凝視した。どう考えてもこの国境を二十五万の大部隊で突破するのは馬鹿げている。

キリムが伝令兵に聞く。

「敵侵攻の様子を聞きましたか？」

「はい。敵は防壁の存在を知っていたらしく、一斉に森を踏破、歩兵の大部隊で国境守備隊の後背を突いて防壁を掌握すると、人力のみで石壁を撤去させたそうです。その後貿易行路を通じて数え切れない程の騎馬や戦馬車が侵入しました」

「突破されたのは何日前？」

「はい、十一月の二十七日、五日前であります」

この伝令兵は八日掛かる行程を五日できてくれた。それだけ恐怖だったのだろう。

王は兵を労い、下がらせた。

「まずは北方に展開している隊を呼び戻さねばなるまい」  
キリムは渋い顔で応える。

「はい。でもそれだけでは間に合いません。役割を変えます。ご許

可頂けますか」

国王は鷹揚に頷いた。

第五師団所属の十名の伝令兵が飛び込んできた。上官たる少年が号令する。

「各自筆紙出せ」

伝令は背囊から手帳と木筆を取り出した。慌ててしまい、筆先を整える小刀で指を切った者もいる。

「以下全軍に宛てる。十一月二十七日、敵兵が南方国境より侵入せり。二十五万の兵を以つてなり。繰り返し伝える。敵侵攻は南方」

伝令兵は懸命に筆を走らせている。

まずは北方の荒れ野に位置している婆様の部隊に向けて発令する。

「以下第三及び第四師団に宛てる。持ち場を撤収し、王都経由で大河バルバーレを渡河。王都南岸を守備せよ。以上」

四名の伝令兵が飛び出していった。次に比較的王都近くに布陣している王女の部隊。

「以下第二師団に宛てる。持ち場を撤収し、王都経由で大河バルバーレを渡河。南方の荒れ野まで移動し敵軍を遊撃せよ。敵位置は随時伝える。作戦行動は全て自由とす。以上」

二名の伝令兵が後を追う。次に老将とキリムが参加している部隊。広く分散している。

「以下第五師団に宛てる。敵兵站線工作部隊の全て、及び他部隊の半数を撤収する。王都に戻れ。残る部隊は作戦を続行し、北方の監視、索敵及び伝令の任務を続けよ。以上」

三名の伝令兵が走り出す。最期は一番近くにいるウティホの部隊。「以下第一師団に宛てる。至急、王都経由で大河バルバーレを渡河。これから手配する騎馬と戦馬車を編入せよ。その後はアスマン火山に行った小隊を発見、合流する事を第一任務とする。その後は遊撃を任務とし、作戦一切を自由とする。また火薬が入手できれば、その使用を許可する。以上」

最後の一人が駆け出した。

少年は取り敢えず椅子に座り、王に向かう。

「国王、申し訳ありませんでした。僕の見立てが間違っていました」  
王は力強く応える。

「いや、この事態は誰であつても予測不可能であつたろう。私はたつた今、腹が据わつた思ひだ。君達と運命を共にするよ」

王の目付きが変わつた。少年は国王がどう決意したのかを考えている。

彼は貴族達や高級軍人の一切を軍指令部から追い出した。彼らが全く役に立たない無能者揃ひだつたとしても、若い王らしい賞賛すべき英断だつた。更には常識の壁を越えてまでも最善と思える指揮官を配置し、任務に就けている。十二歳の作戦士官たる自分がその最右翼だ。そして今、その努力を以てしても予想を上回る難局に直面している。負けるかも知れない。一方、この戦争に荷担していない貴族は多い。特に大貴族の連中は皆領地に引き籠もっている。この戦が敗戦に終わったとしても、彼らは助命されるのではないか。それならば国王一族がごとく絶えても、バルバーレの伝統は残せるだろう。アスマンの様に雲散霧消とはならず済む。そう考えているのではなからうか。

キリムは王の顔をもう一度見た。王は頷く。

「若きアスマンの王よ。御事は確かに敵の行動を見誤つたが、その謝罪の前にまず行動した。これを是としたい。それに大切な同居人を三人とも戦地に出してゐるではないか。私は感謝しているのだよ。この戦いに成功しようが失敗しようが、それは変わらないのだという事を憶えておいて欲しい」

この王は執政者として成長している。快活故に尊大なところがあり、この様な考えを持てる人ではなかつた。各師団の兵士達も育つてゐる。勝機はまだある。少年はそう考えていた。

キリムは状況の把握に全力を注いだ。兵力の一割を割いて伝令網

を築いていたのが功を奏して、時間差はあっても続々と情報が入ってくる。伝令は特殊な任務だ。達成感が少なく地味な仕事であり、それでいて目が回る程忙しい。彼らは良くやっている。

敵軍は大部隊なので進行速度が遅い。ただ、一度も反撃を受けていないので全く疲弊していないだろう。

速度に関して目を見張るのは王女の第二師団である。ウティホの第一師団に追い付いて一旦合流し、先行して行った。神速を旨としたいと公言していただけはある。

第一師団の進出が遅い理由は分かる。王都南岸を守るべき第三、第四師団が到着していないので王都から離れたくないのだ。ウティホ自身は一日も早くノンモと再会したい気持ちを抑え込んで、命令に反する悪役を演じている。

南方方面軍の残存兵は、兵営所であった『海辺の街』を離れ、王都に向かっている。もうあの街は敵に接收されただろう。住民達はどうしているのだろうか。

一月。新年を迎えたが、それを祝う者はいない。

砂嵐と寒波が双方の兵士達を苦しめている。計算では、敵軍は王都までの行程の半分を消化した頃だ。呑気な話ではあるが、今頃になつてようやく敵軍から宣戦布告の書状が届けられた。

キリムが読み上げる。

『バルバーレ国王に告ぐ。我らはユルグ教国新法皇の名を以て、ここに宣戦を布告するものなり。貴国の早期降伏を期待するが、そうならざれば正々堂々と雌雄を決し、大陸の覇者を定めん。貴軍の善戦を祈願す』

「だそうですよ、婆様」

お婆は彼女が率いる二個師団と共に帰都している。

「これは傑作じゃな。戦端を開くには大義名分が必要だとばかり思っておったが、最近の流行りでは要らぬらしい。どうやら時代に乗り遅れたか」

王が応じる。

「理由を付けられなくてはなかったのだろうか、面倒になったのであるうな。その気持ちは分からぬでもない」

「返事、する？」

王に対する問いに、婆様が答える。

「婆が返事を書こう。そのくらいの時間はあるじやろう」

彼女はにやりとし、書記を呼んで代筆させた。

『ユルグ軍司令官に告ぐ。早く王都まで来たれかし。我らが秘術を以て迎えんとす。バルバーレの魔女とアスマンの魔女の息子が貴軍を歓待するものなり』

「はったりが通じるか？」と王。

「さて、どちらでも構わぬ。通じなくとも損はない」

王は笑って、その書簡に署名した。

ユルグ軍の全軍司令官はユルグ教の司教の一人で、部下からはその頭髪と小男振りから『禿げ鼠』と呼ばれている。

バルバーレ軍は永らく戦争をしなかった為に懦弱になったが、ユルグ軍は四年前のアスマン戦争の痛手を引き摺る形で弱体化していた。その最も顕著な例が司令官の不在である。優秀な武官がおらず、専門外の司教が作戦指揮を執る羽目に陥っている。

全軍の司令官が宗教家なら、各隊の現場指揮官は平民である。志願兵の中から忠誠心の高い者を抽出し、短時間で指揮者としての教育を施したのだ。しかし、その一事を以て脆弱とは言い切れない。

兵士を職業とする者と、志願兵や徴兵された者には違いがある。

勿論、兵士としての知識や技能、体力も違っただろうが、決定的な差異は心構えである。

人の活動には必ず目的がある。そして目的を果たす為に手段があるのであり、決して逆ではない。

ユルグ軍の侵攻には大陸を掌握するという目的があつて、その為に二十五万の大部隊で一氣に敵王都を攻め落とす作戦を採用してい

る。しかし、司令官たる『禿げ鼠』以外はそう思っていない。個人的な手柄を上げて報償される事、つまり異教徒を殺す事自体が兵士達の目的であり、それが何の為だろうが、どんな方法を以てしてだろうが構わないのだ。

南方国境地帯での戦闘もそうであった。防壁さえ撤去できれば良かったのだが、敗走するバルバーレの兵士をどこまでも追って行き、再集合させるのに時間が掛かってしまった。これが職業兵士の集団たるバルバーレ軍との違いである。彼らは一兵卒に至るまで目的意識を持っている。だから無用な争いは避けるだろうし、殺す事に拘りはしない。

作戦運動ではバルバーレが勝利、凶暴性ではユルグが勝っているのだ。

禿げ鼠はその事を充分承知していた。そして、それで良いと考えている。

十個師団二十五万もの兵力があれば、二方面、三方面に展開して敵を包囲殲滅するのが妥当な戦術である。大部隊が固まっても戦闘行為ができるのは先頭部だけとなって、結局少数で争う事になるからだ。だが、ユルグ軍には複雑な作戦が採れない。司令官自身が直接指揮をする一集団しか制御できないのだ。その一方、固まって動く利点もある。敵に威圧感を誇示できるし、多少の消耗があっても無視できる。これ程にまで数的に有利ならば、ただ前進して邪魔なものを蹴散らすという単純明快な作戦で充分なのだ。

ユルグ軍の夜営。一般の兵士達は数少ない焚き火を囲み、外套に身をくるんで眠っている。ひもじさや寒さに耐えながらである。隊の指揮官達は馬車で眠る。これとて雨風が凌げるのみであり、寒さや空腹に変わりはない。

他方、司令部は豪華な天幕の中にある。暖房器具が赤々と燃え、酒樽が山と積まれている。司令官は宗教家であり、女こそ引き連れたいないが、代わりに奥小姓がその役を任じられている。

その小姓が天幕を訪れ、司令官の前で恭しく跪く。

「司教様、敵が返事を寄越しました」

「読め」

「はい。『バルバーレの魔女とアスマンの魔女の息子が貴軍を歓迎する』とあります」

禿げ鼠は暫く考えていた。そして小姓の少年に聞いてみる。

「この書簡の内容を知って、お前はどう思ったのだ？」

「はい。こんな話は嘘に違いありません。魔女だの術士だの、敵の強がりです」

「怖いか？」

「怖くはありません。私どもは閣下の法力で守られていますから」  
強がっているのは少年の方であろう。怯えたその目が物語っている。

他言無用と言い含めて、小姓を下がらせた。

彼は気掛かりであった。自分に法力なぞない事は自分自身がよく知っている。そして兵士達は臆病者の集まりに過ぎない。今は国境戦の勝利で昂揚していても、一旦平静を取り戻せば戻ればただの農民、職人に成り下がってしまうだろう。

天幕の隅にある木箱に目を遣る。嚴重に封をした白木の箱。その中には護摩と呼ばれる秘薬が入っている。

今回の戦、彼我の兵力差は充分以上に大きい筈。必要ないと思っていたが、やはりこれを使うべきなのかも知れない。四年前の様にそう考えていた。

飼犬は飼主主に似るとか。それは一種の錯覚で、飼主主の一方的な願望に過ぎない。しかし、隊の兵士達が指揮官に似るのは事実らしい。ウティホの隊は下級兵士に至るまで生真面目で融通が利かない。お婆の隊は飄々として無頼、老将に指揮されている隊は地味な職人の集まりだ。

そして王女マウ・リサが率いる第二師団は果敢である。

南方の荒れ地。先頭をゆく芦毛の牝馬が丘の上に立ち、翻る。

後に続く二万余の兵士。そこには見知った顔が並んでいる。幼い頃から親しくしている近衛兵達。将官も、そして下級兵士達も、遠くを見る様な表情で王女を見詰めている。恐れるでも興奮するでもない。達観した、自らの役目に殉ずる顔だ。

第二師団の役目、それは効率よく敵を消耗させる事にある。勝つ事でも生き残る事でもない。ただ一人で二人以上の敵兵を屠ればいい。

先行させた索敵隊から敵発見の報がもたらされた。王都の司令部からは敵の進行速度に関する情報を得ている。今日の夜営地を予測し、敵の寝込みを襲う。名誉な事ではない。味方からも後指を指されかねない。でもそんな事は関係ないのだ。国に明日があれば、兵士達にとつては家族に明日があれば、それで良い。

マウ・リサは戦場を決定した。

ユルグ軍は今日も反攻を受けず、悠々として王都との間合いを詰めた。二十五万余の大部隊は前進を止め、貿易行路と周辺の平地一面に拡がり、夜営の準備を始めている。

司令官たる禿げ鼠は各隊の将官を集合させた。二十名の師団長、副師団長が司令部の天幕に集う。まず宗教儀式が執り行われ、簡素な食事の後、軍議が開かれる。

禿げ鼠が一段高い場所に立ち、甲高い声で叱咤する。

「信仰深き我が将達よ。これまで我が軍は順調に進軍しておる。これは誰のお陰か？」

将官の誰かが叫ぶ。

「神々のお陰です」

「そうだ。我々にあつて敵にないもの。それは何か？」

「有り難き教えです！」

全員の声が揃った。司令官は満足げな表情を見せる。



「そうだ。神々の加護がある限り、我々は負けない。そして敵をど  
うするのだ？」

「八つ裂きにしてやる」

「塵だ！」

将官達は興奮している。野蛮な怒号が収まるのを待つて、一同に  
指示を出す。

「よろしい。ではこの地図を見よ。荒れ野の進軍は今日で終わる。  
明日からは砂嵐のない丘陵地帯へと入るのだ。人の住む街も多く存  
在してある。その街々を焼き払い、兵糧を奪う事も忘れてはならぬ  
ぞ」

一同は「おお」と歓声を挙げた。ようやく自らの凶暴性を発揮で  
きるのだ。女を味わう事もできるであろう。期待と妄想が募る。

皆を鎮め、指示を続ける。

「荒れ地と丘陵地帯との間には峡谷がある。細く長い谷の底を踏破  
せねばならぬのだ。その出口で敵が待ち受けている可能性が高い。  
けして油断するな。そこを越えれば肉や女を幾らでも喰えるのだか  
らな」

一同は快哉を叫び、短い軍議は解散となった。禿げ鼠は小姓達に  
後片付けをさせ、天幕の布壁を開けさせた。連中の臭い息が籠もつ  
て耐えられなかったのだ。

天幕の中に一月の浜風が吹き込み、暖気がすっかり逃げてしまつ  
た。それでも獣臭さが残っている。強めの酒を運ばせ、それを一氣  
に飲み干した。酒は喉を焼き、目眩を引き起こす程酒精の濃いもの  
であった。そして夜空一面に広がる火線を目にする。海のある東か  
ら幾筋もの火が飛んでいるのだ。最初は酒の所為かとも思ったが、  
司令部近くに飛来し荷馬車が燃え上がるのを見て、それが火矢だと  
気が付いた。

東の方向から関をつくる声が聞こえる。敵の襲来だ。慌てて伝令  
を集め、指示を出す。

「東から敵が責めてくるぞ。応戦するのだ。歩兵で野営地を守らせ

る」

伝令兵は四方に散った。

マウ・リサは騎馬一万三千で野営地の西に陣取っている。丘の上に  
一列の横隊を作って。

残る歩兵達は敵の東側に位置させた。彼らの役目は揺動である。  
全員が弓兵となり、火矢を三射させ、派手に怒号を挙げさせた後、  
退避させる。敵の騎馬隊が素早く動けば全滅してしまうかも知れな  
い。危険な役目である。

漆黒の闇が赤い線で彩られた。野営地のあちこちで火の手が上が  
っている。遠くから風に乗って、味方の鬨の聲が微かに聞こえる。  
王女は剣を振り下ろし、全軍突撃を命じた。こちらは皆無言であ  
る。声で自らの士気を鼓舞する必要はない。それは既に胸の奥から  
沸々と湧き上がっている。

一万三千が作った黒い線が一斉に前進する。やがて丘を駆け降り  
て加速し、疾走する地響きとなった。

禿げ鼠は馬車の御者台に立ち上がり、戦況を確かめている。

東方の火矢は止み。あれから襲ってくる気配がない。単なる脅し  
だったのかも知れない。歩兵を東に布陣させたが、無駄に終わるだ  
ろう。天幕に戻る事にした。ここは余りに寒い。

突如、あらぬ方向から悲鳴と怒号が起こった。西である。暫くし  
て馬群が足音を響かせて接近してくるのが分かった。敵の伏兵だ。  
禿げ鼠は『しまった』と声に出さずに叫んだ。そして動かさずに  
いた司令部直属の近衛隊を天幕の守りに付けさせた。こうなってし  
まえば作戦も何もない。司令部だけは守り通し、他は各々が自らを  
助けるしかないのだ。

王女マウ・リサは敵陣に躍り込んだ。先頭を切って、血を欲しが  
る魔物と化して。

それから幾人の敵を刻んだらう。剣は血と脂肪で鈍になり、切るといふより殴打する武器となっている。配下の兵士達も頑張っている。鎧が折れるまで、いや折れてただの棒になってもそれで突き刺そうとしている。中には変わった者もいて、敵兵を相手とせず、荷駄に火を付けて回る兵もいる。

東側に布陣していた敵歩兵部隊が慌て戻ってこようとしている。この大軍を相手にはできない。王女は頃合いとばかりに指笛を吹き、北へと進路を変えた。そして愛馬の腹を蹴り、常足から襲歩へと速度を上げた。

前方に大きな天幕が現れた。その周りを重歩兵が守っている。甲冑に身を包み、三又の鎧を備える敵近衛兵隊である。王女の芦毛はひようと飛翔し、その壁を越えた。そしてそのまま止まらず、天幕に飛び込みその中を掻き回した。小さな人を踏みつけたと思うが、定かではない。やがて天幕を飛び出し、再度、衛兵の壁を越えて北へと逃走した。

天幕に一人、憤然たる司令官が座している。この男にとって、将兵から『禿げ鼠』と揶揄されようが、その部下どもが馬鹿揃いであろうが頓着する事柄ではなかった。彼は常に上役の方を向いている人種であり、目上がどう思うか、その一事のみが大切なのである。若かった頃からその姿勢を貫いてきた。そして司教にまで出世し、上役と言えば国主たる法皇しか存在していない。この戦に勝利せしめれば唯一の大司教になれるかも知れない。けして逃す事のできない好機なのだ。

敵騎馬兵の数は一万から一万五千だという。そんな少数の敵が我々を蹴っているのだ。味方の何と情弱な事か。そして、この有様を法皇にどう報告すれば良いというのか。

そう悩んでいる内に新たな不安が接近してきた。

馬蹄の響きが迫る。守りに付けた近衛兵が騒がしくしている様だ。表に出て確認しようとした瞬間、一頭の芦毛が天幕に入ってきた。

身体が強ばって身動きができない。馬は天幕の中をぐるぐると回り出す。呆然とその姿を見ているしかない。

「ひいっ」

思わず悲鳴を上げる。馬の前足で股間を蹴り上げられてしまったのだ。その後、それはあつさりと出て行つた。天幕内は調度品が壊され、布壁を裂かれ、見るも無惨な様相と成り果てている。禿げ鼠は伝令を呼び寄せ、こう命じた。

「全ての騎兵を使って彼奴らきやつを屠れ。騎馬隊長にこう伝えよ。敵全員の首くびを取るまで決して戻るなとな」

疾駆する芦毛馬。マウ・リサの手に武器はない。しかも、この先は一本道の峡谷である。谷の底では左右に逃げる事も適わない。追走しているであろう敵騎馬隊を振り切つてしまわねば、簡単に捕縛されるか、その場で惨殺されてしまうだろう。

峡谷の入り口に差し掛かった。長い登り坂の上で停止し、愛馬を反転させる。味方の兵士達が軍馬を狂奔させている。一万三千の我が騎兵達。その半数はもういない。予想はしていたが、悔しさに唇を噛み締めた。その後方から敵騎馬隊らしき一団が追い絶る。

前進するしかない。王女はもう一度、愛馬に鞭を入れた。

逃避行の最中、マウ・リサはある事を思い出していた。ジョクーとノンモの小隊はどうしているのだろうか。考えられない事だが、既に害されてしまったのではないか。

ジョクーには独自の嗅覚がある。理屈ではない。物を運ぶ事だけを任じられている自分達が、甲冑姿で戦馬車に乗っているのが不自然だと感じたのである。その感覚が自らを助けた。アスマン火山への道中でその事に気付き、海辺の街で、衣装をそっくり商人のそれと替えたのだ。兵士達は慣れぬ風采に戸惑っていたが、大いに喜んだ者もいる。

「ああ、これで楽になったよ。どうもこの被り物は苦手だね」

髪を結い上げて、頭の上で団子に纏めているノンモがそう呟いた。彼女が兜を被ると、極端に長い頭をしている様で滑稽だったのだ。小隊は隊商にキャラバン変装し、アスマン火山までの旅程を無事に踏破した。その帰路、春にウティホ達と出逢った三叉路で、驚愕すべき事態に遭遇した。

ジョクーがノンモに耳打ちする。

「ありや何だ？」

「ユルグの大部隊に見えるわね」

「どうして南の国境にいるんだ？ 裏を搔かれたのか」

「そうなるね」

「バルバーレ軍はどうなる？」

「どうもこうも、大変だろうね」

「まずい事になったもんだ。どうやら戦は負けか」

「そりや分らないさ。あたしらの働き如何じゃないかね」

ジョクーはウティホが妻を頼りにしている訳が分かった。こんな状況でも動じる素振りを微塵も見せないとは、何と胆の据わった人物であろうか。きっと、面の皮は疣猪の如く分厚く、心臓にはびっしりと針金が生えているのだろう。ある意味においては無敵だ。

「俺達の働きと言っても、どう働けば良いんだ？」

「まずはバルバーレに入らなきゃね」

「こんなに敵がいるのか。どうやって？」

「そりやお前さんの仕事だろう。考えるんだね。死にたくなけりや」  
そうだった。この人は誰よりも強いが働かない人であった。

自生している刈安の葉で前歯を黄色く染め、炭で口と目の周りを黒く書いた。ジョクー扮する間抜けのでき上がりである。そして悠々とユルグ軍に近づいて行った。

そんな小者には目も呉れず、隊は前進を続けている。その様を見送っていると、騎馬兵団の隊長らしき人物に声を掛けられた。

「貴様、ここで何をしておる」

「へい。あつしらは運送屋なんす。アスマン火山から石炭を採って参りまして、そんでバルバーレへ帰ろうとここまできやしたが、大勢さんが通つてらして、どうしたもんか、いつになつたら通して頂けるのかと思案しているところでございます。はい」

「バルバーレの何処まで荷を運ぶのだ？」

「名前を申し上げてもご存じとは思えませんが、丘陵地帯の端、マシジャロウ山脈の麓にある小さな村でございます」

「石炭は燃料にでもするのか？」

「へい。それにですね、年に一度の祭りがありやして、この様に炭で顔に模様を作つて誰が一番男前なのかを競うのです」

「お前は男前なのか？」

「へへっ。あつしはこれでも村一番の美男子でして」

ユルグ軍の騎兵は、その不思議な風習を聞いて興味が出てきた。

「このご時世に呑気な話だ。貴様ら下郎が羨ましい」

「へえ。皆さんも戦事に飽きなさつたら村へお越し下さい」

男が黄色い歯を見せて笑うものだから、顰めっ面をしていた隊長まで笑ってしまった。

「そうか。でも今はここを通す訳にはいかんな」

「参つたな。アスマン火山で綺麗な赤玉ルビィを見付けたもんで、これをかあちゃんに渡してやりたいんですがねえ」

「ほう、赤玉ルビィか。貴様らは宝石を身に付けぬと聞いていたが、それをどうするのだ」

「へい。女は祭りで鼻の穴の大きさを競うのです。その時にこいつを詰めて大きく見せる訳でして」

「何と、赤玉ルビィを鼻に詰めてしまうのか。物の価値を知らぬ蛮族とはいえ、凄まじき無知振りだな」

「はあ、そう仰られても、あつしらはそうやって暮らしていますんで」

「でも、どうして鼻の穴を大きくせねばならぬのだ？」

「へい。村は高い場所にありやして、鼻の穴が小さいと息が詰まる

んです。それで、鼻の穴が大きな事が美人の条件でして」

「そうか、そんなものなのかも知れぬな。ところでその赤玉<sup>ルビ</sup>を見せ  
てはくれぬか」

ジョクーは腰の皮袋を開いてみせた。磨かれてはいないが、透明  
感のある濃い赤がちらりと見える。騎兵の顔付きが変わった。

「お主、ものは相談だが、この石を幾つか寄越さぬか。そうすれば  
俺が国境の向こうまで無事に送ってやる」

「それじゃあ、あつしらの荷馬車を通して頂けるんで？」

「保証しよう」

商談が成立した。騎兵は皮袋の中から赤い原石を取り出し、懸命  
に吟味している。その中から色の濃いものを幾つか懐に入れて、ほ  
くほく顔で一行を送ってくれた。別れ際、ジョクーのみならずノン  
モ以下の全員が同じ化粧をして、にっと笑って見送った。

ノンモが讚える。

「お前さんは嘘が上手いねえ」

「我ながらよく気が回ったと感心するよ。赤玉<sup>ルビ</sup>を採っておいて正解  
だったな」

火山で硫黄を採取していて、目聡くも赤玉<sup>ルビ</sup>の原石が転がってるの  
を見付けたのだ。そしてそれを集めておいた。嘗ての旅でこの石の  
威力を実感したのが良かった。

「それにしても・・・見て御覧よ。あの様を」

「ああ、酷いものだ」

一面に累々と転がるバルバーレ兵の遺骸。防壁のあった辺りだ。  
皆、自らの士気を再確認した。

貿易行路は敵で溢れている。このままでは数日で海辺の街は飲み  
込まれてしまっただろう。悔しいが、何もできない。小隊は行路を避  
け、急ぎ北上する。山沿いに道なき道を進み、荒れ地と丘陵地帯の  
境、峡谷の山の上に陣取った。

ノンモが下の様子を伺っている。

「惜しいねえ。全く惜しい」

ジョクーが尋ねる。

「何が？」

「いやね、下を見て御覧よ。谷底に貿易行路があるだろう？」

「曲がりくねっているな」

「そうじゃなくってね、この行路は幅が狭い。塞いでしまえば、敵とて自由に行動できないじゃないか。そして上から岩を落とすのさ」

「そりや良い作戦だ。でも付け加えるなら、そう考えるだけじゃなくて実践してみりやいいんじゃないか？」

「でもこれだけの人数じゃあねえ」

「俺達には秘密兵器がある」

「あれかい。何だかおっかなくてね」

「贅沢を言ってはいけませんぜ」

ノンモ隊長をなだめて、一行は穴を掘り出した。火薬の詰まった俵が収まるだけの大きさで、極力深い穴を穿つ。それを横一線に設えた。

折角作った火薬の殆どを使用してしまう事になるが、成功すれば岩どころか山の一角が谷底に落ちるだろう。貿易行路を埋めてしまうに充分な土砂の量である。

そして、頃合いを待つ事にした。通せんぼをするだけでは益が少ない。敵を下敷きにするか、分断して初めて効果がある作戦なのだ。

夜。月齢が若く漆黒の闇である。そして遠く南方にぼつぽつと灯りが見える。監視を続けていた兵士がそれを見付け、全員を起こした。

隊長たるノンモは兵士に意外な言葉を掛ける。

「人様が寝入るかどうかの頃合いで起こすなんて、お前は育ちが悪いに違いないね」

困っている兵士にジョクーが助け船を出す。



「まあまあ、よくやった。君の判断は何も間違っちゃいないよ。間違っているのはこの太った小母さんだから気にしない様に」

「何だって？」

「いえ、何ならもう一度お眠りになりますか？」

「そうかい。そうさせて貰おうかね」

そう言つと、すかさず眠つてしまった。

ジョクーは哲学的な発見をした。神様が本当にいれば、多分こんな感じなのかも知れない。万事を超越し、ただそこにいるだけの存在。

ジョクーは元山賊を気取るだけあつて、夜目、遠目が利くし、耳も良い。風に乗って人の叫喚と鯨波が聞こえる。馬の駆ける音も。

地中に仕込んだ火薬俵は全部で三十九。少量の火薬を編み込んだ導火線の長さを揃え、更に束ねて一本にしてある。見付からない様に小さく種火を作り、点火の準備をさせた。

やがて馬蹄の響きが近づいてくる。此奴らを下敷きにしてやれば良いのだ。点火合図の手を高く挙げた。

ふと気付く。

「待て待て！」

点火係の兵士が慌てて種火を遠ざける。

「敵じゃない。あれは王女じゃないのか」

全員で目を凝らす。しかし、そこまで確認できるのはジョクーだけだ。

「ほら、あの芦毛は間違いない。それに続く騎兵は我が軍のものだろう。胸当てを見れば分かる」

バルバーレの騎馬兵は銅製の胸当てをしている。一方ユルグは革製だ。輝きが違う。

金に輝く一団が通り過ぎ、その後を黒い大部隊が迫りつつある。今度は間違いなくユルグ騎兵だ。ジョクーは掲げた手を振り下ろした。

「点火！」

号令と同時に兵士が種火を導火線に宛がう。

火花を散らしながら燃え進む。全員がノンモの眠る馬車の後ろに隠れ、耳を塞いだ。やがて火花が見えなくなり、ぶすぶすと煙が上がるのみになってしまった。

「おや？」

ジョクーは心配になって身を乗り出した。

その時。

三十九の火薬俵が一斉に火を噴いた。轟音が全身を揺らし、鼓膜を劈き、土砂が舞い上がる。暫く経っても土煙りが収まらない。耳鳴りも止んでくれない。

「げぼげぼ、皆大丈夫か！」

ジョクーは土塗れの顔でそう叫んだ。ノンモが馬車からぬつと顔を出す。

「言っただろう。人様の寝入りを邪魔するなと」

可哀想な事に、彼女も頭から土を被っている。

「すみません」

ジョクーは取り敢えず謝った。それ以外に何ができようか。

土煙はまだ収まらない。それでも下を覗いてみる。さっきまで山の一部だったものが見事に落盤している。ちょうど馬車の際まで。貿易行路は土砂の下に隠れてしまった。

急いで移動の準備に取り掛かる。

王女はどうなっているだろうか。間違って生き埋めになっていないか。良いのだが。

ウティホの第一師団は婆様の第三、四師団の到着を待つて王都を離れた。

ウティホは内心焦っていた。ノンモ達は無事だろうか。それでも師団の移動速度は変えない。整然と、規律正しく行進させる。それしかできないのだ。

丘陵地帯の行路沿いには民家が建ち並んでいる。手分けして一軒

一軒を訪問し、立ち退きを命じた。民はそれに応じて行路から遠い田舎か、王都へと移って行った。説得する兵士達の真剣な様子に抗えなかったのだ。

一団は丘陵地帯の終わり、峡谷の手前に陣取った。

遊軍として敵の後背や横合いから攻めると命じられたが、ウティホの隊には無理な話である。敵を待ち受け、正面から受け止め、耐える。それしか学んでいないのだ。せめて戦場予定地の整地はやっておきたいところだが、それすらできない。フォークとナイフ以外は持った事のない深窓の佳人という言葉は聞いた事があるが、剣しか持てず鋤や鍬で土いじりができない兵士なぞ笑い話にもならない。近衛兵は汚れ仕事なぞしないという信念に凝り固まっているのだ。

ウティホはそんな状況で戦闘しなくてはならない。知恵を絞って編成を整える。

まずは先頭に大楯を並ばせる。これを弓矢避けにして、こちらの弓隊を横一列で配置する。その後ろには鎧隊、そして最後方は剣を携える本隊を置く。彼らに言わせれば剣で戦うのが近衛の本懐なのだそうだ。本来なら彼らにも鎧を持たせたい。剣では騎馬に立ち向かえないからだ。

ウティホは各隊に自分の位置を憶えさせ、解散させた。

夜が近い。見張りを残し、夜営の準備を始める。行路とその周辺の草地に天幕が設置された。戦いは明日の夜であろう。第五師団索敵部隊からの情報によると、敵は峡谷の向こう側で夜営をしているらしい。ならば、敵は日中一日掛けて谷底の行路を踏破し、相見えるのは明日の夜になる計算だ。

兵士達の食事に肉を付け、飲酒も許可した。今夜ぐらいは大きくなった腹を抱えて眠らせてやりたい。明日にはもう食事をせずともよい身体になっているかも知れぬのだから。

就寝時間を知らせるラッパが悲しげな音をさせている。ウティホ

は横になったが、眠れそうもない。天幕の外では兵士達がまだ騒いでいる。いつもなら叱り付けるところだが、止めておいた。彼らとて眠れないのだろう。酒が入っても酔えない夜は確かにある。

明け方、静寂を突然の轟音が引き裂いた。峡谷を抜けて、余韻が殷々と響き渡る。

見張り役が指揮官の天幕に滑り込んだ。

「峡谷に異常発生。遠くで煙が上がっています」

ウティホはがばりと起き上がった。

「総員起しじゃ」

そう叫ぶや否や天幕の外に出て、見張り台まで駆け上がった。起床ラッパが喧騒を立てる。遠くには朦々と立ち登る煙が見える。そして、その中から騎馬が姿を現した。

「全員配置に付け。急げ」

兵士達は身支度もそこに隊列を組み、皆して一点を凝視した。煙の雲に追われる様に、騎馬の一団がこちらへと突進してくる。

煙の意味は分からないが、騎兵の数は数千もある。こちらを混乱させるには十分な数だ。

ウティホは指揮杖を掲げた。

「弓用意。まだ撃つな。練習通り引き付けてから撃つのじゃ」

騎馬は前進を止めない。射程距離に近づく。

「弓引けい」

その声を聞いて弓兵がぎりぎりと弓を絞った。ウティホは頃合いを見計らっている。指揮杖を振り下ろせば数千の矢が騎馬を襲う筈だ。

奇妙な事だが、こんな時に昔の事を思い出していた。王女と出逢った時の事だ。彼女はユルグ騎兵に追われていて、我らの野営地に突進してきた。今にして思えば風変わりな再会であった。今回も先頭は芦毛の馬だ。足先だけが灰色をした白馬。王女の馬に似ている。鞍上は長い黒髪の小兵。女だろうか？

「弓戻せ！ 撃つな。王女じゃ！」

何本かの矢が飛んでしまった。王女の馬は右に左にと矢を避ける。矢避けの大楯を撤去して王女達を迎え入れた。馬蹄を鳴らして数千の騎馬が雪崩れ込む。

血と汗の臭いと共に。

彼らは疲労の極みにある。騎兵達は馬から下りるや倒れ込んでしまった。馬とて同じだ。三本足でようやく立っているもの、敷き藁もないのに寝転がるものもいる。

「何とした事じゃ」

ウティホは駭然たる思いでその姿を見ていた。あの揚々とした王女の隊ではない。返り血と己の血に塗れ、ろくな武器も持たず、人も馬も死んだ様な目をしている。

王女の元へと駆け寄った。彼女も馬から降りて座り込んでいる。

「王女！ お身体は……」

「私は大丈夫です。どうか、私の兵士達を手当してやって……」  
「それはやらせておりますじゃ。お疲れだとは思いますが、状況を説明して下さらぬか」

「分からないのです。昨晚、夜襲を行い、その後ここまで逃げて参りました。途中、峡谷の行路で山崩れがあつて、追つ手と分断されたのが幸いでした。そうでなければ……」

第二師団の副長が王女に歩み寄る。

「殿下……」

「報告を」

「はっ、ここまで辿り着けた将兵は約七千、将官一名の他、佐官十二名と六千の騎兵を失いました」

「別働隊の歩兵達は……不明でしょうね」

「はい。手筈通りに逃げ切ってくれている事を祈るばかりです」

「これで我が師団も将官は私と貴方だけ……いや、七千ではもう旅団並ね」

「今回の作戦、殿下は後悔なさっていますか」

「後悔すべきかどうかはまだ分からない。我々が失った将兵は一万三千、その倍以上の敵を仕留めていれば良し、そうでなければ・・・  
・そう言う貴方は何名の敵を？」

「さあ、十までは数えていましたが」

「ふっ、私と同じね」

ここから王都まではもう目と鼻の先である。奇襲を仕掛ける機会はないだろう。遊軍の仕事は終わったのだ。

「帰ろう。王都バルバーレへ」

「はっ」

そう聞かされた騎兵達はようやく笑顔を取り戻した。家族と再会して、魔物から人に戻れるのだ。未だ手に残っている人肉を刻む感覚は忘れられないとしても。

ウティホは手持ちの騎馬を使って峡谷へと侵入させた。山崩れの様子を調べる為だ。もしその規模が大きければ、敵は進攻速度を大きく緩める事になる。この地に残る兵力を集中させ、強固な防衛線を張る事ができる可能性もあるのだ。

同時に王都へと伝令を遣わした。この状況を司令部に伝えねばならない。

## 第九章

禿げ鼠は怒っていた。それには充分な理由がある。

一つには敵を完全に逃がしてしまった事。火矢を放った東の敵も、あの忌々しい騎馬隊でもある。野営地に残る敵兵の遺骸は八千との報告があつた。どうせ水増ししてあるだろうから、実際は五千から六千辺りだろう。残り五千以上の敵騎兵をまんまと逃がした計算になる。しかも後を追わせた全騎兵の内、半数が戻らなかった。責任者を処刑して一罰百戒を示そうにもその者がいないではないか。

もう一つは我が軍の損害である。今、その報告を待っているのだが、指示を出してからかなりの時間を要している。時間が掛かる、という事は被害が大きい事を表しているのだ。

午後になって、ようやく十二名の将官達が司令部の天幕に参じた。その中で最も年長の男が恭しくお辞儀をする。

「申し上げます。司令官閣下」

「ふん、聞いてやる」

「我が軍二十五万の将兵の内、今回の敵奇襲で消耗致しました数は十万……」

「何だと！」

「十万でございます」

「十万だあ？ 敵は一万そこそこしかいなかったのに、それで十万の兵を失ったのか」

「味方の遺骸を検めましたところ、その数は約三万五千。失った騎馬五千と合わせて四万の兵が害されました」

「残りの六万は！」

「逃げ出した模様です」

「何？ 逃げたのか？ こんな荒野のどこへ逃げるといふのだ」

「調査致しましたところ『この世の楽園』へ行ったとか」

「樂園？ そんなものが近くにあるのか？」

「さあ、分かりかねます。何でも丘陵地帯の山麓にあって、この時期『醜男と醜女の祭り』が行われているらしいのです」

禿げ鼠は怒り心頭にきた。

「馬鹿者どもめ！ 物見遊山でここまで攻め上ったのではないのだぞ」

「奇襲に遭い、我を失ったのでしょうか」

「他人事の様と言ふな。愚か者が」

「はあ」

「それで貴様らはどうするのだ」

「まずは失った物資を補充せねばなりません」

「兵糧も失ったのか！」

「はい、残る将兵の数は十五万と少なくなりましたが、食糧は四分の三が焼かれてしまいました。節約しても二十日で空になります」

「ここまでの地域は我々の勢力下だ。民草から接収すれば良からう」

「そう仰いまして、この荒れ地は元来、人が少ない場所です。海辺の街はそれなりの規模でございましたが、住民達は物資と共に船を使って逃げ出したそうです」

「無人になつてしまったのか？」

「いいえ、元アスマン人の商人達が残っています」

「其奴らから奪え」  
そやつ

「奪ったところで僅かな物しかないでしょう」

「では見せしめに殺せ」

「誰に見せるのでしょうか？ もうバルバーレの民はおりませぬが」

「ええい、どうしろというのだ」

「その商人が、兵糧を集めても良いと言っているそうです」

「おお、それを早く言わぬか。海辺の街の全ての土地をやるから、それで購えと伝えろ」

「ご存じでしょうか。アスマン商人は金貨か金そのものでしか取引を致しませぬ」



金貨を手放せというのか。司令官自身が戦費から苦心して抜き取った余剰金である。この戦争に勝利せしめ、且つこの資金を持ち帰れば、現在空席である大司教になる事も夢ではなかったのだ。しかし戦に勝てるのなら、まだ裏金を作る機会はあるう。

小姓に命じて、しぶしぶ金貨を各隊に与えた。総額二万ユーロである。これで手持ちが空になってしまった。

眼前にずらりと並ぶ無能な将官達。この場で全員の頸を切り落としてやりたいが、ここは我慢してやる事にする。逃亡兵は全員を殺したと嘘の傳達をなす事を命じ、解散させた。

まあ良い。まだ十五万もの将兵が残っているのだ。夜襲に耐え、逃げ出さなかった精鋭達とも言える。未来は明るい。禿げ鼠はそう結論付けた。

第一師団は忙しく働いていた。

王女の第二師団の保護、峡谷の監視、それに山崩れの調査をこなすにはならない。特に衛生兵が足りない。実際に戦場に赴いて、それで初めて分かる事の何と多い事か。ウティホは、こんな時に妻がいてくれればと思わずにはいらなかった。とは言っても、指示を出してしまえば指揮官のすべき事はない。報告を待ってただ呆然と行路の先を眺めていた。

ふと視線の先に隊商キャラバンが入る。行路を外れ、山辺から下ってきている。この地、この時期にしては珍しい。しかも大規模なものだ。御者台でひよろりとした男が手を振っている。

「ジョクーか！」

ウティホは立ち上がった。そしてすぐに後ろを向いた。涙を拭う為である。

家族が天幕に集う。ウティホとノンモ、それにジョクーの三人である。

「二人とも、よく無事じゃったな」

「当たり前さね。あんたを残して死ねないからね」

「おお、そうだとも。それで、お勤めは無事に果たしたのか？」

「火薬の事かい。勿論手に入れたよ」

「でかしたぞ。それをどう使うか、王都の司令部に聞かねばならん」

「聞く必要はないさ」

「何故じゃ？」

「使ったから」

「全部をか！」

「馬鹿を言いでないよ。ちゃんと残してあるさ」

「どれだけじゃ」

「ジョクーや、幾ら残っているんだい？」

元山賊は肩を窄め、両手で小さな丸を作った。

「何と、それっぽっちか。儂は王にどう報告すればよいのじゃ」

「知らないね。あたしは使うなど言っただよ」

ジョクーが夫婦の間に口を挟む。

「峡谷で山崩れがあつたのをご存じですかい。あれをやったのは俺達ですよ」

「何と！王妃と多くの騎兵を救ったのはお主らだったのか。これは大手柄じゃ」

「あたしが指示したんだよ。そうしろってね」

「お前は賢い妻だと思っていたが、ここまで利発な女丈夫とまでは思わなかったぞ」

手を握り合う二人。

ジョクーは思った。夫婦って素晴らしい。でも端から見れば馬鹿馬鹿しい。

事の次第を伝えられた王都司令部は歓喜した。キリムは収集した情報を整理している。

「良かったね、王女が無事で。それに大した戦果だよ」

「うむ」

威厳を保ちたい王であつたが、どうしても目尻が下がってしまう。  
「そのお陰もあつて、ぎりぎり間に合わないと思つていた作戦が採れそうだよ」

「それは？」

「今現在、第一師団が布陣している峡谷出口で決戦を挑む事だよ。この場所以上にこちらが有利な戦場はないと思う。予定ではとつくに王都まで攻め上られていても不思議じゃない時期だけれど、まだ半月程は山崩れの向こう側に閉じ込めておけそうなんだ」

婆様が会話に加わる。

「それでは婆の隊を前進させようかね」

「うん、そうしてよ。良いですか、王様？」

王は頷き、婆様は伝令を走らせた。

「さてさて、この婆が敵と真つ向勝負をする事になるとはのう。この歳になつても未来は驚きに満ちておるわいな」

「でも、それで勝てるかなあ」

「峡谷の出口に布陣するのであれば、そうなつてしまふぞえ」

「うん。それはそうだし、勝機だつてあるのだけれど」

「残る敵の数は？」

「約十五万だそうだよ」

「これは景気良く減らしたもんじゃな。その上窮屈な場所で決戦を挑めるのじゃから、数の違いは無視してよいじやろうて」

「うん。峡谷にある行路の幅はかなり狭くて、大挙して一斉に突進する飽和攻撃はできないと思う。同数の兵で横隊を組んでぶつかり合えば、兵の練度と装備の差で何とか対応できるかも知れない」

王には不安が残る。

「しかし、それでも我が方が不利に違いない。双方が徐々に兵を失い、結局は突破されてしまふのではないか？」

「やはり奇策が必要じゃな」

婆様が明るく応じた。

「何だか嬉しそうだね」

「折角、種を蒔いたのじゃ。その実を味わいたい」

「術の事？」

「そうともさ。お前様のな」

少年は、このまま行けば術を使わずとも済むと思っていた。あれは単なる博打なのだ。でも、状況次第ではそれに頼らざるを得ないだろう。

ユルグの先遣隊は眼前を塞ぐ土塊に驚いた。谷底の行路上に突如として壁が現れたのだ。急ぎ戻って司令官たる禿げ鼠に報告すると「ならば、それを退かせ」と面倒臭そうに言われてしまった。それができるなら誰も報告なんてしないのに。

ユルグにも知恵者はいる。退かせと指示されて、その作業を黙々とこなすばかりが部下の仕事ではない。要は兵を進めさせられれば良いのだ。土砂を均し、踏み固め、ようやく道らしきものを作った。二十日を要したが。

ユルグ軍はまた進軍が可能となった。ただ、敵に時間的猶予を与えたらしく、峡谷出口にはバルバーレ軍が集結しているだろう。ついに両軍が正面から角突き合わせる時がきたのだ。

一月の末。峡谷出口での最初の火蓋が切られた。ユルグ軍が陣から一部を割いて突撃隊を編成したのだ。歩兵の横隊を幾重にも重ね、整然と前進してくる。

バルバーレ側の最前線には婆様の第三師団が据えられている。敵の矢を大楯に隠れてやり過ごし、今度はこちらが矢を放とうとしている。

指揮官は最後方の小高い丘に位置し、補佐役の将官に戦況を確認させている。

「敵さんの弓矢は止んだかえ？」

「はっ、ようやく矢数が尽きた様です」

「敵の指揮官は相当な間抜けらしいな。間合いも分からぬとはの」

「初戦の相手には不足ですか？」

「いや、丁度良い。準備運動にはなるじやろつて」

「敵は整然と前進してきます」

「駆け足でかい？」

「いえ、ゆっくりです」

「では、こちらもゆっくりと相手をしてやろつか」

敵の先頭が射程に入る。

「まだじゃ。まだまだ」

敵の先頭は木製の楯を掲げつつ、間合いを詰めてくる。

「弩隊、弓引け」  
おおゆみ

補佐官が指揮杖を掲げる。弓兵は弩の先端にある足掛かりを踏み付け、両手で弦を握る。そして力を込め、倒れんばかりに身体を反らし、全体重を乗せて引き上げた。弦は掛け金に固定され、ぎちぎちと音を立てる。

「狙え」

千の兵が一齐に弩をもたげる。そして各々が正面の敵を見据えた。  
「放て！」

指揮杖が振り落ろされた。引き金が引かれ、千の矢が真っ直ぐに飛ぶ。鋼で拵えた、返しのない矢が敵の木楯を突き破り、兵士の身体にめり込んだ。

「次の弓隊、放て」

無数の木矢が放物線を描く。敵の頭上に降り注ぎ、革製の兜に当たる。頭部に傷を負った兵士が派手に血潮を吹き出した。その血が目に入り、悲鳴を上げている。

二の矢三の矢と連べ打ちに矢の雨を降らせ、かなりの敵を討ち取った。

補佐官が告げる。

「敵は駆け足に移りました」

「それは天晴れな闘志じゃな。ならば弓隊を下がらせろ。長鎗で応戦じゃ」

鎧隊同士の戦闘が始まった。ユルグ軍の装備は木の棒に鋼の穂を付けた槍である。胸当ては革製。一方、バルバーレは柄も鉄でできた鎧で応戦している。長さも違う。胸当ても銅製で頑丈だ。

戦う前から結果は見えていた。バルバーレの圧勝である。

本来、味方が一定以上の損失を得たならば一旦引き上げるのが上策なのだが、ユルグは最後の一兵まで戦った。その理由は最後に明らかとなる。

「最後方に金属の甲冑と三叉の鎧を備えた兵がいます。引き上げる様子ですが」

「それはユルグの近衛じゃよ。兵士が逃げ出さない様に後ろで脅していたんじゃない」

「惨い事をするものです」

「まさしくな。それでも勝ち勝ち。素直に喜ぶでしょう」

第三師団は勝ち鬨を上げ、全軍の士気を鼓舞した。

「後始末を忘れぬ様に」

お婆はそう言って丘を降りた。工兵を繰り出して、敵味方の遺骸を撤去し、戦場に散らばった矢を回収させる。特に鋼の矢は敵に渡せない貴重な武器なのだ。

国王は都を離れ、この地に移っている。最後方にある一際大きな天幕がそれだ。婆様が戻り、王が出迎える。

「完勝、見事であった」

「いや、敵にとって初戦は小手調べ。これから本番じゃろう」

「そうなのか？」

「敵の兵数が少な過ぎる。本来ならば倍は必要な筈じゃ。わざわざ負ける戦をして、その代わりにこちらの手の内を探ったんじゃないよ。次か、次の次辺りが大攻勢じゃろうて」

この老婆の何と冷静な事か。勝って浮かれない。負けて沈まない。これが指揮官に大切な資質なのだろう。自分にはそれがあるのだろうか、と王は考えていた。

ユルグ軍司令部。禿げ鼠は近衛からの報告に耳を傾けている。

「バルバーレは蛮族と聞いていたが、きつちりとした戦い方をするではないか」

「次の戦闘は如何なさいますか」

「敵が正攻法ならば、こちらは荒つばいやり方をすれば良い」

「それでは例の……」

「いや、あれには準備が必要だ」

「では次戦は明日になさいますか」

「そうしたいところだが、そうも言っておられぬ。次の隊を編成し、もう一度攻めさせるか。それで時間を稼いで、最終決戦の準備をする」

新たな隊の将官が呼ばれ、次の戦闘の指示がなされた。対応を事細かに言い付ける。

この時、司令官には前進を急ぐ理由があった。

兵糧が足りないのだ。備蓄は底を突き、新たに入手した食料はろくでもない物ばかりであった。芽が大きく育った馬鈴薯とか、面倒な毒抜きが必要な魚の干物とかである。そして米だ。その呪うべき食べ物。敬虔なユルグ教徒ならば口にする筈もない。すぐさま焼却させたが、空腹に耐えられず口にした者もいた。そんな者どもには厳しい罰を与えた。当分腹を減らさぬ様にと石塊をたんまりと食べさせたのだ。当然ながら苦しんで死んで行つたが、それでも生き残つた者はそれを以つて悪魔の化身と断じ、火刑に処した。

兵糧がなければ兵は動かない。軍務が本業ではない禿げ鼠とてそれは知っている。当座の凌ぎにと騎馬を屠殺して喰わせた。どうせ働きの悪い騎兵どもである。一介の歩兵となつてその苦勞を味わえば良いのだ、と捻くれた平等意識を発揮させて。

第三師団に代わり、第一師団が前線に配置される。

ウティホは考えていた。先の戦闘で敵は多くを学んだだろう。そ

して対応してくる筈だ。しかし、こちらとて士気は上がっている。

ノンモとジョクーは王都にいる。キリムとマウ・リサもだ。これ以上敵を進軍させてはならない。彼らがいる都を蹂躪させて堪るものか。我が兵士達はきつと働ける。これまで散々演習してきたではないか。頭の中でそう叫んでいた。

婆様が指揮を執っていた丘で仁王立ちするウティホ。眼前には二万余の将兵達が整然と並び、峡谷の奥を凝視している。そして、各隊の佐官だけが自分を見詰めている。

谷底の行路に黒い一団が現れた。敵の第二陣が進軍を始めたのだ。前回よりも明らかに数が多い。倍はあろうか。

ウティホは指揮杖を右に掲げ、「敵見ゆ」を知らせた。

ラッパが戦闘準備を命じている。将官ががり立てる。先頭にいる弓隊は弓矢の準備をし、大楯の透き間から前方を伺っている。

敵は行進から駆け足に移った。

「おおゆみ 弩、用意」

ウティホの命令に従い、弓隊は大楯から身を乗り出す。

「弓絞れい」

指揮杖を掲げた。敵は一斉に前進速度を早める。

「放て！」

指揮杖が振り下ろされる。千の鉄矢が放たれ、しゅう、と風を切る音を立てた。

敵の先頭は今回も木の大楯を掲げて前進している。但しそれを二重にしていた。鉄矢は一枚目の楯を突き破り、二枚目の楯に食い込んで止まる。単純だが効果的な対処法だ。

しかしウティホは動じない。この程度ならば予測の範囲なのだ。そして新たに命じる。

「スリング 投石器を出させろ」

弓隊は各自の弓を置き、皮と紐でできた投石器を用意する。弾丸には鉄球を用いる。皮の部分に鉄球を乗せ、両端から伸びる二本の紐を合わせて握る。



「撃て」

投げられた鉄の玉が放物線を描いて飛翔した。敵の頭上に落下し、兵士を負傷させるか、もしくは大楯を割った。地に落ちた玉はずんと音を立て、めり込んでいる。

おあゆみ  
「弩、斉射せよ」

指揮杖がぶんと振り下ろされた。ややまばらに矢が飛ぶ。今度は有効に敵を殺傷している。鉄球で楯を割られた兵士は胸を貫かれ、更にその後方の兵までも傷を負わせた。

敵の進行はやや速度を落としたが、それでも間合いは近づく。ウティホは弓隊を下がらせ、鎧隊を先頭部に置いた。

敵は今になって矢を放ってくる。至近であるし、その数が多い。身支度に助けられて傷付いた兵士は少ないが、それでも一定の損害が出てしまった。

怒号と地響きが迫る。敵は間近で短槍を投げた。千本の槍がバルバレー兵の顔を狙う。微動だにしない事で存在を誇示していた近衛兵達である。敵にすれば狙い易いのであったろう。一気に千近いの味方が減殺されてしまった。

敵味方が槍を失う。こちらは殺されて、相手は投げ付けてである。そして剣同士の戦闘となった。

第一師団のラッパが全員戦闘を知らせる。最終段階である。ウティホは『まずい指揮をしてしまった』と口の中で独りごちた。

婆様が補佐官を連れて、よちよちと丘に登ってくる。

「戦況はどうじゃな」

「芳しくありませんわい」

婆様の補佐官が言い添える。

「それでも健闘なさってらっしゃいます。剣同士の戦いでは互角以上です」

「そうでなくては困りますじゃ。彼らは剣技が自慢で、鎧すら持ちたがらなかった兵ですから」

こちらが押されつつあったが、ようやく前線が固定された。こう

なれば後は体力勝負。剣を振り上げられなくなった方が負けである。

双方が実力以上に頑張っている。小一時間が経過し、互いの剣がぶつかり合う音が弱々しくなってきた。

「さて、そろそろこの婆の手助けが必要じゃないかえ？」

「お願いします」

ウティホはそれを素直に求めた。

前線の配置を変える。第四師団の一部が中央に割り込み、戦列をコの字型に膨らませる。当然、敵はその中に躍り込んだ。

「さあ、これで終いじゃ」

婆様は見えない目で勝利を見定めた。

ウティホは攻勢に転ずる事を命じた。ラッパが派手に鳴り響く。

コの字に膨らんだ戦列の出口が閉じられ、敵を包囲した輪が一気に萎む。今回は戦闘に参加しなかった敵近衛兵も封じ込まれ、逃げ出せないでいる。

そして輪が小さくなり、消えた。快勝である。

ウティホは空を見上げた。日が傾きつつある。今日はこれで終わりであつて欲しいものだ。誰もが休息を欲しているのだから。そう心の中で呟いた。

夜。酷く寒い。バルバーレの兵士達は泥の様に眠っている。見張りに立っている兵士も重い瞼に難渋している様だ。無理もない。つい先程まで戦闘をしていたのだ。力を出し惜しみながら殺し合いなんてできない。

ウティホは今夜も眠れそうにない。それでも毛布にくるまってじつとしている。明日はまた戦が待っているのだ。心臓を氷に漬ける様な、胃を両手で絞る様な戦闘が。

ホーホーと夜の猛禽が不気味な声を出している。山積みになされた敵味方の亡骸をついばんでいるのだろうか。

深夜。伝令兵がそつと天幕に入ってきた。

「代理指揮官殿、王がお呼びです」

ウティホはすつくと身体を起こした。

「どこに伺えば良いのじゃ？」

「見張り台に。婆様も一緒です」

新らしい中着に袖を通し、外套を羽織る。そして日中に指揮を執っていた丘に登った。その頂上では数名が峡谷の奥を凝視している。王が労いの声を掛けた。

「ご苦労」

「いえ、職務ですから。しかし何事でしょうか」

婆様が代わりに説明する。

「何やら臭うんじゃ」

山から海へと吹き下りる風が、峡谷の向こう側からこちらへと通り抜けている。

「普通の臭いじゃと思いますが」

「それが妙なのじゃよ。この季節の夜風は雪山の匂いしかせんものじゃ。なのに荒れ野の地風の様に埃りが混じっておる」

「そう言われれば。しかし昼間にあれだけの戦をしたのですから、埃り臭くなるもの道理ではありませぬか？」

「それだけじゃない。何やら酸っぱい様な、嗅いだ事のない臭いがしておるじゃろう」

ウティホは腕をまくって中着の袖を出し、鼻を宛がって臭いを嗅ぐ。こうやって違う臭いを嗅いでおけば、慣れてしまった身の周りの空気でも繊細に知覚できるのだ。そして嗅覚に全神経を集中させ、ゆっくりと風を吸い込んだ。

「おお、これは……この臭いは嗅いだ事があります。四年前の戦争でユルグ兵がさせていた体臭に近い」

王はその言葉に総毛立った。

「まさか……」

お婆は伝令に指示を出し、峡谷の奥へと索敵を出させる。

「敵もどうして動きが速い。互いの総力戦が始まって半日しか経つ

ておらぬのに、もう最終決戦を挑むつもりの様じゃな」

王は気付いた。

「それでは四年前のアスマン戦争と同じく、この地に呪いを掛けたのか」

婆様が応える。

「呪い？ そうではないさ。大量の薬を焚いたのだろ。連中は護摩とか呼んでいたが」

「その護摩とやらが土地を腐らせるのか」

「土地は腐るものじゃない。自分でも信じられない程長く生きてきたが、腐った土地なぞ見た事がない。腐るのはヒトじゃよ。人を生き腐れさせる薬が護摩なんじゃ」

「生きたまま腐るのか。おぞましい」

「そうなつてしまえば人は生き人形になる。そして血肉を欲しがる獣の心が宿り、命令のまま、自らが動けなくなるまで殺し続ける狂獣になるんじゃ」

二人の話を聞きながら、ウティホは歯を喰い縛っていた。

悪夢が蘇る。しかし、同じ結末にはさせられない。今度は、譬え自らの命が燃え尽きようが、あの悪魔の行進を止めなくてはならない。自分にそう言い聞かせた。

索敵を命じられた騎兵が軍馬を飛ばす。

静寂の中でただ、自らの足音だけが聞こえている。その音はかつかつと峡谷に響き渡っているが、兵は頓着もせず馬を駆けさせた。一路、敵軍の陣地に向かって。

突如、馬が嘶いた。襲歩から急停止し、両の前足を振り上げる。

騎兵は馬の制御に腐心したが、なかなか落ち着いてくれない。

「どうどうどう」

手綱を引き絞り、頸を撫でてやる。そして前方を見た。天上から僅かな光を受け、黒い塊が見える。それは少しづつ前進している様だった。

目と耳を凝らす。低い唸り声がする。一人二人ではない。大勢のものだ。

馬を常足で前進させる。徐々にその姿が見えてきた。唸り声の主は下を向き、その頭をだらしなく左右に振り、足を引き摺って歩いている。

一步、また一步と。

先頭の一人がこちらに気付いた。闇にその両眼だけが光る。そして獣の如く吼え狂った。

闇の中に二つだけ光っていた目が、一度に数万の数になる。そして地響きを立てて迫り出した。騎兵は鞭を入れたが、馬が固まって動かない。腹を蹴り向きを変えさせ、再度鞭を入れた。

ようやく走り出してくれた。自分は何を見たのであろうか。この有様を何と報告すれば信じて貰えるのだろうか。そう考えながら猛然と自陣を目指した。

司令官たる王は索敵の報告を受けている。騎兵の態度は毅然としていたが、その声は震えていた。

「婆様、どうやら其方そなたの読みが当たったらしい」

「今度ばかりは外れであって欲しかったがのう」

総員起しが命ぜられた。ラッパ卒がけたたましい曲を奏でる。将兵達は深い眠りから叩き起こされ、足をもつれさせながら整列した。ウティホが進言する。

「敵との距離はまだあるでしょう。水と食事を与えてやって欲しいのじゃが」

その願いは受け入れられた。非常食の干芋と黒砂糖の丸、それに水袋が配られる。兵達は半ば眠りながら口に入れ、咀嚼した。

最前列は婆様の第三師団、その後衛に第四師団が布陣された。ウティホの第一師団は最後方で荷駄を守っている。名誉な事ではないが、消耗が多い隊なのでそれも致し方ない。

婆様がやんわりと願い出た。

「王よ、この戦いはどうなるか全く予想が立たぬ。一旦、王都に戻られては如何じゃな」

「それはできぬ」

「何故じゃ？」

「理由はない。私がここに居ない方が戦い易いのかも知れぬが、それでもここを離れぬ。王としての責任感でも、我が軍を勝利に導く為でもない。ただ、居たいのだ」

その言葉に婆は笑った。先代の一粒種として我が儘に育てられ、身体ばかりが大きくて知恵の足りない王子の頃と何も変わっていない。その少年は何でも持っていたが、本当に欲しいものは何一つその手になかった。親友も喧嘩相手も、弟妹もない。孤独に苛まれて爆発もしたが、それでもやって良い時と場所を心得ていた。心根は優しい子なのだ。

彼の孤独に気付いていたのは婆様ぐらいなものである。彼女は城内で唯一、序列の埒外にある。王や王子にぞんざいな口を利いても咎められない。王子の悪戯に対して体罰を与えられる無二の人物であつたのだ。だからその寂しさも知っていた。

自分の事を悪し様に言い、ゲンコツを見舞う彼女の事を王子は気に入っていた。他の子供達と平等に扱ってくれていると感じていたのだ。やがて王子にとって何でも打ち明けられる相手となる。書庫に行つて彼女と逢えば、少しは清々とした気持ちを取り戻せた。

家族のいない婆にとつては孫にも近い存在であつた。ちょこちょこ訪れては泣き言を漏らし、最後には笑顔を見せて帰る。可愛いと思ふにはそれで充分だ。

今でも王の事を可愛い孫だと思っている。大きくなって我が儘を言わなくなつた王が、今、駄々を捏ねている。この婆に戦に勝てと言っているのだ。そしてその様をしかと見させてくれと。

久しく忘れていた何かが込み上げる。これが『氣』なのだろうか。少しは若くなつた気分だ。そして兵士達に下知を飛ばす。

「よいか、敵は狂っておる。一対一で戦わねばならぬとか、正々堂々とか、そんな考えは捨てるのじゃ。敵の背中を狙え、臆を切れ、目を潰せ、二人で一人を屠れ、油を撒いて火を放て。お前達の後ろには王がいるのじゃぞ。今戦わずしていつ戦うのじゃ」

四万の将兵が鯨波をつくる。その声は王都まで届かんばかりに響いた。

人々の怒号が聞こえる。鋼同士がぶつかる高い金属音。五十隊列程前の先頭部では戦いが始まったらしい。二個師団の中程にいる一兵卒には今がどうなっているか分からない。ただ隊長の声に耳を澄まし、命令を待つばかりだ。

やがて周りがざわざわと騒がしくなった。小声で話すのは止めて欲しいものだ。不安が募るばかりではないか。

剣戟の音が近くなった。どうやら敵が近い。一つ前の戦列にいた連中が左右に分かれ、視野が広くなる。眼前に敵が見えた。傷付いた左腕をだらりとさせ、腹に矢を深々と刺したまま立っている。目が赤い。歯を剥き出しにして、何やら吼えている。

手柄を挙げる好機だ。剣を両手で持って振り上げる。

次の瞬間、どうしてだろうか、仰向けに寝転がってしまった。星々が瞬いて見える。

立ち上がろうと首を起こした。すると、さっきの奴が乗っ掛っているではないか。こっちの顔を見ようとせず、懸命に私の腹に剣を突き刺している。

頭を横に倒すと、同じ隊の連中が遠巻きに輪を作っている。

新兵が震えながら、それでも剣を向けている。

そう、それで良いんだ。剣の構え方、教えた通りにできているじゃないか。

そんなに泣かなくても良いのだよ。もう叱ったりしないから。

死は、そんなに苦しいものでもないのだから。

通常戦とは全く違う戦いが行われている。敵の数は十万を超しているだろう。その全てが狭隘をもともせず一気に雪崩れ込んできたのだ。敵兵士は好き勝手に攻め入り、力尽きたところで倒れる。それを全員で行っている。しかも一人一人が異様に強い。目が潰されようが、腕を失おうが関係ない。それに猿まじうの如く素早く動く。八十の横隊を擦り抜け、指揮官のいる丘まで突出してきた兵士もいる。婆が意を決して切り出す。

「王よ、別れを言わねばならぬ」

「それはまだ早い」

「いや、この前線はもう保たないじやろう。王都に戻りなされ」

「私はここを離れない」

「駄々は止めなされ。またゲンコを喰いたいのかえ」

「・・・・・・・・・・」

「そう、良い子じゃ。お前には守るべき娘がいる。それにまだ若いのじゃから、新しい后を貰うて子を成す事もできるじやろう」

「私の後は一人だけだ」

「そうか、死んだ者に操を立てるのも良かろう。じゃが、それとて生きておらねばできぬ事。生きて、せめてこの婆と同じ歳になつてから黄泉国へこい。分かつたな、坊よ」

王は丘を降りた。心を岩の様に堅くしていたが、幼い頃の想いが去来して止まなかった。

婆様は自分を補佐し続けてくれた副官の任を解き、その者を新たに第三・四師団の指揮官とした。撤退戦の手筈を事細かに指示する。そして一人、丘に残った。

師団の將兵達は、混乱しながらも撤退を初めている。殿が良い働きをしているらしい。見えずともその程度は分かる。

獣達の唸り声が近づく。この小さな存在を見逃さないとは大した嗅覚だ。敬意を表しているのだろうか。周りを取り囲んでいるのに飛び掛かってこない。



はたと気付いた。此奴らの心は法術で括られている。暗示を掛けられる段階で、術者を尊重する様に言い含められているのではない。平民達には法士と術士の違いが分からない。もしそうならば、譬え狂っていても術は充分通じそうだ。

この丘は暗いだろうし、声が届く範囲は限られている。自分の術には限界があるだろう。しかし、キリムならば舞台を整えられる。きつと、護摩で堅く縛られた暗示を解き放てる。

ここで果てても、無駄ではなからう。

「聞け、有象無象の者どもよ。我が心臓を神々に捧げ、貴様らに苦痛と死を与えん！」

愛用の杖を放り投げ、懷から出した小柄を両手で掲げた。そして躊躇いもなく自分の胸に突き立てる。術をより効果的にする為に叫び声を上げたかったが、適わなかった。

脳裏に笑顔が浮かぶ。懐かしい王子の笑顔。純粹で、無邪気な。目癢いた目にも眩しい程に映っている。そして、すうと暗闇が訪れた。

丘を取り囲んでいた兵士達は我に返る。それは一瞬であり、すぐに胸を締め付ける様な痛みに襲われた。呼吸が止まり、ぱたりと倒れる。しかし、その数は僅かなものであった。ユルグ軍全体の数からすれば、ほんの誤差程に過ぎない。

## 第十章

翌々日、王都南岸の野营地。

国王執務室にあった全軍司令部はその地の天幕に移されている。

キリムはマウ・リサ、ジョクー、ノンモらとそこに詰めている。

深夜になって、国王を守りながら第一師団が到着した。天幕に王とウティホが合流する。マウ・リサは不安な表情を押し殺して、王のところまで駆け寄った。

「ご無事で何よりでした」

「今は無事でも、生きて朝日を拝めぬかも知れん」

「どうしてでしょうか」

「敵の攻勢は凄まじい。第三・四師団は瓦解した」

「それでは、婆様は……」

「不明だ」

新たな伝令を聞き取っていた少年が会話に加わる。

「婆様は泉下の客となりました。残念だけれど……」

「そうか」

王はそう呟いて、口をつぐんだ。

ウティホが代わりに話す。

「敵が近づいておる。婆様の師団が撤退戦をして時間を稼いでくれておるが、間もなくここに押し寄せるじやろう」

キリムは気持ちを固めた。これ以上、誰も殺されたくない。

「第一師団と第三・四師団は王都に入って下さい。今度は第二師団と第五師団で当たってみます」

王が残る覇気を振り絞って聞く。

「勝算はあるのか？」

「保証はできないよ。でもこれに賭ける。王様は籠城戦の準備をして下さい」

「いよいよ博打の時がきたって訳かい？」

ジョークが口を挟んだ。

「そうだよ。当然、ジョークも付き合ってくれるんだよね？」

「またもや要らぬ口を利いてしまったらしい。元山賊は肩を竦めて承諾した。」

石畳の行路が南へと続いている。

少年は思い出していた。十ヶ月前、この路を通って王都に登ったのだ。もう遠い昔の様に感じる。旅をして王女に出逢い、王と、婆様に出逢った。そしてこの男もだ。

「このこんもりとした盛り土がペテンの舞台かい？」

「うん。急拵えだけれど、高さもあって充分じゃないかな」

この辺りの赤土を運んで小山にしただけのものだ。その周りに大松明が幾つも設置され、ぱちぱちと燃え盛っている。

「で、俺は何をすれば良いんだい？」

「口上を述べて欲しい。大声で、効果的なヤツをね」

「それだけか？」

「成功すればね。失敗したなら僕を助け出して欲しいんだけど、難しいだろうね」

「そいつは難しいなんてもんじゃないぞ。空でも飛べれば別だろうが」

「じゃあ、一通り口上を叫んだら逃げても良いよ」

「良いのか？」

「一緒に死んでくれなんて言えないからね」

「そう言われると何だか寂しいなあ。お前さんだってそこまでの義理もなかるうに」

「バルバーレに義理はない。でも、奴らに貸しがあるんだ。どうしても返さなくてはならない、でっかいやつがね」

「そうか、じゃあ俺も付き合っよう」

「良かった。そう言ってくれると思っていたんだ」

ジョークにも理由はある。積年の恨みは、何も、少年の専売特許

ではないのだ。

婆様の師団が見えてきた。でも彼女はもつけない。獅子に追われる羚羊の群れの如く、わらわらと逃げ惑っている。あの飄々とした兵士達がぼろ雑巾の様だ。

殿の隊が懸命に応戦している。手筈通り、第五師団が割って入って撤退させた。

敵の軍団が間近に迫る。二人は小山に駆け上った。少年は途中足を滑らせて手を突いたが、何とか無事に頂上まで這い上がった。高い場所からは敵の様子がよく覗える。十万と聞いていたが、七万強ぐらいにまで減っているだろうか。

バルバーレの全軍は中州へと撤退した。代わりに黒い集団が小山の周りを埋め尽くしている。確かに四年前のあの獣達だ。だらしなく口を開けて、涎を流れるがままにしている。

ジョクーは夜の空気を肺一杯に詰め込んで、喉が許す限りの大声で怒鳴った。

「聞けい。道理に昧き者どもよ。哀れで悲しき民草よ。今や大陸で唯一無二の術者となったアスマンの幼き王が、貴様らの心の奥底に烈々たる呪いを注ぎ込まん。その暗き思念を浴びよ。アスマン火山の火の如き怒りを、マンジャロウの山々の如く重き苦痛を、海淵わたつみの如く深き憂いを、その身にしかと刻み付けろ」

ジョクーはそこまで怒鳴り、座り込んでしまった。あらん限りの力で声を張り上げ、貧血で目眩を起こしている。

『さあ、これで幕が開く。一世一代の茶番の始まりだ。悲劇となるか喜劇となるか……』

元山賊はそう思いながら、観客を決め込む事にした。

少年は意識を集中しようとしている。

松明が明る過ぎる。自分の過去を思い出すには似合わない。

両手で瞼を塞いだ。

闇が少年の心を覆う。そして、贅として『記憶』を神々に捧げ始めた。

今ばかりは、婆様の作った理屈が本当である様にと願いながら。

母の姿が浮かぶ。いつも思い出すのは本を読んでいる姿である。髪を結い上げ、涼しげな白い服を着て、明るい庭で本を読んでいる。風が吹き渡り、裾をゆらゆらとさせる。そんな後ろ姿を見るのが好きであった。

僕には父親がいなかったが、それを悲しむ事はなかった。誰が父なのか、特に知りたいたとも思わない。母がいて、本を読んでいた、時々お話を聞かせてくれれば充分だった。

今にして思えば、随分と贅沢な暮らし振りであったと思う。

石造りの大きな邸宅に親子二人、あとは女中と三人で暮らしていた。静かな山辺の一軒家。緑に囲まれ、街並みを一望できる。特に夕日が素晴らしかったのを憶えている。

母は時折ふつと姿を消して、幼い僕を不安にさせた。幾ら女中に慰められても泣き止まなかったらしいが、理由も告げずに出て行く母が悪い。でも戻ってきて抱き締められると全てを忘れてしまうのだった。そして、その度に新しいお話を聞かせてくれた。

母と女中以外の人と逢うのは稀であった。

月に一度は大きな男の人がやってきて、遊んでくれていた。高い高いをしたり、鞠遊びを教えてくれたりした。やや乱暴に頭を撫でられ、泣いてしまう事もあったが。

それに母よりも少し若い女性が訪れる事もあった。家臣を何人も

引き連れてくるので騒がしくなるのが嫌だったけれど、お土産に貰う甘いお菓子が好きだった。その人も抱き締めてくれたりキスしてくれたりして、母と同じ臭いがする人だと思っていたものだ。

それから少しの時が経ち、僕も少しだけ成長した。背はあまり伸びなかったが。

母は長い旅に出た。もう泣いて女中を困らせる事はない。母がいなくても沢山の本があるし、僕を気遣って、例の二人が引つ切りなしにきてくれている。そして僕を「賢い子だ」と褒めてくれた。

蔵書をすっかり読み終えてしまつて、どうしようかと思つていと、母が帰つてきた。寂しくないつもりだったが、再会するとやはり泣いてしまつた。

母はいつも通りに僕を抱き締めて、旅の思い出を話してくれた。それは奇妙な話で、盲目のお婆さんが大活躍をする話であつた。

そしてまた、普段の生活が始まつた。母は庭で本を読んでいる。僕はその後ろ姿を見ている。夜になれば一緒に寝台で寝る。寝物語を聴きながら。

それは初めて見る人達だった。三人組で、商人風の衣装を着ている。不作法にも夜遅くになつてから来訪してきた。痘痕だらけの顔をして、酒臭い息を吐いている。一通り乱暴な口を利いて、やがて刃物を取り出した。

母は服を切り刻まれ、悲鳴を上げた。四つ這いにさせられて、男にのし掛かかられている。母の涙を見たのは始めてだった。僕は母の名を呼び続けたが、男どもに煩さがられ、乱暴に蹴飛ばされた。連中は代わる代わる母にのし掛かり、そしてその白い頸に刃物を差し込んだ。

赤い血が肌を伝い、服を黒く染めている。

母は動かなくなつた。口を開けたまま、目を見開いたままで。隠れていた女中が走り寄り、倒れていた僕を抱き上げて納戸に押

し込めた。

僕は暗い納戸で耳をそばだてていた。女中が悲鳴を上げながら逃げ回っているのが分かる。やがてその声も途切れ、家を壊す音が聞こえ出した。僕を捜しているのだろう。もう見付かっても良いと思っていた。生き存えても、大好きな母はもういない。

煙の臭いがする。奴らが火を付けたらしい。それでも僕は、座ったまま動かずにいた。

やがて、かしゃかしゃと甲冑の擦れる音をさせ、近衛兵がやってきた。簡単に僕を見付け、抱き上げて家の外まで連れ出してくれた。外から見ると、家は轟々と燃え盛っていた。夜陰に赤々と火柱が立ち上っている。

顎髭の近衛兵は僕を見詰めて泣いていた。そして何度も何度も謝ってくれた。彼が悪い訳じゃないのに。

母の葬儀を終え、僕は新しい家族の一員となった。時折遊びにきてくれていた二人の家庭である。

新しい、とは言っても初めての父は国王であった。新しい母は国母であった。王の妻で、お腹を大きくしている。この二人と、それから周りの皆が優しく接してくれた。

父母は忙しかったが、それでも暇を作って遊んでくれる。夜中にうなされると、二人してそっと抱き締めてくれた。

髭の近衛兵も優しくかった。馬に乗せてくれたり、肩車をして何十人も兵隊を引き連れて街を行進したりした。その奥さんも好きだった。二人で台所からお菓子を盗んで、隠れて食べたりした。

時が過ぎ、また少し大きくなった。相変わらず背は低いままだ。

僕も分別の付く年齢になった。それに二人の弟妹がいる。いつも纏り付いて鬱陶しく思う事もあるが、それでも可愛い。

両親は僕の生い立ちを少しづつ話してくれた。

他界した母は父の昔の恋人であり、どうやら父と僕は本当の親子であるらしい。今の母とは血の繋がりが無い。でも、二人の母にはそれ以上に強い絆があった。

二人は親友であり、また師弟であったそう。知識豊富な母に学問を学ぼうと通っていたのが今の母である。実の母には友人が少なかった。またそれを許さない家柄だったとも言える。だからこそ、実母も彼女を頼りにしていたのだろう。

王と実母の間に僕が生まれた。正式な結婚ではなかったが、三者だけはそれを喜んだそう。しかし今の母の両親はそれを喜ばなかった。自分の娘を王妃にするつもりだったからである。それで実の母は身を引く事にしたのだ。母には僕がいて、平穏な暮らしがあった、それで充分だったであろう。

今の母はそれを申し訳なく思っていた。でも内心は嬉しくもあった。いけない事だと思いながらも王を愛していたし、王とてそうだったのだ。

気の多い父の事はどうかと思うが、そんな人なのである。生まれながら王となるべくして育ち、何処か飄々として、誰もこの人物を独占できないであろう雰囲気がある。

母は二人を責めなかった。その母を二人はどんなに感謝していただろう。

僕も責めるつもりはない。再度否運が襲っても、この母と弟妹達は守りたい。もう、できなかった事で悔やみたくはないのだ。

父の事は守らない。あんなに大きいからだから。

そして終に、あの日があった。

記憶の頁を捲る手が止まる。これから呼び醒まされる思い出は、あまりに辛い。

子供の僕にも今がどんな状況なのか理解できた。平和が蝕まれようとしているのだ。



近衛兵の叔父さんは、いつになく厳しい顔をして怒鳴り散らしている。その奥さんも血相を変えて走り回っている。

僕達は王と一緒に宮殿の一番高い楼閣にいた。王妃は二人の幼子を抱いて震えている。父はそんな皆を慰めていた。

城壁が突破されて、味方が押しやられる情景が見えた。王と叔父は手早く打ち合わせ、楼閣の屋根に白旗を掲げた。それでも敵は進軍を止めない。狂っているのだ。叔父は味方を撤退させる為に部屋を飛び出した。

戦場を吹き渡る風が硫黄の臭いを運び、部屋を満たしている。

兵士達の怒号や悲鳴が近づいてきた。

敵の兵士が王の居室に飛び込む。目を充血させ、口から涎を垂らしながら、言葉にならない呻き声を上げている。

王は僕を抱き上げ、衣服室の床に白墨で五芒星を書き記して閉じ込めた。せめてものまじない事のつもりであつたのだろう。

そして剣を抜いて対峙する。王妃達を背中を守りながら。

僕はその姿を扉の透き間から見ていた。

王は何本もの槍を相手に奮戦した。巧みに敵の攻撃をやり過ごしていたが、やがて肩を突かれて剣を落とし、腹を貫かれた。そして床に倒れ、天井を向いたまま動かなくなる。

獣はその様に満足し、踵を返して王妃に襲い掛かった。

母の腕から妹を奪い、髪を掴んで持ち上げ、喉を喰い千切った。

泣き続けていた妹の声が止まる。敵兵はぐにやりとしたその肉塊を窓の外へと放り投げた。

獣はまだ血を欲している。王の残した剣を拾い上げ、母の足元に縋る弟に近寄った。

そして振り下ろす。

王宮をちょこまかと走り回るのが好きだった弟。今は両の足を失い、床を這っている。

そして僅かにに残った意識で母の方に手を向けた。

王妃は弟の手を取ろうとしていた。抱き上げようと。

汚らしい男はそれを制し、母の胸元を掴んで引き下げた。服が裂け、上半身が露わになる。そしてその腹を握り、皮膚を引き裂いた。血潮が溢れ腸がはみ出る。獣は更に手を差し入れて、内蔵を引き摺り出した。母の悲鳴を聞いたと思うが、記憶が欠落している。男は一頻り母の遺骸で遊び、飽きてしまったのか部屋を去って行った。

僕は声を上げる事もできないでいる。

また誰も救えなかった。こうして震えてるだけだ。

近衛隊長たる叔父が駆け戻り、その惨状を見て哭声を上げた。王の意識がまだ残っていた。手を握り、最期の言葉を聞いている。父は家族の末路を理解していただろうか。願わくば知らずに死んだと思いたい。

叔父は隠されていた僕を見付け、手を引き、泣きながら、そして詫びながら城の隠し通路へと進んだ。後ろにはその奥さんもいる。僕は、前も同じ事を思ったなと感じながら、彼が悪い訳じゃないのと思っていた。

悪いのは多分僕だ。何度も誓ったのに、また何もできなかった。

戦場を無音が支配している。

誰も動かない。誰も声を立てない。

そして、ジョクーは全身に鳥肌が立つのを覚えた。

敵が武器を手放し出したのだ。

ぼとり、ぼとりとユルグ兵の手から血刀が落ちる。

やがて、彼らの目に意識が戻り出した。虚ろであった目付きが力の入った眼に変わる。

『ああ、これが本当の……』

男は心の中でそう呟き、連中と同じ様に傍らの少年を見上げた。

キリムはいつしか泣いていた。幼い頃のように。

涙は両の手から溢れ、土汚れを溶かし、頬に赤い跡を作っている。少年は瞼を覆っていた手を離し、まだよく見えない目で周囲を見据えた。

小山の周りは見渡す限りに人で埋め尽くされている。そして、その全員が見上げる様にしてこちらを向いている。

彼らはただ呆然としていた。理解できない理由で母親に叱られている子供の様に。

少年は堅く結んでいた口を開く。

「哀れな者ども、その知恵なき御宝よ。陵辱するはこの国にあらず。振り返れ。振り返って真の敵を誅せよ」

そしてユルグの本陣を指差した。金色に光る甲冑を纏い、最後方でただ驕るだけのユルグ近衛兵達を。

こちらを向いていた兵が、一人、また一人と踵を返す。

そして徐々に後退を始めた。

禿げ鼠は満足であった。秘法は有効に働いている。お陰で一氣に歩を進める事ができた。

馬車の車窓を飾る窓掛けをちらと開けると、水に浮かぶ王都の灯が微かに見えた。長いユルグの歴史の中でも、ここまで攻め上った軍師はいないだろう。このまま敵軍を王都に押しやり、明日は攻城戦になる。そう考えていた。

特別作りの豪華な馬車の中で、小姓に酒を注がせる。熟成された葡萄酒が食道を伝い、冷えた身体に潤いが戻る。人生で、こんなに楽しい夜もない。後少しでこの大陸全てがユルグのものとなるのだ。そして自分の名が歴史に刻まれる。ユルグ教の祖と並び、永遠に賛美を受けるのだ。信徒達は朝に私の名を唱えて一日の始まりとし、夕に私の功績を讃えて眠る。そして、生ける神としてこの私を崇め

る事だろう。

近衛どもが騒がしくしている。水際まで進攻できたのだろうか。ならば、このまま一気に攻め入らせるとしよう。彼奴らに休息は要らない。休む事もできぬ木偶なのだから。

杯に代えて指揮杖を持ち、前扉を潜って御者台に出た。腰を伸ばして周囲を伺うと、どうも様子がおかしい。馬車を守っていた近衛兵がいない。御者も姿を消している。

そして、その代わりに雑兵どもが取り囲んでいるではないか。

大人しい筈の馬車馬が暴れ出す。立ち上がったいた禿げ鼠は地面に落とされてしまった。

かなり強く腰を打ったらしい。仰向けになったまま身動きができない。

馬車馬に取り付いていた兵が、その小さな男を見付けた。這いつくばる司令官に覆い被さる。彼の手に刃物はないが、その歯と爪を以って襲い掛かる。

禿げ鼠は理解できなかった。一体、何がどうなっているというのだ。私の命令に逆らえない様にと、あれほど嚴重に術を掛けたのに、小さな体躯で必死に抵抗したが、空しい努力である。

幾人もの歯が皮膚を引き裂く。

両の眼窩に指を突っ込まれ、眼球が潰れる音を聞いた。

ほんの一瞬、甲高い悲鳴が戦場に響く。

そして、この男にも暗闇が訪れた。

ユルグの侵攻は、ここに終わりを遂げた。

三月、ウティホ一家が旅立って一年。

バルバーレは戦争に辛勝せしめた。しかし国力は衰えている。将兵は四万五千にまで減り、代わりに六万数千もの俘虜を拘留している。その世話をするだけでも骨折りだ。

それでも王はユルグへの逆進攻を諦めていない。

「兵を休ませて一ヶ月が経った。そろそろ進軍したいと思うが、皆の意見を聞こう」

王宮の最奥、国王執務室には主立った面々が集まっている。

ウティホが恐る恐る進言する。

「どうでしょうかのう。もう戦を止める方向でお考えになつては」

「ならぬ。我が国土を侵した彼奴らきやつをこのまま許す訳には行かん」

キリムは半ば呆れている。

「ねえ、もう季節は芽吹き時だよ。のんびりしたいんじゃないかな、みんなも」

「春がどうだというのだ。季節なぞ関係ない」

「でもねえ……」

少年の視線の先では、マウ・リサがジョクーの方をちらちらと伺っている。

「ジョクー様、貴方様には何度も助けて頂きました」

「そうですな、貴殿をお救いしたのは確か三度で、それに大したお礼も頂いておりませんが、まあ、お気になさる事もないでしょう」

そんな彼らしい言葉に、王女は心からの笑みで応えた。

ジョクーは単なる風来坊である。しかしながら、押し寄せる敵軍の直中であつて一兵卒をも従えずに居残り、ユルグ軍を敗走せしめた英雄の一人でもある。王女が好意を寄せるにはそれで充分らしい。身分の差はあつても、若いマウ・リサには関係なさそうだ。

「うほん」

王は咳払いをして王女の気を引こうとしたが、乙女の耳には届かない。代わりにジョクーを睨んだ。元山賊は身に覚えのない殺気に戸惑い、慌ててキリムに話題を振る。

「ところで、あの魔法はよく効いてくれたな。しかも敵を味方に変えちまうなんて」

「僕も不思議なんだ。俘虜達から聞き取った話では、あの時、僕が何をしているのかよく分からなかったらしい」

「うーん、俺の工作は無駄だったか。じゃあ、どうして効いたんだ

ろう？」

「ただ、僕が凄い術を発揮するだろうとの噂が流れていて、みんな興味を持っていたそうだよ。護摩のせいで朦朧としながら、高台の上に立っている僕を見て、子を持つ者はその子を、そうでない者は幼い頃の自分を思い出していたって」

「やつぱり、あれは本物の……」

「御免よ」

頃合いを見計らった様に、ノンモが入室してきた。ウティホが驚いた様子で尋ねる。

「どうしたのじゃ。今日は一日寝て過ごすではなかったのか？」

「あんたはもう、人聞きの悪い事を言うんじゃないよ。客を連れてきたのさ」

「客？」

「こつちへお入りよ」

ユルグ軍伝令兵の恰好をした男が恐縮しながら入室する。

「誰じゃ、貴様は」

「はっ、自分は『今日もにこにこ伝言配達。みんなに運ぶ、幸せを』でお馴染みの駅伝屋の配達員であります」

ウティホはまたかと頭を抱えた。代わりにジョクーが尋ねる。

「おお、懐かしい。誰宛てだい？」

「ジョクー様であります」

「何だ、俺か。ならその伝言とやらを伝えてみるよ」

元伝令兵は背囊から書簡を取り出した。進歩の跡が窺える。

「ではお伝えます……」

『幼馴染みより、親友であり我が家族ジョクーに宛てる』

『我ら宗教改革派は、二月を以ってユルグ国の政権を奪取せり。法皇は断頭台の露と消えたり。我々は今後この役職をなくし、聖職者の領袖たる使徒長と、復活せしむ国王とで国政を担わんとす』

「我が事成れり、だ！」

ジョクーは小さくそう言って、卓の下で拳を握った。

「追伸があります」

「言ってみな」

「では、ええと……」

『僭越ながらこの私が使徒長となった。ついては途絶えて久しい王家の正当な後継者として、ジョクー・ズム・ユルグスの帰国を願う』全員が目を見開いた。晴天の霹靂とはこの事であろう。ウティホ夫婦に関しては、落とした顎を戻すのに手が必要であつた程だ。

当の本人はにやにやとしながら、ただ頭を掻いている。

王が尋ねる。

「ユルグ国国王、ジョクー陛下よ。御事は戦いを望まれるか？」

元山賊、今国王のジョクーは、返答の代わりに小さく両手を上げてみせた。

バルバーレ王は立ち上がって高らかに朗ずる。

「うむ、我々は確かに勝利した。ここに戦争の終結を宣言する」

王宮の最奥、国王執務室は喝采に包まれた。皆、満面の笑みを湛えている。

ウティホだけは泣いていたが。

もしも路に感情があれば、咲笑っている事だろう。この春晴れのように。

隊商は南を目指している。総勢八万に垂んとする大所帯である。キャラバン

一行はウティホ達とジョクーが出逢った三叉路に着いた。ここで二隊に別れる。

一方はアスマンへ。ウティホ一家はこちら。ギーゾや彼の呼び掛けに応じた大勢の商人達も一緒だ。

もう一方はユルグへ。俘虜になっていたユルグ兵達と共に、新国王となるジョクーと戦勝国大使としてマウ・リサが同道している。もしも二人が一緒になったら、敗戦国国王と戦勝国王女の夫婦という事になる。ウティホ家以上に面白い家庭が築けそうだ。

皆笑顔で別れた。再会を期して。一年前とは違う。誰もが明るい未来を確信している。

新しい三国時代の幕開けである。

了



## 第十章（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。

拙くて長ったらしい、しかもなかなか戦争が始まらない戦記モノですが、少しでも、ほんの少しでも喜んで頂けたなら、若しくは暇が潰せたなーと思って頂けたなら、これ以上の幸せはありません。

感想やご意見、罵倒、イヤミ、悪口などがございましたら、お気軽に書き込んでやって下さいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5676o/>

---

僕の魔法

2011年1月29日21時10分発行